

東広島市地域課題研究懸賞論文

農山村地域活性化における地域資源の利用度評価及びエコミュージアム手法の可能性
～東広島市豊栄町を事例に～

目次

I	はじめに.....	1
1)	研究背景.....	1
i.	日本における農山村問題の深刻化.....	1
ii.	農山村地域活性化の動きとエコミュージアム.....	2
2)	研究目的.....	3
3)	研究方法.....	3
i.	文献レビュー及びデータ収集.....	3
ii.	豊栄住民の生活環境に対する意識に関するアンケート調査.....	3
iii.	インタビュー調査.....	4
4)	本稿構成.....	5
II	日本の農山村問題及び農山村地域活性化の方法論としてのエコミュージアム.....	6
1)	日本の農山村問題と振興政策の動向.....	6
i.	日本の農山村問題及び地理学における農山村研究.....	6
ii.	日本における農山村振興政策.....	9
iii.	日本における農山村地域活性化.....	10
2)	農山村地域活性化におけるエコミュージアム手法.....	15
i.	エコミュージアムという概念.....	15
ii.	日本におけるエコミュージアムの代表事例.....	19
iii.	農山村地域活性化におけるエコミュージアム手法の位置づけ.....	21
III	豊栄の地域資源及び地域資源の利用度評価.....	23
1)	豊栄町の地域概要.....	23
i.	自然的状況.....	23
ii.	社会・経済状況.....	25
iii.	小括.....	30
2)	豊栄町の地域資源及び地域資源の利用度評価.....	31
i.	豊栄町の地域資源.....	31
ii.	豊栄の地域資源の利用度評価.....	33
IV	豊栄住民の生活環境及び地域活性化に対する認識.....	42
1)	豊栄住民の生活環境に対する認識.....	42

i. 地域住民の居住年数と意欲	42
ii. 豊栄町の良いところ	44
iii. 豊栄町の問題点	45
iv. 豊栄住民の地域活動に参加する意欲	48
2) 豊栄住民の地域活性化に対する認識	50
i. 豊栄住民の地域活性化に対する認識	50
ii. 豊栄住民の地域の発展方向に対する認識	53
iii. 小括	55
V 豊栄町におけるエコミュージアムの提案	57
1) 豊栄町におけるエコミュージアムづくりの導入必要性についての検討	57
2) 豊栄町におけるエコミュージアム構想案に適用する地域資源の再考	60
3) 豊栄町のエコミュージアム構想案	63
i. 基本理念	63
ii. 概念図	64
iii. 仕組み	65
iv. 目標像	71
4) 豊栄町エコミュージアム構築に向けた主な課題	72
5) 豊栄町におけるエコミュージアム手法の可能性についての検討	73
VI おわりに	75
謝辞	78
注	79
参考文献	81
参考資料	83

表目次

表 1	調査対象者の属性（性別）	4
表 2	調査対象者の属性（職業）	4
表 3	調査対象者の属性（年齢）	4
表 4	豊栄町におけるインタビュー調査の概要.....	5
表 5	豊栄町の主要変遷.....	25
表 6	豊栄地区大字別人口（平成 25 年 9 月末現在）	26
表 7	年齢別人口表（平成 25 年 9 月末現在）	26
表 8	豊栄町の農家数の推移.....	27
表 9	豊栄町の年中行事.....	28
表 10	豊栄町主要プロジェクト	29
表 11	豊栄町の新しいまちづくりの基本目標	29
表 12	豊栄町における地域資源一覧	32
表 13	豊栄地域資源のピックアップ	33
表 14	第 1 因子から第 4 因子までの因子負荷量及び因子寄与率	34
表 15	各資源に対する重要度評価の平均点及び体験有無	37
表 16	年齢と地域資源の利用方法のクロス表	40
表 17	住民の豊栄町での居留意欲.....	43
表 18	年齢と豊栄の問題点のクロス集計表.....	47
表 19	年齢と参加したい活動のクロス集計表.....	49
表 20	年齢と地域活性化に対する考えのクロス表.....	51
表 21	年齢と地域の発展方向に対する考えのクロス集計表.....	54

図目次

図 1 エコミュージアム概念図	17
図 2 豊栄町の地図.....	24
図 3 30 地域資源の 4 つ基本因子の得点による類型化のデンドログラム	35
図 4 地域資源の評価クラスター別因子得点	36
図 5 豊栄住民の地域資源への重要度評価及び関わり度合い.....	38
図 6 豊栄町の地域資源の利用方法への認識	39
図 7 住民の豊栄町での居住年数.....	42
図 8 豊栄の良いところ.....	45
図 9 豊栄町の問題点	46
図 10 豊栄住民の参加したい地域活動.....	48
図 11 豊栄住民の地域活性化に対する考え.....	50
図 12 豊栄住民の地域発展方向に対する考え.....	53
図 13 豊栄町エコミュージアム構想案の資源利用イメージ.....	60
図 14 豊栄町エコミュージアム構想案の理念図	63
図 15 豊栄町エコミュージアム構想案概念図.....	64
図 16 豊栄町エコミュージアム構想案サテライト及びコア施設イメージ図.....	65
図 17 豊栄町エコミュージアム構想案の展開イメージ図.....	65
図 18 豊栄町エコミュージアム構想案構築に向けた主要課題.....	72

I はじめに

1) 研究背景

i. 日本における農山村問題の深刻化

日本では、1950年代後半以降に、農山村問題が出現してきた。当時、重化学工業化政策の推進につれて、エネルギー源を石炭、薪炭から石油に転換していった「エネルギー革命」が発生し、薪炭生産地としての農山村地域は就業や収入の機会を急速に失い、大量の労働力は農村から流出しはじめた。1970年代になると、農村の受難とも言うべき減反政策が登場し、さらにその後の農林業のグローバル化、農林産物の輸入自由化が農山村に大きなインパクトを与え、農山村は大きな変貌と深刻な危機に直面していった（保母、1996）。

農山村問題の中で、最も深刻な事態としてよく挙げられてくるのは過疎化である。過疎化は農山村の人口減少を促したと考えられ、現在、農山村の人口減少は経済高度成長時代「社会的減少」¹⁾という段階から出生数が減り、死亡数が出生数を上回る「自然減少」という新しい段階に入っている（保母、1996）。2030年には、人口が30%以上減少する県は12都道府県と予測している（農林水産省農村振興局、2008）。

そして、耕作放棄地の増加も農山村問題の固有な問題だと認識され、耕作放棄地の面積は平成22年には39.6万ha(概数値)となり、耕作放棄地面積率も平成2年から平成22年にかけて約2倍に増加している（農林水産省、2011）。また、農地や山林の不在地主化も進みつつある。

一方、グローバル化の進行により、それまでの過疎化・耕作放棄という現象に加え、地域住民の高齢化や集落コミュニティの崩壊等が進行したことで、新たな農村問題が発生するようになった。言い換えれば、現在、農山村は人口の自然減少、若者定住型就業機会の不足、耕作放棄と農地の荒廃や集落の崩壊等の様々な問題を抱えている。

中国・四国地方は過疎化が早くから進み、耕作放棄地率も20%近くまで上昇し（後藤、2009）、限界集落の数も多く、むしろ農山村問題の最先端に立っていると考えられる。広

島県において、振興山村（一部山村）に指定された市町村は14地区あり、県全体の市町村の60.9%を占めている²⁾。

ii. 農山村地域活性化の動きとエコミュージアム

前述したような深刻な実態に直面し、今日の農山村の問題を乗り切ろうとする対応が日本全土で現れている。農林水産省農村振興局では、近年農山村をめぐる諸情勢のなかで、各地域の共通する農山村振興にむけた主要な課題を山村地域の農林業再生、山村集落での生活機能の維持・確保、投資との交流、移住・定住の促進、または山村地域の歴史・文化・景観の保全・活用の四つに分類され（農林水産省、2010）、そういう課題に対して、各地域においては自分の地域に適用する手法で地域活性化事業を展開してくる。エコツーリズムの推進や都市と農村との交流の拡大や農林産資源のブランド化等もこうした動きである。なお、本稿では日本の農山村問題への対応策をすべて農山村地域活性化と統一して表記することにする。

こうした農山村地域活性化事業の中で、エコミュージアムという手法はその理念の新しさにより人々の注目を浴びている。エコミュージアムというのは、地域社会の内発的発展・持続的発展に寄与することを目的に、一定の地域において、住民の参加により環境と人間との関わりを探る活動と仕組みであり、地域の未来を創造するための新しい理念を持つ総合博物館である³⁾。その基本理念としては人々の生活と、その自然、文化及び社会環境の発達過程を史的に探求し、自然及び文化遺産等を現地において保存、育成、展示することを通して当該地域社会の発展に寄与することである。言い換えれば、エコミュージアムは博物館の仕組みをまねした地域づくりの方法の一つだと考えられる。ここにおいてはエコミュージアムについて簡単に説明しておいたが、詳しくは後述する。

本研究の研究対象地としての広島県豊栄町は一部過疎地域に指定され、少子高齢化等の問題に苦悩している。こうした現状に対して、地域社会のすべての資源を現地において保存、育成、展示することを通して当該地域社会の発展に寄与することを目的とするエコミュージアムは広島県豊栄町の地域資源を賢明に利用できる手法の一つだと考えられる。

2) 研究目的

以上のような背景をもとに、本研究は東広島市豊栄町を事例とし、地域資源を重視するエコミュージアム論を一つの切り口として、住民と豊栄町の地域資源資源との関わりの程度、または地域資源への利用度評価を分析する。さらに地域資源の活かし方や住民の地域活性化への考えなどをフィールドワークを通して明らかにする。それを踏まえ、研究対象地におけるエコミュージアムづくりの提案を練り出し、その課題や問題点を分析する。

3) 研究方法

i. 文献レビュー及びデータ収集

調査にあたって、まずは農山村問題や日本の農山村活性化、特にエコミュージアムに関する文献レビューをした。そして、文献資料や統計データ、国勢調査などにより研究対象地に関する基本情報を収集した。

ii. 豊栄住民の生活環境に対する意識に関するアンケート調査

本研究においては豊栄町を研究対象地とし、その住民の生活環境や地域活性化に対する意識及び住民と地域資源との関わり、利用度評価を把握するために、平成 24 年度広島大学総合科学研究科文理融合型学生独自プロジェクト（佐藤・趙・吉川による「豊栄町におけるオオサンショウウオを取り巻く環境保全とその活用に関する研究」）及び平成 25 年度広島大学総合科学研究科文理融合型学生プロジェクト（丸山・佐藤・趙による「源流域における水文化学的アプローチによる健全な生態系の評価と保全」）の一環として、平成 25 年 2 月から豊栄町全住民を対象に「豊栄住民の生活環境に対する意識調査」というアンケート調査を実施した（末尾の参考資料）。調査票の配布・回収は平成 25 年 2 月から 5 月にかけて行った。このアンケートは、回答者の基本情報（性別、年齢、職業、居住地）や住民の豊栄の地域資源（自然・文化・歴史・農食等）に対する評価・地域活性化に対する考えやオオサンショウウオ・豊栄の自然への認識等を問うもので、豊栄町内の中学生以上に一人一部ずつ配布し、回答を得た。

配布地区は豊栄町の全地区、つまり清武地区、清武西地区、吉原地区、能良地区、乃美地区と安宿地区である。清武西地区の配布枚数は 381 枚、回収枚数は 305 枚であり、清武地区の配布枚数は 800 枚、回収枚数は 503 枚であり、吉原地区の配布枚数は 439 枚、回収枚数は 327 枚であり、能良地区の配布枚数は 250 枚、回収枚数は 189 枚であり、乃美地区の配布枚数は 950 枚、回収枚数は 348 枚であり、安宿地区の配布枚数は 503 枚、回収枚数は 374 枚である。総計の配布枚数は 3323 枚、回収枚数は 2046 枚、回収率は 61.6% となる（表 1、2、3 に参照）。

表 1 調査対象者の属性（性別）

	男性	女性	無回答	計
性別	926	1017	103	2046

表 2 調査対象者の属性（職業）

	農林水 産業	会社 員	公務員・ 団体職員	パート・ア ルバイト	自営業（農林 水産業以外）	主婦・ 主夫	学生	その 他	無回答	無効	計
職業	256	406	90	167	153	473	83	266	138	14	2046

表 3 調査対象者の属性（年齢）

	80 歳以 上	70 歳以上 80 歳未満	60 歳以上 70 歳未満	50 歳以上 60 歳未満	40 歳以上 50 歳未満	30 歳以上 40 歳未満	20 歳以上 30 歳未満	20 歳未満	無回答	計
年齢	341	392	454	346	171	122	75	82	63	2046

単位：人

資料：アンケート調査に基づいて作成。

iii. インタビュー調査

本研究では、前記したアンケートの分析結果を掘り下げるために、豊栄各地域センター長及び東広島市豊栄支所の支所長を対象にインタビュー調査を行った。その概要は表 4 に示す。

表 4 豊栄町におけるインタビュー調査の概要

実施日時	平成 25 年 10 月 23 日
実施地点	豊栄町清武地域センター
対象者	豊栄町清武・清武西・吉原・安宿・乃美地域センターのセンター長 東広島市豊栄支所の支所長
主要内容	豊栄町の地域資源・問題点・地域活性化に対する認識 豊栄住民の生活状況、地域現状、住民意識等

資料：インタビュー調査により筆者が作成。

4) 本稿構成

本稿の構成は以下の通りである。Ⅱ章では日本の農山村が直面している問題及び農山村問題に関する研究動向、さらに農山村政策、農山村地域活性化について述べた上で、それらと本研究との関係について検討しつつ、地域活性化の方法論としてのエコミュージアムという理念について述べる。Ⅲ章では豊栄町の地域概要及び地域資源を概観しつつ、アンケート調査の結果をもとに、豊栄町の地域資源を類型化し、さらに豊栄住民と地域資源との関わり度合い及び地域資源の利用度評価を分析する。Ⅳ章では、豊栄町住民の生活環境及び地域活性化、地域の今後の発展方向に対する認識を分析する。Ⅴ章では、豊栄住民の意識傾向を把握した上で、豊栄町における地域活性化手法としてのエコミュージアム構想案を練り出し、その課題などを整理する。Ⅵ章で本研究のまとめを行う。

II 日本の農山村問題及び農山村地域活性化の方法論としてのエコミュージアム

1) 日本の農山村問題と振興政策の動向

i. 日本の農山村問題及び地理学における農山村研究

日本には、1960年代半ばから過疎が社会問題化してきた。日本の過疎は、1960年代、まずは中国・四国地方を中心とした西日本で顕在化し、5～10年遅れて、東北地方を中心とした東日本で過疎化が顕在化した（斉藤、1976）。類型から見れば、西南日本は挙家離村が多く人口減少も激しい過疎顕在型であり、他方東北日本は出稼ぎが多く人口減少のより緩慢な過疎潜在型と言われてきた（岡橋、1989）。さらに、若年層が流失した後の過疎地域が高齢化し、移住や死亡による第二次の過疎が進行し、そして農林漁業の停滞より、従来過疎地域でなかった地域まで過疎が進行していく第三次の過疎化が起きてきている（長谷川、1987）。過疎化は、人口減少が起きることで、農山漁村における村の地域共同管理システムを崩壊させ、つまり村における生産・生活の局面でのさまざまな共同生活を機能不全にさせてしまうのである（安達、1981）。

1970年代に入ると、次第に農村における高齢者問題が注目され始めた。高齢化も過疎化と同様に、農村地域固有の問題としてあげられている。地域的には、西日本における高齢化率が高く、その地域的偏在も指摘された（島越、2007）。国立社会保障・人口問題研究所の試算によると、総人口の高齢者比率が30%を超えるのが2033年であることから、農村は都市に比べ、30年程度高齢化が先行しているといえる（西川、2004）。

1990年代以降、限界集落の急増が新たな農村問題として人々の注目を集めている。限界集落については行政上明確な定義は確立していないが、大野氏（2005）の定義では「65歳以上の高齢者が集落人口の半数を超え、冠婚葬祭をはじめ田役、道役などの社会的共同生活の維持が困難な状態に置かれている集落」としている。言い換えれば、限界集落では、生産年齢人口の比率が低く税収が十分でないことに加え、高齢者人口の比率が高いために福祉医療費の支出が自治体の負担となり、集落を維持していくことがもはや限界に達しているとされる（後藤、2009）。そういう存続が危ぶまれるような集落は集落活動の衰退や農業の衰退、家屋や農林地の放棄等の問題がきわめて深刻し、集落としての機能もだんだん失われると考えられる。

過疎化や高齢化の加速化とともに、農山村の主要産業としての農林業も様々な問題を抱えている。土地利用型農業を中心に経営規模の拡大の遅れをはじめ、農家の所得の減少傾向、食料自給率はカロリーベースで39%と低迷している等の問題が挙げられる（農林水産省、2008）。

つまり、限界集落の出現している現在に至まで、過疎化をはじめとする現代農山村の抱える一連の問題の厳しさは一段と増しているといえる。

地理学分野における農村研究は多くの事例研究が蓄積され、新しい視角もたくさん提示されている。本研究は農山村問題と農山村地域活性化に焦点を当てるため、ここでは1) 農山村の変容、2) 農山村問題に関する研究、3) 農山村地域活性化に関する研究をふれた。

1) に関しては、まず、藤田（1986）は日本の山村を体系的に把握し、高齢化が著しく、人口の再生産にほとんど見通しをもたない山間村落はまもなく具体化とし、そのような地域を「社会的空白地域」と名付け、『社会的空白地域論』を提示した。岡橋（1989）は山村を現代における「周辺地域」の一つとして捉え、その存立構造を全体的に把握しつつ山村研究の課題なども提示された。保母（1996）は農山村の現代的状況について整理し、特に中山間地域の状況と課題を整理するとともに、農山村に対する政策論についても分析した。島越ら（2006）はフィールドワークを通じて、農山漁村の仕組みと村の変化、現状を説明しつつ、環境破壊等の問題にも言及した。小田切（2009）は農山村の現状を「人の空洞化」、「土地の空洞化」そして「むらの空洞化」と表現し、また多発している集落の限界化に取り組む鍵は「誇りの空洞化」を止めることになると述べ、地域産業の構築及び地域コミュニティの再編は農山村地域再生の方途と指摘した。

2) に関しては、集落レベルでの過疎化過程の研究が多く進められた。篠原（1991）は四国地方の山村を中心に、それぞれの過疎化過程と動向を解明した。西野（1994）は高齢化の進む山間村落の実態調査を進め、今日的な過疎問題の本質を探り、住民レベルに立った地域政策の必要性を主張した。また、耕作放棄地の分布パターンや発生要因を明らかにした研究も地理学者の関心を寄せた（後藤、2009）。1990年代以降、限界集落は新たな農山村問題として挙げられ、中・四国の集落をフィールドとして限界集落の現状や住民の生活課題についての研究も進められた。

農山村問題の深刻化が持続する一方、農村の質的側面も重視され、農村空間が質的特徴やイメージを商品化する動き、いわゆる「ポスト生産主義」が出現してくるとともに、農山村問題を乗り越える動きも出てきた。従って、3) 村おこしなどの農山村における地域活性化に関する研究が増えてきた。最近では、林業の振興、観光・リゾート開発などによる山村社会の維持に関する研究が行われ、多様な政策の展開も含めて、いかに山村地域の地域資源を有効利用して持続的発展を図るという課題に関心も集まっている（西野、2008）。例えば、三井田（1994）は過疎地域におけるむらおこしの全国的展開を概観しつつ、その問題点を指摘し、地域住民が主体となったむらおこしの重要性を提起した。保母は従来の過疎対策を検証し、内発的発展論を日本の現実に接合しながら、全国の中山間地域に対するアンケート調査結果から、中山間地域における地域活性化事業の現状と課題を分析し、今後の地域振興の方法としては複合経済の確立、農村の自律型振興、都市及び農村の共同事業の実施であると提言した。筒井（1999）は内発的発展論におけるチェックポイントを用いて、中国地方の過疎山村の一地域振興の実態についての分析を基に過疎山村における「内発的発展型」地域振興のモデル図を提示し、住民意識の形成の重要性を強調した。佐藤（2003）は既存の地域づくりの問点や課題を言及しつつ、今後の地域づくりにおいては、地域連携とともに地域の特性を如何に創造していくかが重要であり、また、新しい地域づくりの方向性として、地域資源を活用するという視点も含めたエコミュージアム手法が有効的であると述べられる。西野（2008）は山村研究の現代的視点を考察し、フィールド調査を通じて地域主義論や内発発展論をふまえ「むらおこし」の本質を探究する一方、20世紀末における山村の現状を分析しつつ、山村の持続性の形成可能性を探求している。松岡（2007）はむらの存続性議論をふまえつつ、生活課題の解決に対する協働的な対応仕組みを、多面的機能の持つむらをどのようにつくるかというむらづくりの方向性について論じる。梶田（2012）はヨーロッパにおけるボトムアップ型・内発型農村開発のあり方や論点を分析しつつ、Leader事業の効果性について言及することを通じて、現代日本の農村においてボトムアップ型・内発型農村開発を進める上での論点を示し、日本の農村開発に対する示唆を与えた。

日本の農山村問題や農山村振興についての議論は地理学においては多く見られるが、大部分の研究は現状の詳細な記述にとどまり、むらおこし事業が未だに展開されない一地域の現状を分析しつつ、地域活性化を提言する研究は管見の限りあまりない。本研究は農山

村地域活性化の手法の一つとしてのエコミュージアム論をふまえ、一つの村における地域資源の利用度評価を分析しながら当該地域の地域活性化方向を提言する。

ii. 日本における農山村振興政策

前述したように、日本全国には1950年代後半から深刻な農山村問題に取り囲まれた。したがって、1962年の全国総合開発計画より、「国土の均衡ある発展」が政策の基本理念とされてきたが、中期経済計画では「山村離島を含む地域格差の是正、産炭地の振興」といった各種地域の諸問題としての視点ももたれ、各種地域振興法における農山漁村振興策が展開されてきた（筒井、2013）。以下では農山村における振興法の中の代表的な法律について簡単に紹介したい。

1965年、山村振興法が公布され、その目的は山村の経済力の培養と住民の福祉の向上を図り、併せて地域格差の是正と国民経済の発展に寄与することを目的とした。さらに、1970年に議員立法により10年間の時限立法として過疎地域対策緊急措置法が制定された。この法律は生産機能及び生活環境の整備等が他地域と比較して低位にある過疎地域の自立促進を図ることにより、住民の福祉の向上、雇用の増大、地域格差の是正に寄与するという従来からの目的に加え、過疎地域が、豊かな自然環境に恵まれた21世紀にふさわしい生活空間としての役割を果たすとともに、地域産業と地域文化の振興等による個性豊かで自立的な地域社会を構築することにより、多様で変化に富んだ、美しく風格ある国土となっていくことに寄与することも目的としているところである。現在行われている過疎対策の法律は「過疎地域自立促進特別措置法の一部を改正する法律」という。有効期限は平成33年3月末日までとなっている（総務省、2013）。

中山間地域問題の登場に伴い、1990年代以降、中山間地域対策も農政上大きな課題となった（宮地、2013）。したがって、2000年に中山間地域等直接支払制度が開始された。これは中山間地域等の農業生産の不利な農用地をもつ一定条件を満たした農家等への交付金を支払う制度で、耕作放棄地の発生防止や将来に向けた農業生産活動の継続的实施など農業生産の維持を図るとともに、集落機能の活性化や多面的機能の維持・増進などを目指している（筒井、2013）。中山間地域等直接支払制度のこれまでの成果として、道路・水路の共同管理の充実、既耕作放棄地の復旧や集落の環境整備や活性化、認定農業者の育成、

住民意識の向上等が評価されているところが、高齢化が進む地域の農業生産活動等の維持が精一杯であり、生産性及び収益の向上や担い手の定着などのより前向きで継続的な農業生産体制を整備するまでに至っていない、あるいは、小規模な集落協定については、集落間連携や複数集落による集落協定の締結などによる集落機能の強化の必要がある等の課題も依然として存在している（農林水産省、2009）。したがって、中山間地域等直接支払制度が第2期対策（H17～H21）を経て、高齢化に配慮した、より取り組みやすい制度へと見直した上で、平成22年度より第3期対策として新たなスタートを切った⁴⁾。

以上のような農山村の地域振興法は一定の効果をもたらした一方、こうした法律にも限界性があると認識された。例えば、過疎法に基づく過疎対策事業は生活環境の改善や産業基盤の整備が中心で、とりわけ道路整備や学校を含む公共施設の建設に力を注ぎ、その結果として、過疎地域振興といえばハード整備が中心であるかのような偏った認識が定着した。さらに、農山村地域振興において優れた実績を残した地方公共団体は数多く見られるが、過疎地域自律活性化優良事例表彰などでも半分強は地方公共団体地方公共団体であることから行政主導の振興策が地域を画一化させたとも言える（作野、2013）。

一方、農村振興の課題のより多様化、複雑化を踏まえ、近年来、行政レベルの農村振興政策の理念や方向も変わってくる。例えば、必要な地域間格差の是正は追求する一方で、農村にある資源を有効に活用下地域の個性・多様性を重視、暮らしの利便性・快適性とともにも地域資源の保全や新たな価値の創造（農林水産省、2008）等の農村振興政策の新理念も検討されている。

以上を踏まえ、ソフト事業を重視し、住民主体の農山村地域振興策や地域資源をうまく活用する地域振興例も増えてきた。

iii. 日本における農山村地域活性化

①日本における農山村地域活性化の流れ

農山村問題が深刻化しつつあり、都市と農山漁村の経済的格差も顕在化してきたことを背景に、日本の農山村活性化に絶大な影響を与える内発的发展論が登場した。日本において、「内発的发展」という言葉を最初に使ったのは鶴見和子とされ、鶴見が提唱される内発

的發展思想は多系的發展を強調し、外發的發展型と異なった後發社会のあり方とされた。

また、玉野井芳郎（1979）により提唱した「内發的地域主義」もあり、地域の住民の自發性と実行力によって地域の風土的個性の作り上げや住民の地域に対する一体感及び地域の行政的・経済的自立と文化の独自性を重視し（西野、2013）、「下から上へ」の方向性を打ち出していくことも強調しながら、内發的地域主義による地域づくりの必要性を唱えた。

一方、宮本（1982）は地域住民自らの力を重視、内發的發展を地域自治時代の地域開発の方向とされ、その後内發的發展の原則を住民参加の制度の作成や福祉・文化・地元住民の人権等の総合的な目的を持つことや地域産業連関を図ることなどと整理した。と同時に、従来から行われた外来型開発は農山村に波及効果はなく、かえって地域の格差を拡大した例もあつたり、計画通りに建設が進まない場合もあり、かえって住民生活不便を強いたりするような現実が存在しているから、外来型開発のデメリットが認識されてきた。したがって、過疎化及び高齢化が進んでいる農山村は、自らの力で努力するしか地域發展の方途がないことが次第に分かってくる。村おこし・まちづくりの手づくりの運動が全国各地で始まり、内發的發展への試行が出現してきた（保母、1983）。例えば、長野県南木曾町では、過疎化が進んだ旧宿場町の町並みを観光資源とし、江戸時代の旅籠を旅館、民宿として再生させた（西野、2013）。前述したように、国レベルにおいても、いろいろな政策を試行されたものの、農山村問題は是正されず、その結果として、村に住む人々が自分たちの生活地域の課題を痛感されつつ、それへの対応の仕組みを模索するような動きが出現し、住民主体の地域振興策が増えつつある。例えば、大分県大山町（現・日田市）ので展開した「一村一品運動」は全国、特に過疎地域における地域振興の先発事例として、過疎地域振興の一つの道を示したという点が高く評価された。これらの動きは、外来型發展に依存できなくなったことに反応した地域の創意と工夫による独自の取り組みとして注目される（西野、2013）。

さらに、1984年から中小企業庁では地域小規模活性化推進事業（むらおこし事業）を推進し、全国の過疎地域が、いわゆる「むらおこし」に取り組むこととなった。「むらおこし」とは「過疎化の進む地域において、過疎化の状態を少しでも改善するために、地域資源を生かして、地域（集落）自らの内發的な取り組みによって行われる経済活動」と定義された（西野、2013）。このむらおこし事業は小規模企業の振興による地域活性化を図ること目的とし、商工会を中心に内發的な地域産業おこしを推進するような形となる。①特産品

等販路開拓支援事業、②商工会等地域むらおこしサミット事業、③広域連携物産展事業等が主な事業である⁵⁾。このように、1984年から各市町村の商工会がむらおこし事業を推進し、特産品づくりや観光開発等が考案され、「むらおこし」ブームが到来した。村おこしには、農林産資源のブランド化、バイオマス等の展開、特産品の生産・加工・販売、地域固有の希有作物の活用、耕作放棄地の活用、農地、農村景観、伝統文化等農村地域資源の保全・活用の推進、地場イベントの活用、グリーンツーリズムの展開で都市との交流を促進するなどの手法が挙げられる。このような勢いに乗り、農山村地域における地域資源の発掘と、住民主体の「村おこし」が始動した（筒井、2013）。

中小企業庁の推進されたむらおこし事業を除き、日本政府も1987年の四全総において、多極分散型国土の形成をめざし、農山漁村の多面的役割の発揮等の視点を提示した。このような視点を踏まえ、「活力ある生産・生活空間の形成」、「都市との広域的交流」、「国土管理機能の充実」などの面から農山村の地域活性化を奨励した（国土庁、1987）。

一方、農政における農山漁村地域振興策の展開や住民主体の村おこし事業の推進にもかかわらず、現代の農山村を取り巻く状況は、人口の流出、少子高齢化の進行等、厳しさは一段と増しているとされ、と同時に、グローバリゼーション一辺倒の世の中で、農村地域そのものの存続意味及び価値が薄れてしまうそうである。そういう現状をめぐって、日本の村の存続性を指摘する議論もなされてきた。

しかしながら、農山村はその土地に住んでいる人々にとっては自分の大事な生活空間であり、都市に出る人々にとって、農山村は自分の精神的な故郷であり、大切な存在である。そればかりではなく、農山村は「国土の保全、水源の涵養、自然環境の保全、良好な景観の形成、文化の伝承等、農村で農業生産活動が行われることにより生ずる、食料その他の農産物の供給の機能以外の多面にわたる機能」⁶⁾を持っているとされる。このような農山村の公益的機能評価論の高まりにつれ、農山村の存続必要性が再認識されるようになった。

また、農山村における地域資源に対する国民意識も大きく変化している。農山村の資源は、農山村地域に存在する農地、農業用水、農村景観、伝承文化、地域の農林水産品等の資源をさすが、こうした資源は多様性と土着性を持っているのも特徴である（林ほか、2005）。具体的に言えば、「豊かな自然・美しい景観」、「健康的な生活環境」、「地域に伝承された伝統的な文化・芸能」、「広い家屋など恵まれた住環境」、「新鮮で安全な農産物やそれらを原料とした特産物」等が農山村の地域資源としてよく挙げられる。むらの資源には

人々・家々をめぐる社会関係財が歴史的に堆積しており、同時にむらびとの生産生活を成り立たせる物的生産基盤としての役割が存在しているため、それらむらの資源はソーシャル・キャピタルだとよく言われる（池上、2007）。

前述したように、国民がこうした社会共通資本としての農山村地域資源に対する意識が変化し、特に中高年層を中心にスローライフに共感が高まるとともに、農山村における豊かな緑やきれいな水・空気等多様な資源に魅力を感じる人が増えつつあり、若い層であっても雇用さえ確保されるのであれば、田舎暮らしを楽しむために U・J・I ターンすることを厭わない人も増えている（林ほか、2005）。内閣府で実施した「生活者の観点からの地域活性化調査・啓発事業-団塊の世代が再チャレンジに果たす役割について-（平成 18 年度）」というアンケート調査の中で、地域資源の評価の結果として、自然環境・景観・生物・生態系の項目では、4 割り近くの市町村で一級といえるものがあると認識されている（農林水産省、2009）。一方、地域資源が地域活性化にはあまりうまく生かされていないため、活用方法や環境整備が急務と考えている市町村も 4 割にのぼる（農林水産省、2009）。以上から見ると、農山村に存在している地域資源がますます重要視され、こうした資源を積極的に掘り起こし、地域の特性を活かした地域振興を図る必要があると認識される。農山村における地域資源を活用する例として、棚田の価値を活かし、地域活性化へとつながっていくような地域が挙げられる。このような自分の住んでいる町の宝物と呼ばれる地域資源を見つけ、それを地域の活力、さらに地域発展の原動力に変えてくるような地域振興策が近年においてかなり流行し、高く評価されている。

さらに、団塊世代の定年退職が始まっているような事情を踏まえ、都市住民を含む国民の農山村への期待も高まっている。

総じて言えば、以上のような農山村に対する国民意識の変遷も含まれている様々な状況を背景に、農山村における地域活性化が要求されている。

②日本における農山村地域活性化の事例

前述したように、住民主体の農山村地域活性化が増えつつあり、農林水産省も農村振興局を設立し、農山村地域活性化プロジェクト支援交付金の交付や地域活性化データベースにより先進事例の紹介などの農村の振興を図る取り組みを行われている⁷⁾。ここでは農山村地域活性化事業が展開している幾つかの代表例を紹介したい。

山形県真室川町は山形県最北端に位置し、町の87%が山林で占められ、古くから天然うるしの自生地であった。町の高齢化率が2009年に31.6となった。真室川町は1980年から「うるしの主産地」づくりを目指し、町内に約1.3ha、2万本のうるしを植栽し、町の新たな産業として取り組み始めた（農林水産省、2009）。その後「うるし産業振興プロジェクト計画」を策定し、林業集落振興対策事業を活用して「うるしセンター」を建設した。町内には「うるしセンター」を核として、住民や学生、専門家等が参画するワークショップを開催し、うるしの植栽から漆器の販売まで一貫した産業を促進してきた。また、地域住民の参画による商品の開発、地元での販売の促進やうるしの掻き子及び漆器職人の研修生受入れ制度への支援等の様々な手段で、地域のうるし文化を守り、継承するようになった。と同時に、町の産業振興という目的も達成できる。こうしたうるしの植栽から漆器の販売まで地域が連携して農林産資源がブランド化に力を入れるところが評価されている⁸⁾。

福島県昭和村は総人口が1403人（2013年）で、高齢化率は55.4%（2009年）に達して、限界集落となっている。昭和村では昭和40年代から織物産業の衰退と技術継承の危機に瀕している「からむし」織業の現状を打開するために、「からむし織制度」を制定し、さらに、1994年に「からむし」の後継者育成と村民との交流を目的とした「からむし織体験制度」を発足させ、からむし織の技術の継承や製品の販売額の拡大等を目指している。それらとあわせて、村内の古民家を活用し、宿泊施設として貸し出しを行い、農業、山菜採り、茸狩り等の様々な「田舎暮らし体験プログラム」をも提供している。このように村が一丸となり、からむし織りという県指定重要文化財・国選定保存技術を軸とした多様な事業が展開されることにより、村への定住人口も増え、地域振興も一定の成果を取得した⁹⁾。

以上のような農山村活性化事業の実例から見ると、農山村地域活性化事業はだんだん定住・交流人口の増加、地域資源の発掘と活用、都市との交流・共生等の新しい方向へと発展してきた。農林水産省においても、農村振興施策の新たな方向性として、今後の農山漁村活性化施策の全体像を明確化するためのビジョンを策定し、「地域資源の活用と連携を軸とした地域の活性化」、「集落機能の維持」、「多様な地域資源・環境の保全」の三つの視点から、農山村の現状と課題の抽出を行い、農村振興施策の再構築に取り組むようになった。具体的にいえば、地域リーダーの育成、外部からのアドバイザーの派遣やプランづくり・実践への支援などの人材の直接支援、祭り・伝統・文化等の保全・復活等の新たな地域協働の形成への支援、農地・水・農村環境の保全と質的向上のための効果の高い共

同活動への支援、都市と農山漁村の交流の促進、地域経済活性化のための農商工連携の促進等が主な施策として挙げられる（農林水産省、2009）。

一連の流れから、今日における過疎地域振興は地域住民が主体の、自己決定を原則とする「地域づくり」へと移行しつつある（宮口、2000）。すなわち、行政主導ではなく、地域及び地域住民が主要的な役割を果たしていくのが今後の農山村地域活性化の新たな方向性だと考えられる。その中で、地域資源に着目した内発的な取り組みも増えつつある。住民が自ら地域に存在する資源を再認識し、また地域資源の保全・活用に力を注ぐタイプの地域活性化事業が農山村地域づくりの好例とされ、高く評価された。本研究の切り口としてのエコミュージアムという手法は住民参加によって多様な地域遺産を保全・活用し、生涯学習の場として地域づくりを進める運動体と定義され、まさに今日の農山村の地域づくりの新しい方向性に一致していると考えられる。

2) 農山村地域活性化におけるエコミュージアム手法

i. エコミュージアムという概念

①エコミュージアムの理念・定義・機能

エコミュージアム（Ecomuseum）という概念は1960年代のフランスにおける地方文化の再確認及び中央集権排除という思想に基づいて誕生した。その基本的理念は「ある一定の地域の人々が自らの地域社会を探究し未来を創造するための総合的な博物館」である（丹青研究所、1993）。エコミュージアムという用語は、人間を環境との関わりを扱う新しい理念を持つ博物館として、生態学（Ecology）と博物館（Museum）から造語が生み出されたのである（丹青研究所、1993）。なお、ecomuseumのecoはギリシャ語のoikosを語源としecology+economyを意味し（新井、1995）、つまり環境と経済の統合である（井原、2006）。前述した基本的理念をふまえ、エコミュージアムの発展的定義は以下の通りである。①エコミュージアムは行政と住民がともに構想し、具体化し、活用する手段であり、②自文化を再認識するための一枚の鏡であり、③自然において人間を表現される装置であり、④歴史、時間及びその環境を表現するものであり、⑤地域の遺産を保存する機関であり、⑥地域及び地域住民を研究する研究所であり、⑦地域の将来を探り学ぶ学校であ

る¹⁰⁾。

その目的と定義に基づき、エコミュージアムを三大機能により定義づけることもできる。まずは住民と外部の研究機関と協力している研究所であり、そしてエコミュージアムは地域の自然と文化に関する遺産を保存する保護センターであり、またエコミュージアム活動の参加により住民を地域のことに對してより深く勉強させる学校である¹¹⁾。

②構成要素・構造

エコミュージアムという概念の基本的構成要素として、地域(テリトリー)、遺産、住民、教育、民主的運営の五つのいずれも不可欠である。その中で、地域が最も重要視され、エコミュージアムが対象とする地域がある一定の文化圏を形成し、生計を成り立たせる領域である(丹青研究所、1993)。また、エコミュージアムにおける遺産は従来の博物館で展示される物品とは違い、地域の産業や動植物、無形遺産等も包括されている。住民も大切な構成要素として重要な役割を果たし、エコミュージアムは住民を除いて成立しないといえる。また、様々な学科や見地からの教育が住民を地域を再認識・理解させるための不可欠の一要素である。利用者と管理者、学識者の三つの委員会により民主的な運営も重要なポイントである。博物館としての収集保存・調査研究・展示教育普及活動、地域内遺産の現地保全及び住民の主体的な管理運営の三つの要素がバランスよく整い、かつ一体的に密接なネットワークを組んでいるのはエコミュージアムの理想的な姿であるとされる(大原、1999)。

その具体的構造としては、エコミュージアムはコアミュージアム(中核施設、博物館)、サテライトミュージアム(衛星博物館・園)とディスカバリートレイル(発見の小径)の三つの要素によって構成される。これらの要素はそれぞれ独自の性格と機能を持っている。コアは中核的な機能を持ち、地域の資源等の全体像を再現し、遺産などを保存する場として、展示、普及、情報提供、調査研究、収集保存、ミュージアムショップと利用者サービスといったような様々な活動を行う。サテライトは地域に残る歴史的遺産や地域の文化・産業及び自然等で構成され、それぞれ異なった運営組織を持っている。サテライトの対象としては、山岳・河川・森林等の自然遺産と町並み・史跡等の文化遺産及び農業・果樹園等の産業遺産である。こうした自然と人間との関係のうえで築き上げられてきたものを地域の「空間」の中で示していくことがエコミュージアムの最大の特徴と言える(丹青研究所、1993)。ディスカバリートレイルは来訪者が地域の自然・文化などを観察できる小径であ

る。発見の小径は展示・普及等の活動により、エコミュージアム全体像の理解を深めるための重要な役割を持っている。その概念図は以下の通りである。

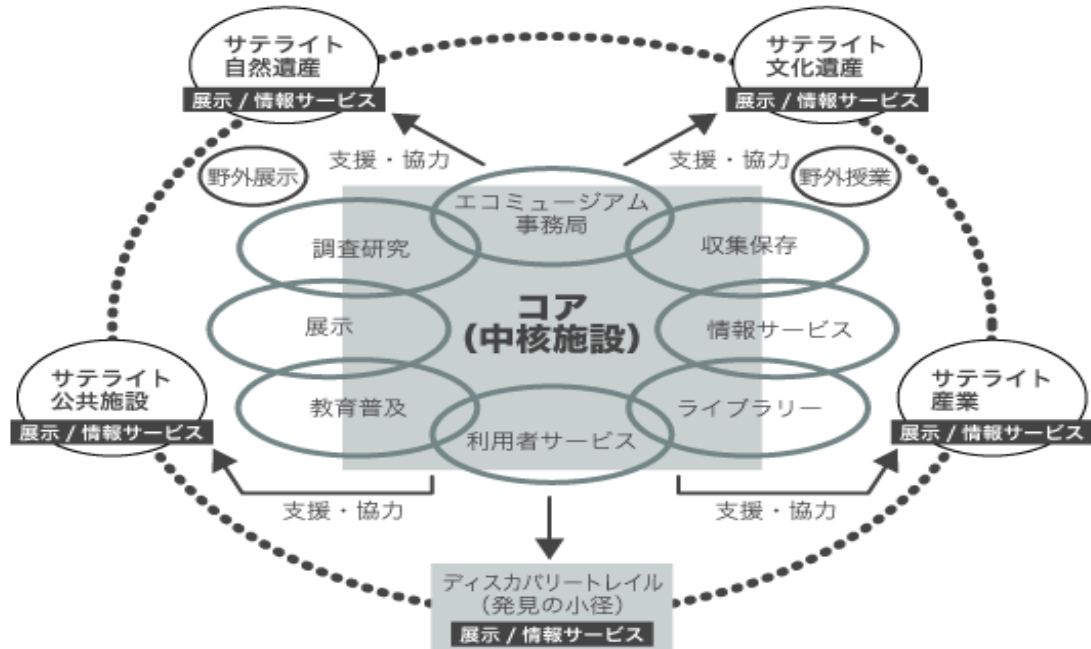


図 1 エコミュージアム概念図

出典：丹青研究所『ECOMUSEUM～エコミュージアムの理念と海外事例報告』、p28

③管理運営・活動内容・諸相

エコミュージアムの管理運営について、その基本条件是行政と住民の二重入力方式であり、その運営組織としてはまずエコミュージアム全体としての運営組織（エコミュージアム協議会）が必要であり、そのほかの運営組織やコア、サテライト、発見の小径に協力や援助を行う機関（エコミュージアム協力会・友の会）も必要である。その中で、エコミュージアム協議会は住民と行政で組織され、学術委員会、利用者委員会、運営委員会と事務局をおき、コアやサテライト館長会議を開催し、全体の管理運営を行うのは理想的な形とされる。

研究・保存・展示、そこで受け継がれてきた生活環境、生活様式の代表的な文化と自然の調和を図り活用するというエコミュージアムの機能を実現するために、下記のような活動は重視されている。①エコミュージアムの動産・不動産のリスト作成。②土地を代表する収蔵品や資料の物理的な保存及び展示。③展覧会の企画、その他の普及活動。④学校・大学の協力を得て、普及活動の企画と実行。⑤エコミュージアムのある地域の教育的な紹

介等の活動が挙げられる（丹青研究所、1993）。

エコミュージアムの諸相として、海外と日本においてもいろいろな形を示している。海外では、自然公園型、共同体分散型、都市型等のエコミュージアムある。日本においては、地域まるごと博物館（白老町）や生涯学習の町（本荘市）、環境教育の町、町並み保存型、遺跡保存型、産業遺産保存型、地場産業振興型、自然環境保存型等の様々の類型のエコミュージアムが存在している（新井、1995）。当然ながら、設立主体により分類する場合もある。

④エコミュージアムと従来型博物館の違い

エコミュージアムは博物館の様子をまねした仕組みであるが、従来型の博物館と相違しているあり方を示している。まず、伝統的博物館の基本的な目的は資料の保存と展示であるが、エコミュージアムは地域特性に焦点をおいて保護することを基本目的とする（新井、1991）。普通の博物館は建物として存在しているのに対して、エコミュージアムは「屋根のない博物館」と称している。また、普通の博物館は他のところから収集品を持ち入り、展示するのが一般であるが、エコミュージアムでは、地域のすべての資源を現地で保存し、地元住民及び外人に展示するのが通常の形である。それから、伝統的博物館を提供する人は専門家であり、訪問者、観覧者が主な利用者であり、つまり情報を提供する側と受ける側がはっきりと壁によって仕切られるが、エコミュージアムではこうした利用者と提供者の間に存在している壁がない（新井、1991）。なお、活動計画のねらい等の様々の側面から見ても、エコミュージアムと伝統的博物館と違っている。

⑤日本におけるエコミュージアムの発展及び課題

日本におけるエコミュージアムその概念の発展について、まずは、1974年鶴田総一郎により「環境博物館または生態学博物館」と紹介され、1986年新井重三は「生活・環境博物館」と意識し紹介され、90年代に普及してきた。その時期はちょうどバブル崩壊の時期であり、高度経済成長の波の中で開発されたリゾートとかテーマパークもバブルの崩壊により明日の運命が問われ、環境問題と地域開発の整合性が最も問題になっていた。一方、地域活性化や村おこしなどに関心や機運が高まる時期でもあり、「ふるさと村」を主流とするふるさと創生事業も盛んになった。こうした時代の流れの中で、自然にやさしいまちづくり、生活優先の村おこしを模索する地方自治体の眼にとまるものとして浮上しているのが

エコミュージアムの理念であろう（丹青研究所、1993）。

エコミュージアムの現代日本における意味を考量してみると、そもそもエコミュージアムという理念は住民参加が前提条件であり、資源の有効利・活用が奨励され、地域振興への貢献度が重視される。その最大の利点は、地域の遺産を保存し発展させることに責任を、住民達自身に認識させていく点である（丹青研究所、1993）。地域の自律性と住民活力の創出が求められ、自分のアイデンティティーも希薄となっている現代的な状況をめぐって、エコミュージアムは自分さがしの舞台として有効であり、既存の資源等をめぐるコミュニケーションとネットワークは現代社会にとって重要なものであり、地域活動の中で学習し、次世代の住民に伝えるという学習活動も生涯学習時代の要求に応じられるし、さらに賢い住民を育てることができるという点も有意義である^{1 2)}。地域貢献度の側面から見ると、エコミュージアム活動は地域経済に波及効果をもたらすことができると考えられる。また、エコミュージアムが新しい観光の一形態として、外人（観光客）のまなざしによって受け入れ側の住民は自分の文化に気づき、再認識し、誇りを持つことができるし、さらに、こうした個性的文化を大切にすることが地域づくりに貢献でき、新たな環境文化をも創造できるようになる（吉兼、2000）。

エコミュージアムの存立基盤を領域、つまり地域に求めることから、本質的にはまちづくりと同様な意味を持っていることであり、あくまでも地域に状況づけられた創作行為であるため、90年代に入ると、多くの自治体が急速にエコミュージアムに関心がもたれるようになってきた（大原、1999）。日本においてエコミュージアムは地域社会の発展を目的とし、エコミュージアムに近い理念のもとに運営、または構想・計画されている事業もみられ、その展開状況はさまざまである（鳥井ほか、2008）。

エコミュージアムに取り組んでいる自治体が多いが、問題点や課題も存在している。まず、地域資源を活かすサテライトをその地域独自の視点から評価するための地域ごとのサテライトの認定制度の確立が必要だとされる。また、エコミュージアムは、住民の意思決定の場をどのレベルにするのか、その上で地域資源のネットワークを図る広域連携のあり方を探ることも課題である。さらに、パートナーシップを育てる組織の支援も必要である（井原、2003）。

ii. 日本におけるエコミュージアムの代表事例

日本におけるエコミュージアム理念に基づいて進行中の例として、まずは日本のエコミュージアム事業の先駆けとしての山形県朝日町を取り上げる。朝日町は山形県の中西部に位置し、高山植物などの豊富な自然・歴史遺産を持ち、町の経済は農林業を中心に発展してきたが、産業振興を図り、町の特産物としてリンゴやワインの生産も盛んである（丹青研究所、1993）。一方、朝日町は90年代に過疎地域に指定され、高齢化・少子化・結婚難等の問題と相まって、基幹産業としての農業もたくさん抱えている。こうした課題を解決するために、町では果樹の振興をはじめとする農業振興に特に力を入れ、工業面においては積極的に工場を誘致し、定住対策の実施等の観光の面からもしろいろな取り組みを試みたが、地方はますます困難になりつつある。結局、1989年度から総合開発基本構想・基本計画を策定し、エコミュージアムの考え方を町づくりの基本理念として、「朝日町全体が博物館、住民一人一人が学芸員」のテーマのもとにエコミュージアム運動に取り組んで、1991年に正式的にエコミュージアム事業をスタートし、日本のエコミュージアム事業の先駆けとなった¹³⁾。

朝日町にとってのエコミュージアムとは、「楽しい生活環境観」の具現であり、町に住む人々が町の自然や文化、産業を学び、理解して、資源を生かしながら楽しく誇りを持って生活できる“まちづくり”を目指すことである（丹青研究所、1993、p98）。エコミュージアム事業を展開に際し、その具体的取り組みとして、エコミュージアム事業に利用できる自然や文化、歴史等のあらゆる分野の資源を掘り起こすために、町には全住民に“あさひまち宝さがし”を募集し、住民ならではの力を発揮させ、それはエコミュージアムの調査活動にも兼ねる。また、「住民一人ひとり学芸員」にこだわり、「エコミュージアムルームだより」やエコミュージアムノートなどの資料を住民に配布したり、シンポジウムを開催したりするなどの活動によって、エコミュージアムの普及事業に工夫している。その運営事業といったら、運営母体としてのNPO法人朝日町エコミュージアム協会をはじめ、朝日町や案内人の会、関連する団体や個人と連携しながら様々な調査・普及事業を展開し「朝日町エコミュージアム」を充実させている。朝日町エコミュージアムはコアセンターを設置し、大朝日岳エリア、大沼浮島エリア、空気神社エリアなどの16エリアにサテライトを分けている。

日本で最初にエコミュージアム事業に取り組んだ自治体として、朝日町エコミュージアムは自分の特徴を持っている。一つは町の最上位計画である長期総合計画にエコミュージアムの理念を取り入れていることであり、一つは民間のエコミュージアム研究会が自然発

生し、行政が先行しながらも、行政とともにエコミュージアムによるまちづくりを進めていることである（菅井ほか、1999）。

もう一つの実例は長野県南端にある阿智村である。阿智村には南信州最大の温泉郷である昼神温泉があり、日本百名山のうち28座を展望できる富士見台、「園原」史跡など多くの自然文化資源に恵まれているが、他の農山村と同様に高齢化の進行や集落の維持が危うくなっている状況を面している。したがって、2009年から村の第五次総合計画で、まちづくりの目標を「一人一人の人生の質を高められる持続可能な村づくり」とし、さらに村づくりの柱に「全村博物館構想」の推進を据えることとした。このように、もともと「園原」の史跡保存と活用をめぐる動きから始まった「全村博物館」構想が正式的に定着した。阿智村版エコミュージアム、つまり「全村博物館構想」は「まるごと公園化構想」、「まるごと博物館化構想」と「まるごと学園化構想」の三層構造から構成する。

阿智村エコミュージアムの具体的な活動として、村内を春日コース、智里東コース、浪合コース等の8つのコースに分け、それぞれの地元の熱中人が自分の暮らす地域や文化財や自然景観の案内を行い、それによって、地域の人々も新たな自信を生み出すようになったようなことが挙げられる。阿智村では、住民が主体の村づくりを進めるために、5人以上の住民によって地域的課題の学習や実践を行う地域自治組織があり、「全村博物館策定委員会」もその一つであり、村のエコミュージアムづくりに関わっている。また、「阿智全村博物館推進協議会」をはじめ、村役場や大学、村内の各地区の7つの自治会及び他の団体、熱心の持つ個人とともに地元の街並みや遺跡などを保存し活用するに力を注ぎ、地域の維持・再生を目指し、エコミュージアムの普及・教育活動等を展開し、官民一体でエコミュージアム活動を進めている¹⁴⁾。

現在、日本全国においてエコミュージアム活動あるいはエコミュージアムの精神の持つ地域づくりに力を入れる自治体の数は百以上と称され、その考え方を活かした施設の整備等が各地域において試みられてきている。

iii. 農山村地域活性化におけるエコミュージアム手法の位置づけ

本研究は農山村地域に焦点を当てているため、農山村地域活性化におけるエコミュージアム手法の位置づけを明らかにする必要があると考えられる。日本の農村は生産地域としての捉え方が強く、優れた景観や伝統、文化、歴史保全の面が弱く、一方、農山村地域に

は平日にあまり注目されていない資源が多く残されているのも実情である。それ故に、これら身近に存在する資源と農山村の多面的機能を結びつけるのは農山村地域づくりの望ましい道だと考えられる。井原（2003）は「エコミュージアムは小さな資源を地域資源として地域で活かし、しかも多様な資源を多様な人たちが活かし、誇りある自信に満ちた「小さな産業政策」とも言える」と述べ、つまり、地域資源を活用し、それらを連携させながら地域活性化を行う形態としてエコミュージアムがある。

さらに、都市と農村の交流等の村おこし活動と異なり、農村地域でのエコミュージアムの展開は単なる都市住民との交流の場を超えて、農村地域の再生を「国民的課題」としていることが特徴である（井原、2003）。また、エコミュージアムは「二重入力システム」という住民と行政、専門家ともに協力し合って事業を展開する方式を重視し、それは今後の地域住民が主体の地域活性化の方向性に合っていると考えられる。したがって、本稿ではエコミュージアム論を切り口として、農山村の地域資源に焦点を当て、研究対象地の地域資源の利用度評価に対する分析を行い、それに基づいてエコミュージアム手法の可能性について検討したい。

Ⅲ 豊栄の地域資源及び地域資源の利用度評価

1) 豊栄町の地域概要

i. 自然的状況

①地理的位置と交通

広島県東広島市豊栄町は、北緯33° 33′、東経132° 49′、広島県のほぼ中央部に位置し、北は三次市、南は東広島市福富町と河内町、西は安芸高田市と各山嶽にて境を接し、東は広島市世羅町と接している。豊栄町は広島市内から59.5km、JR山陽本線西条駅から23kmの距離があり、西条から豊栄まで車で30分程度に到着できる。標高390m、東西南北共に約11km、総面積総面積は72.56km²である。町内は別府、乃美、鍛冶屋、清武、飯田、吉原、安宿、能良の八つの大字に分けられ、山林、原野が総面積の約73%、農耕地は約14%、宅地その他は約13%となっている。なお、豊栄町の位置及び地形等は図2で示す。

交通に関しては、往古は山陰、山陽を結ぶ中間地点として、かなり重要な位置、役割を持っていたと思われる。現在においては、一般国道375、486及び県道主要地方道28、29、60、一般県道161、341、347、342が通っている。

②特色のある豊栄の自然

豊栄町は吉備高原の西部に位置し、世羅台地の西部にあたる賀茂台地に立地している。地域の大半は標高400mから500mの間の盆地であり、東に標高756.6mの天神嶽、南に755mの板鍋山、西に733.7mの亀ヶ丸など大小支脈的山系によって四方を囲まれる。町内の主要河川は吉原川が北流して江の川に、三篠川が西流して太田川に、棕梨川が東流して沼田川にそれぞれ合流している（豊栄町、2004）。豊栄盆地一帯は広島県の主要河川の分水嶺となり、太田川・江の川・沼田川の主要水源地帯となり、水環境に恵まれている（豊栄町、2004）。気候に関しては、豊栄町は内陸にあるため、昼と夜、冬と夏の寒暖の差は激しい。

豊栄は四季折々豊かな自然に恵まれ、こうした地形と気候のおかげで、豊栄は特色のある特産物を持ち、動植物の種類が多いし、貴重な物種もたくさんあり、特色のある自然を形成している。例えば、豊栄は広島県の主要河川の分水嶺として水資源が豊富であり、その水域には国天然記念物のオオサンショウウオの生息地であると確認される。

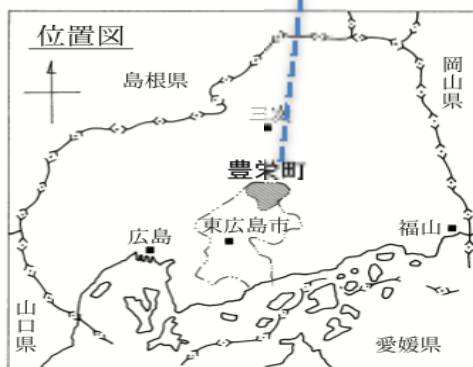
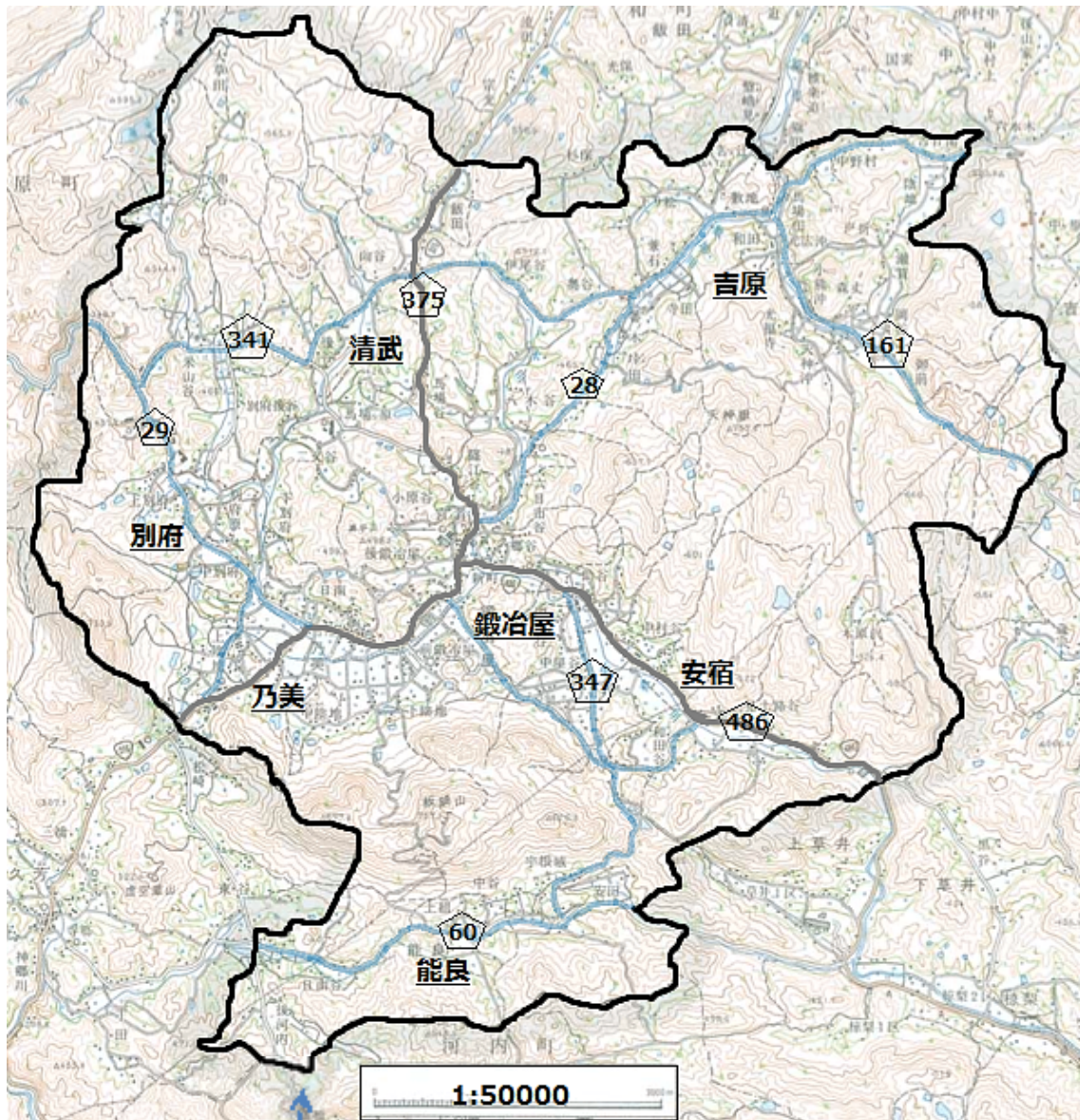


図2 豊栄町の地図

資料：東広島市 HP の資料及び『豊栄町史 通史編』の内容により筆者が作成。

また、町内には約 540 か所のため池があり、水生植物、湿地植物及び池内の生物などの珍貴の生物資源数多く存在している。また、中生層地、古生層地が分布しているため、カザグルマ、キンラン等の希少植物がそういう地層に生息している。町内には多種類の野鳥を見かけることができるし、ミサゴやオオタカなどの希少鳥類も生息している（豊栄町、2004）。

ii. 社会・経済状況

①歴史と沿革

豊栄町はかつて広島県賀茂郡に存在した自治体であり、2005 年 2 月 7 日に東広島市に編入されたことに伴い東広島市豊栄町となる。その沿革は表 5 に示す。

表 5 豊栄町の主要変遷

年	月	出来事	主要変遷
1871年	一	郡制改革	豊田郡に属した乃美村、別府村、能良村、清武村、鍛冶屋村、安宿村と世羅郡に属した飯田村、吉原村が存在した
1889年	4	町村制の施行	乃美村、別府村、能良村が合併して乃美村となり、清武村、鍛冶屋村、安宿村は合併して川源村となり、飯田村と能良村はそれぞれ上田村、吉川村に編入された
1943年	11	合併	合併による村廃置にともなう「豊栄村」と命名された
1949年	1	合併	豊田郡川源・乃美両村が合併して豊田郡豊栄村が成立した
1949年	4	町制施行	豊田郡と豊栄村は町制を施行し豊栄町が誕生した
1955年	3	合併	世羅郡吉川村の吉原地区、上田村の飯田地区を編入合併した
1956年	4	郡の再編成	豊栄町は豊田郡から賀茂郡へと編成された
1971年	8	町の境界変更	大字乃美の一部を賀茂郡福富町へ分離し、同町大字久芳の一部を豊栄町へ編入した
2005年	2	東広島市合併	賀茂郡黒瀬・河内・福富各町及び豊田郡安芸津町とともに東広島市に編入され、東広島市豊栄町となった

資料：インタビュー調査及び『豊栄町史 近現代編』より筆者が作成。

②世帯数及び人口

日本の第一回国勢調査が行われた 1920 年から現在に至まで、豊栄の人口は 1947 年に最高人口の 9315 人が示され、その後農山村に属する豊栄町の人口は全国的風潮に沿って漸

減の一途をたどり、現時点の大字別人口並びに世帯数は表6に示す。人口の内訳として、男は1690人、女は1981人、0～14歳の人はずか7.3%であり、15～64歳の人50.6%を占め、65歳以上の人は42.1%である。(表7に参照)

表 6 豊栄地区大字別人口 (平成 25 年 9 月末現在)

大字名	世帯数	人口	男	女
豊栄町安宿	233	529	244	285
豊栄町飯田	30	64	28	36
豊栄町鍛冶屋	120	277	128	149
豊栄町清武	412	950	435	515
豊栄町能良	141	310	131	179
豊栄町乃美	327	776	383	393
豊栄町別府	100	245	106	139
豊栄町吉原	210	520	235	285
豊栄地区計	1,573	3,671	1,690	1,981

出典：東広島市統計資料。

表 7 年齢別人口表 (平成 25 年 9 月末現在)

		0～14歳	15～64歳	65歳～	合計
性別	男性	8.00%	56.40%	35.60%	1690
	女性	6.70%	45.70%	47.60%	1981
合計		268	1859	1544	3671

資料：東広島市統計資料より筆者作成

③産業

豊栄町の主要産業は農業であり、古来主食の米をはじめ、麦・大豆・小豆・栗・きび・そば等の栽培や、茶・棉・たばこ等の特殊作物も栽培されている¹⁵⁾。水稻・麦類・いも類・豆類を除き、農業の副業として野菜・果樹・花木も栽培、出荷販売している。広島県の主要農業地域に属する豊栄町では、農家と言えば、ほとんど専業農家であったが、60年代から町内に各種の企業が起こされ、工業の発展により兼業農家が増加してきた(豊栄町、2004)。現在の農家数は表8に示す。

こうした離農人口の増加、特に若年層の離農により、豊栄の農家数は減少という傾向を示し、老人の農家戸数がかかなり多くなってきた¹⁶⁾。農家数の減少をはじめ、古くから営まれた豊栄町の農業において、耕作放棄地の増加、担い手不足・後継者不在等の深刻な状況

が醸し出せるようになった。そういう危機的状況を打開し、地域と農業を活性化するために豊栄には続々に地区別に農事組合を設立するようになった。こうした農事組合法人は農業経営規模の拡大、低コスト化の実現、農産物品質の確保及び販売の拡大、収益構造の改善、担い手の育成を今後の課題として積極的に事業を展開している¹⁷⁾。

表 8 豊栄町の農家数の推移

	2005 (平成17)					2010 (平成22)				
	専業	第一種兼業	第二種兼業	自給的農家	計	専業	第一種兼業	第二種兼業	自給的農家	計
総数 (戸)	169	60	449	146	824	183	32	344	149	708
構成比 (%)	20.5	7.3	54.5	17.7	100	25.8	4.5	48.6	21	100

注 第一種兼業・・・農業を主とする兼業農家

第二種兼業・・・農業以外を主とする兼業農家

自給的農家・・・経営耕地面積が30a未満かつ農産物販売金額が50万円未満の農家

出典：農林業センサス（2010）

豊栄町の林野面積が広く、この広い面積の上に立つ林業は、木材・木炭の生産から木材薪炭のほか肥料としての柴草、松茸をはじめとする茸類等々、農業に次ぐ産業となっている。主な樹種は、針葉樹の赤松、杉、樅、広葉樹の檜、アベマキ、櫟、栗等であるが、針葉樹は建築用材、土木用材として、広葉樹は薪炭用材として広く利用され、林業の収入の主流である。主な林産物として、木材、竹材、松茸、椎茸、木炭等が挙げられる（豊栄町、2004）。赤松林の多い豊栄町の森林では、古くから広島県の松茸の主産地の一つとして挙げられ、松茸栽培の講習会をも開催するなど増産に努めていた（豊栄町、2004）。

畜産業においては、豊栄は藩政時代より農業の労働力源として、農業の役に多くの農家で飼養され、その他に、乳用牛・肉用牛・豚・綿羊・山羊・兎・鶏・蜂等を飼養している農家もある。

商業の現状としては、町内では太平洋戦争後、道路網の整備の進行につれ、清武地域の沿道や乃美地域に商店の開店が増え、商店街も拡大してきたが、近年では農協、JA、大型スーパーの宅配便サービスの提供により衰退する傾向にあるようである¹⁸⁾。町内では、商工会が結成され、主な事業として経営改善普及事業と地域総合振興事業を行っている。その中で、地域総合振興事業では豊栄ヘソまつり、豊栄まつりへの協賛、賀茂台地フェア、親睦、社会福祉活動、商業・観光振興のほか、青年部、女性部活動等の推進を図っている（豊栄町、2004）。

豊栄町における工業については、良質の粘土を産出することから、瓦製造が発展したこ

とはよく知られ、木材に関係する製材業、製樽業、建具製造や林産物から加工される和紙製造、機織り等が挙げられ（豊栄町、2004、p140）、工業の種類は各分野にわたっている。今は佐竹鉄工（株）、広島市工業（段ボールを作る企業）、マシノ工業（マシノスチール）豊栄工場、（有）有原鉄工所等の企業があるが、小規模の工場が多いことが特徴の一つである¹⁹⁾。

鉱業については、豊栄町の地下資源は鉄、蠟石、珪石、タングステン等があり、良質の粘土、花崗岩、水晶等がよく知られている。

④年中行事・民俗

豊栄町では、農村的な要素の含まれている伝統的な生活文化が昔から現在まで伝承され、それが豊栄の民俗文化の構成要素となっている。表9で示しているのは豊栄町の代表的な年中行事である。

表 9 豊栄町の年中行事

分類	代表例
正月の行事	初詣、カンシ、寒稽古、とんど、おたんや
春の行事	豆撒き、針供養、雛祭り、月遅れ雛祭り、わらび狩り、降誕会、茶摘み、シバザクラ祭り、牧場祭り
夏の行事	御霊会、田植え、麦刈り、代みて、虫送り、宮島さん
盆の行事	盆踊り
秋の行事	秋祭り、神楽、松茸狩り、稲刈り、鎌仕舞い、豊栄祭り、はしか落し
冬の行事	小祭り、胡子講、餅つき、つごもり

資料：『豊栄町史 近現代編』に基づいて筆者が作成。

⑤まちづくりの歴史

豊栄町は東広島市に編入する前に、町独自の計画が徐々に作られていた。町内は経済高度成長期から急激な人口流出、特に若年層人口の減少を背景に、昭和54年に「豊かな自然に調和した活力のあるまちづくりをめざして」を主テーマとする「豊栄町長期総合計画」を策定した。その後、平成12年度を目標年次として、「豊栄新長期総合計画」を策定し、「活力に満ちた快適なまちづくり」、「特色ある教育・文化のまちづくり」、「新しい豊かさを求めたまちづくり」を推進するようになった（豊栄町、2004）。

一方、山陽自動車道の開通や東広島中核工業団地の建設等により、周辺市町村での発展気運が高まった。このような社会的圧力に、豊栄町はゴルフ場開発・温泉地開発・大草田

スポーツレクリエーションプロジェクト・ふるさとの村構想や国道 375 号線バイパスでの商業拠点づくり等の各種のプロジェクトを展開し、同時に既存産業の育成、Uターン受け入れ体制の確立、生活環境の整備や企業誘致等を積極的に推進することにより、町の活性化を目指していた（豊栄町、2004）。豊栄におけるまちづくりに関する主なプロジェクトは表 10 の通りである。

表 10 豊栄町主要プロジェクト

プロジェクト名	主旨	内容
ふるさと村プロジェクト	中心市街地の開発と整備	行政・文化・スポーツ施設の配置、高齢者福祉施設や健康センターの整備、小学校、給食センターの再整備、教育施設や内容の充実
ゴルフ場開発プロジェクト	ゴルフ場及び温泉の開発	ゴルフ場及び温泉地の開発、ミニ宿発施設の建設
天神嶽ふれあいプロジェクト	自然とふれあう、登山の推進強化	登山道や案内板などの整備
板鍋山プロジェクト	観光開発	林道整備、説明板の配置、炊飯場の建設等
吉原地区拠点整備プロジェクト	地区のよりどころとなる施設設置 土地性を活かした土地利用を行う	野外活動センター、ふれあいセンター、公営住宅の建設等
清武西地区拠点整備プロジェクト		
安宿地区拠点整備プロジェクト		
能良地区拠点整備プロジェクト		
大草田3町プロジェクト	大草田地区に豊栄、向原、三和の3町の活性化につながるプロジェクトを推進	スポーツ、レクリエーション施設の建設
棕梨川ビューティープロジェクト	棕梨川の美化推進	棕梨川の有効利用

資料：『豊栄町史 近現代編』の内容により筆者が加筆

しかし、国際化、情報化、高齢化、住民ニーズの多様化が加速的に進行している一方、人口減少や高齢化が進む中で集落機能の維持や青少年の健全育成も大きな問題になっている。このような社会環境や住民意識の変化を背景に、2000 年に、「第三次長期総合計画」が制定された。その「第三次長期総合計画」の主な項目は以下の通りである。(1) 本町及び地域が直面している課題の克服、(2) 豊かで活気に満ちた元気なまちづくりを実現する、(3) 国及び県の将来展望をふまえ、町の特性を生かした長期的・総合的な目標設定、(4) 体系的な計画のもとに全町一丸となって、諸施策の実現に取り組む体制の確立である。まちづくりの大前提は「地域住民がいかに快適な暮らしができるか」であり、町の将来像を「豊かな自然 理想の里豊栄 21 デザイン」とであると設定された。また、「まちづくり 人が真ん中」が新しいまちづくりの合言葉と設定され、最終的には「すてきな人が住み、住むとすてきな人になれる豊栄町」の実現を目指すこととなった（豊栄町、2004）。その主要施策の方向が表 11 に示す。

表 11 豊栄町の新しいまちづくりの基本目標

主要施策の方向	具体的内容
新しい農・商・工業を軸とする活気に満ちた産業のまちづくり	農業のより高品質化、ブランド化、省力化を図るとともに、豊富な産物を利用した高付加価値の二次製品の生産体制の確立と、生産・流通システムの整備、商工業や観光・レクリエーションの振興
豊富な人材を活用した永続的のまちづくり	産業、福祉、教育、文化等各方面に有能な人材の確保と育成 新しいまちづくりの担い手の育成
一生住みたい、続けたい人権福祉のまちづくり	集落内のつながりの深化、連帯意識の高揚 各種の福祉サービスの充実、生涯学習や世代間・地域間の交流の促進
快適な自然と生活環境のまちづくり	公園、環境衛生施設の整備
次世代を創造する積極行政のまちづくり	機能的で個性的な行政機構の確立と職員の質的向上 豊栄町の独自性を確保しながら広域行政への積極的参加

資料：『豊栄町史 近現代編』の内容をもとに筆者が作成。

2005 年、豊栄町が東広島市に編入した後、町としては独自のまちづくり計画は策定しなかったが、東広島圏域における豊栄町の生活環境づくりの方向が以下のように示されている。(1) 工業用地の確保、(2) 稲作を主体としつつ、特産品生産の推進などにより特色のある農業の振興及び農業の六次産業化の推進、(3) 農業資源、歴史・文化資源の活用や体験村構想の検討により、県域内外との交流を促進する、(4) 生活拠点以外地区の自然環境を保全しながら、地域の魅力化や定住の促進を図る、(5) 東広島高田道路の事業化を促進する（豊栄町、2004）ような方向性が挙げられる。

iii. 小括

豊栄町は広島県のほぼ中央にあたり四周への交通は便利で、交易の要地に位置し、古くから人々が集住し、歴史や生活文化の一つの拠点としての地を占めた。また、豊栄町の自然条件が優れていて、地域資源も豊富であり、豊かな自然に恵まれている。東広島市に編入する前に、町自身が各種の総合計画を策定し、町の将来に関するビジョンも定められたし、町全体がまちづくりに努めていた。しかしながら、インタビュー調査によると、東広島市との合併の影響で、町はバラバラな状態になり、地域活動についても各地区独自で展開するのが主な形であり、町の全体計画もなくなってくるという現実が存在している²⁰⁾。また、豊栄町は過疎・振興山村に指定され、他の農山村と同様にさまざまな問題を抱えているのも実情である。その問題点と課題は以下のように挙げられる。(1) 企業数が少な

く、若者の就職場所があまりないため、若年層を中心に人口の流出が続いている。(2) 主要産業である農林業の生産性が割に低下し、後継者が不足している。(3) 住民のニーズに対応する商業振興や地場産業の育成等の産業振興が求められている。(4) 豊栄町の将来を担う産業・文化・教育などのリーダーが欠如である。(5) 現時点では、豊栄町の高齢化率は東広島市一番高くの 42.1%であり、町は超高齢化の段階に入ったと言えるため、高齢者に関する福祉の充実も切実に要求されている。(6) 一般ゴミ及び産業廃棄物処理問題や獣害問題などの生活環境の整備が必要である。(7) 住民、特に高齢者の地域活動に参加する意欲が低く、集落の自治活動も過疎化になり、集落としての機能が低下しつつある。(8) 地域としてのアイデンティティーが欠如している²¹⁾。したがって、今後もこれらの地域課題・問題点を克服しつつ、積極的にまちづくりに取り組む必要があると考えられる。

2) 豊栄町の地域資源及び地域資源の利用度評価

i. 豊栄町の地域資源

前述したように、豊栄町は豊富な自然に恵まれ、地域資源も豊かである。本稿ではフィールド調査の結果を踏まえ、荒木ら(2007)の地域資源の分類基準を援用しながら、豊栄の地域資源を自然型資源、歴史型資源、文化型資源、産業型資源、農食型資源、人的資源の分類で概観した。その代表例は表 12 のように示す。

これら資源の中で、県及び町の重要文化財に指定され、学術上等の多い面で重要な価値を持っているものが多い。例えば、乃美本宮八幡神社の紙本墨書大般若経 600 巻は広島県重要文化財に指定され、その社叢は主としてウラジロガシツクバネガシ型の組み合わせをもつモミ林の好例であり、この地方に特徴的な自然林の面影をよく留めている群落として学術的に貴重であり、広島県の天然記念物と指定された。清武地区の畝山神社の境内に生育してする 6 種 13 樹も学術的な意味を持ち、巨樹群として県天然記念物に指定された(豊栄町、2004)。また、江戸時代初期に行われていた備後神楽と呼ばれ当地域の神楽も県無形文化財に指定された。また、田舟をはじめとする縄文時代の土器等の豊栄町指定文化財も数多く存在し、キンランやオオタカなどのような危惧種、希少種の動植物も生息している。最近に、豊栄町は国特別天然記念物の生息地として人々の注目を集めている。こうした自然資源・歴史資源の他に、どまんなかへソまつりなどの文化型資源や米・リンゴ・松茸のような農食型資源もだんだん重視されてきた。

表 12 豊栄町における地域資源一覧

自然型資源	山	板鍋山、天神嶽、どんどん淵峡、茶白山、高平山など
	川・池	椋梨川、八木川、豊栄大池、ため池など
	動物	オオサンショウウオ（特別天然記念物）、カスミサンショウウオ（町天然）、ミサゴ（危急）、オオタカ（危惧）、チュウヒ（危急）、コマドリ（希少）、オシドリ（希少）、チュウサギ（希少）、ヤマドリ（希少）など
	植物	巨木：畝山神社の巨樹群（県天然）、本宮八幡神社の社叢（県天然）、イチヨウ、オオツクバネガシ（県指定）教ウバメガシ（県指定）、ウラジログシ（県指定）蓮寺のアスナロ（町天然）、ケヤキ（町天然）、飯田のナシ（町天然）、マルバカメヅル、カキ、ウメモドキ、エノキ、カシ、カヤ、ス（県指定）など 希少植物：カキツバタ（園芸種）、ミズニラ（絶滅危惧種）、カザグルマ（絶滅危惧種）ヒメコウホネ（絶滅希少種）、エヒメアヤメ（絶滅危惧種）、オグラコウホネ（危急種）、キンラン（絶滅危惧種）など 他：シバザクラ、ミツバツツジ、エヒメアヤメ、アカマツ、ため池の植物、湿地の植物
	地質	苦ノ辻中生代魚類化石産出層（町天然）、馬場ノ原の古い断層露頭など
歴史型資源	神社・寺院	畝山神社、乃美本宮八幡神社（町有形）、国津神社、郷谷神社、龍王神社、安宿八幡神社 松亀山善正寺、瀬賀山興学寺、霊雲山教得寺、護法山実相院善性寺、杉谷山善立寺、龍松山徳善寺、真霊山西教寺、高田山教円寺、法台山蓮教寺、日光寺、山根荒神社など
	古墳	山王山古墳群の1・3・7号古墳（町史跡）、天神原古墳、宮ヶ迫古墳（町史跡）、塔ノ岡古墳（町史跡）、光福寺古墳、手島山墳墓群、鍛冶屋古墳群、天神原古墳群など
	古墓	長興寺古墓群、聖光寺古墓群、金鋼寺跡古墓群、聖光寺古墓群、丸子山古墓群、梶子姫皇
	出土品	縄文時代後期の土器（町重文）、木製田舟（町重文）、直刀、神獣鏡、短頸壺、磨製杖状挟入石斧（町重文）、木製の鋤1・2（町重文）、ガラス管玉と勾玉など
	石造物	地藏、天神嶽の地藏群、石碑、道標、五輪塔など
	遺跡	製鉄遺跡：見土路第1～6号製鉄遺跡、大懸山第1・2号製鉄遺跡 窯跡遺跡：薬師1～3号窯跡遺跡、伊尾1・2号窯跡遺跡、大山窯跡遺跡、上別府窯跡遺跡 住居跡：鍛冶屋竪穴式住居跡、中屋遺跡、中村遺跡など 城跡：茶臼山城跡、宇根山城跡、砂走城跡、杉城跡、龍王山城跡など
文化型資源	祭り・行事	神楽-五行祭（県無形）、どまんなかへソまつり、豊栄まつり、笠鉾、獅子舞、豊栄踊り、シバザクラまつり、牧場祭、夢追い河童など
	文化財	紙本墨書大般若経600巻（県重文）、神楽（五行祭）、吉原神祇（町無形）など
	民俗・文化	民話：「境界をきめた安芸牛と備後牛」、「古屋のもる」、「法事の使い」、「鼠経」 伝説：「尾首の刀洗池」、「宮ノ首の起源」、「梶子姫物語り」、「野見宿禰」、「天神社の伝説」、「盗人岩」、「梶子塚」など 民謡：「なわとび唄」、「おじゃみ唄」、「小児をあやす間い語り」、「てまり唄」など
産業型資源	観光体験施設	トムミルクファーム、MRC乗馬クラブ、小石川りんご園、金安りんご園、温泉、向井建設（ケンコーキノコ園）、リ・カムアクロス、サンサングループ とよさか四季菜館、民宿豊栄（古民家民宿）、高光養鶏場、豊北木材工業（体験施設）、
	建築	豊栄特用林産物体験実習交流園、清武地域センター、清武西地域センター、総合文化センター、田舎博物館、豊栄民俗資料展示室（安宿地域センター）、豊栄郷土館 生涯学習センター、乃美地域センター、能良地域センター、吉原地域センターなど
	その他	安宿産水晶、粘土、鉄、蛸石、タングステンなど
農食型資源	産物・特産品	米、もち米、牛乳、ミルクジャム、おへそロール、バターケーキ、リンゴ、きやらぶき、リンゴチップス、手打ちそば、豊栄へソ井セット、味じまんなまたまご 松茸、椎茸、葉タバコ、ピーマン、リンゴジャム、吉原ごぼう、
	景観	里山景観、田園風景
人的資源		各種団体・グループ、職人、住民全体

資料：『豊栄町史 近現代編』及びインタビュー調査の内容より筆者が作成

ii. 豊栄の地域資源の利用度評価

①分析方法

前記した豊栄の地域資源を概観した結果をふまえ、現地調査及び聞き取り調査等のフィールド調査から得られた地域資源をピックアップし（表13）、さらに、アンケート調査で豊栄住民がそれらピックアップした30項目の地域資源に対する重要度評価（5段階評価）及び関わり度合いについて尋ねた。この30項目の地域資源から、因子分析を用いて住民の地域資源への評価の分類の明確化を図る。つぎに、因子分析から抽出した因子得点によりクラスター分析を行いながら、豊栄住民の地域資源への重要度評価指標を参照し、資源のグループ化を行う。

表 13 豊栄地域資源のピックアップ

自然	板鍋山、天神嶽、どんどん淵峡、棕梨川、八木川、豊栄大池、シバザクラ、アカマツ、ミツバツツジ、ため池の植物、里山景観、オオサンショウウオ
歴史・文化・行事	どまんなかへソまつり、豊栄踊り、神楽、乃美本宮八幡神社、畝山神社、国津神社、伝説・民話・民謡、田舟、古墳・古墓、窯跡遺跡、製鉄遺跡、古代住居跡、城跡
農・食	米、リンゴ、マツタケ、手打ちそば、田園風景

資料：フィールド調査より筆者が作成。

②豊栄住民の地域資源に対する重要度評価因子の抽出

抽出した30項目の地域資源に対する重要度評価を因子分析（最尤法）した結果、固有値1以上の4因子が得られた（表14）。第1因子には、「窯跡遺跡」、「製鉄遺跡」と「鍛冶屋古代住居跡」、「城跡」の因子負荷量が高いことから遺跡的資源評価型因子と命名する。第2因子は「古墳・古墓」、「田舟」等の遺跡・出土品と負の相関があり、非遺跡的資源評価型因子とする。第3因子は「神楽」、「乃美本宮八幡神社」、「田舟」などの項目と負の相関があり、非歴史・文化資源評価型因子とする。第4因子は「板鍋山」、「アカマツ」、「田舟」などの項目と負の相関があり、「米」、「リンゴ」、「どまんなかへソまつり」などの項目と正の相関があるから、非自然的資源評価型因子と解釈した。なお、表14に示すように、第1因子から第4因子までの寄与率はそれぞれ49.3%、8.7%、3.1%、3.1%で累積因子寄与率は64.2%であった。

表 14 第 1 因子から第 4 因子までの因子負荷量及び因子寄与率

地域資源	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
板鍋山	0.575	0.414	0.082	-0.055
天神嶽	0.612	0.336	0.121	-0.155
どんどん淵峡	0.626	0.289	0.185	-0.084
棕梨川	0.551	0.342	0.125	-0.215
八木川	0.275	0.157	0.088	-0.192
豊栄大池	0.443	0.285	0.113	-0.093
シバザクラ	0.591	0.358	0.22	0.025
アカマツ	0.608	0.385	0.204	-0.276
ミツバツツジ	0.659	0.356	0.234	-0.313
オオサンショウウオ	0.633	0.355	0.176	-0.134
ため池の植物	0.658	0.254	0.239	-0.24
里山景観	0.643	0.358	0.209	-0.102
どまんなかへソまつり	0.553	0.225	0.093	0.271
豊栄踊り	0.702	0.2	0.047	0.192
神楽	0.748	0.292	-0.101	0.113
乃美本宮八幡神社	0.755	0.382	-0.345	0.01
畝山神社	0.741	0.373	-0.397	-0.024
国津神社	0.822	0.261	-0.284	-0.064
伝説、民話、民謡	0.834	0.134	-0.037	0.075
田舟	0.845	-0.044	-0.01	-0.029
古墳、古墓	0.897	-0.041	-0.001	0.02
窯跡遺跡	0.961	-0.161	0.011	0.004
製鉄遺跡	0.955	-0.175	0.012	-0.014
鍛冶屋古代住居跡	0.968	-0.17	0.007	0.001
城跡	0.958	-0.169	0.013	0.003
米	0.476	0.416	0.147	0.244
りんご	0.579	0.395	0.181	0.386
マツタケ	0.565	0.375	0.249	0.208
手打ちそば	0.634	0.235	0.159	0.294
田園風景	0.619	0.33	0.211	0.268
因子寄与率 (%)	49.3	8.7	3.1	3.1
累積因子寄与率 (%)	49.3	58	61.1	64.2

資料：アンケート調査の結果により筆者が作成。

③地域資源に対する評価により地域資源の類型化

住民の地域資源に対する評価により地域資源を類型化するために、上記の4因子の30項目すべての因子得点をもとにクラスター分析（Ward法）を行った。

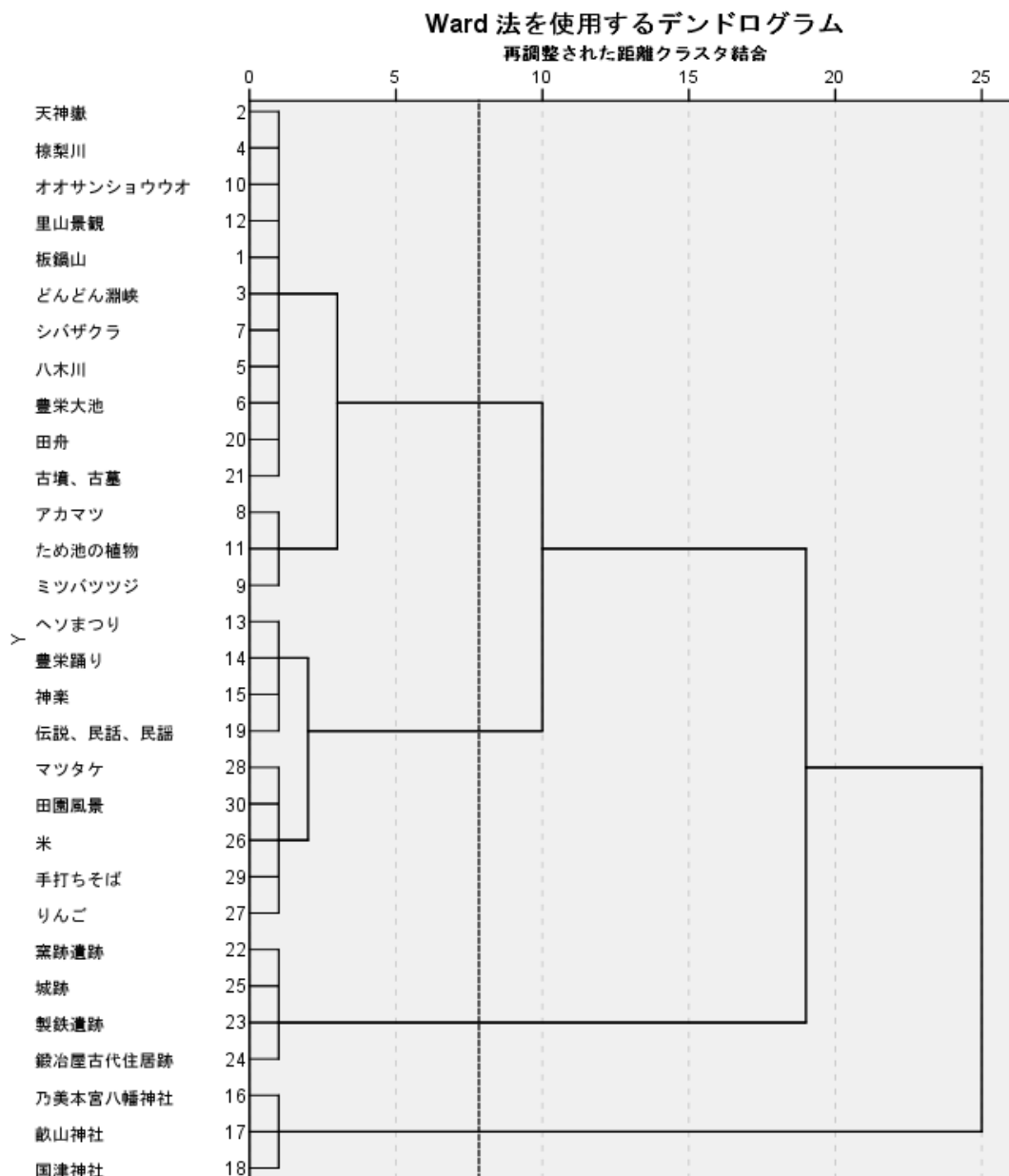


図 3 30 地域資源の4つ基本因子の得点による類型化のデンドログラム

資料：アンケート調査の結果により筆者が作成。

クラスター分析は、各クラスター重心間のユークリッド距離をクラスター間距離として、類似したクラスターを集める分類する手法である。各クラスターの形成過程を図3のデン

ドログラムでみると、対象とした地域資源への評価はおおよそ4つの大きなクラスターに分けられる。4つのクラスターに属する資源評価の基本因子の因子得点の平均値をクラスターごとに算出すると図4に示す。

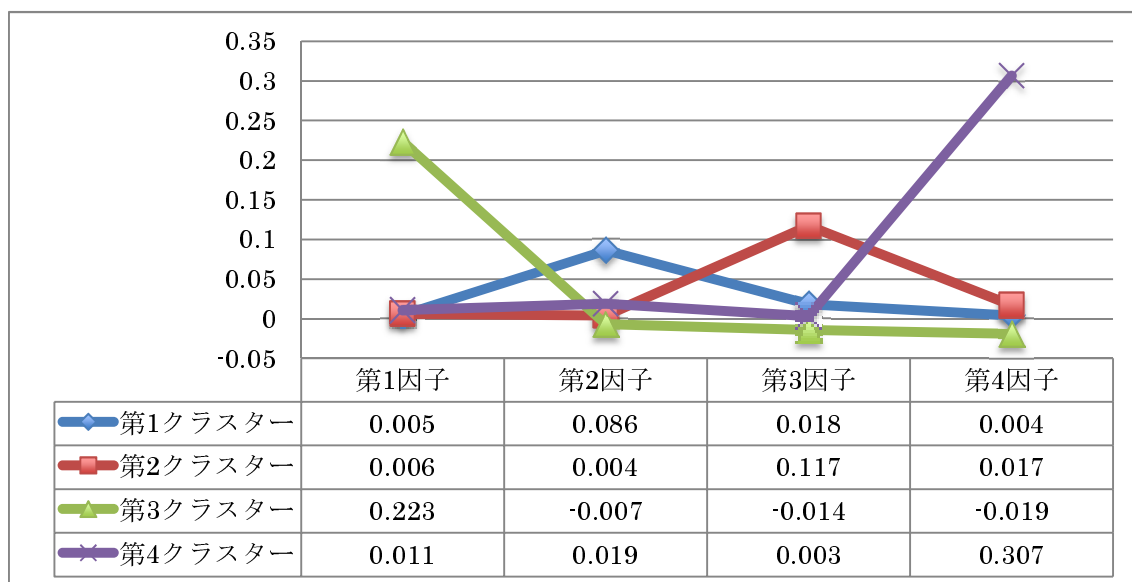


図4 地域資源の評価クラスター別因子得点

資料：アンケートの結果により筆者が作成。

第1クラスターは非遺跡・歴史的なものであり、自然型資源と言えよう。第2クラスターは第3因子の得点がやや高く、農村型資源と解釈する。第3クラスターは第1因子の得点が高く、遺跡型資源とする。第4クラスターは神社型資源と解釈する。

上記の4つのクラスターで5段階尺度による評定平均値（“大切である”＝5、“まあ大切”＝4、“どちらともいえない”＝3、“あまり大切にない”＝2、“大切にない”＝1）を算出すると、第1クラスターの自然型資源は3.95、第2クラスターの農村型資源の評定平均値は4.13、第3クラスターの遺跡型資源は3.62、第4クラスターの神社型資源は4.02であった。つまり、豊栄住民は米・リンゴ・どまんなかへソまつりなどの地元特有、日常生活でよく接触できる農村型資源への重視度が一番高いと判断される。また、「乃美本宮八幡神社」などの神社型資源への重要度評価の平均値も二番目高くなったのに対して、「窯跡遺跡」等の遺跡型資源への重要度評価の平均値が低い。順位をつけると、農村型資源＞神社型資源＞自然型資源＞遺跡型資源のかたちになった。

④豊栄住民と地域資源の関わり度合い

ピックアップした30項目の地域資源に対する重要度評価の5段階評価を点数と見なすと、地域資源資源の重要度点数の平均値及び豊栄住民とそれら資源の関わり度合いは表 15 及び図 5 に示す。

豊栄住民と各クラスターの資源との関わり度合いをまとめると、第1クラスターの体験度平均値は42.86%となり、つまり、回答者の約4割は自然型資源を体験したことがあるといえよう。第2クラスター（農村型資源）への体験度平均値は53.4%であり、各クラスターの中で一番高くなった。第3クラスター（遺跡型資源）の体験度平均値は10.0%となり、非常に低いと判断される。第4クラスター（神社型資源）の体験度平均値は自然型資源につぎ、40.7%となった。総じて言えば、豊栄住民と農村型資源との関わり度合いが一番高いのに対して、遺跡型資源との関わり度合いが一番低いのが明らかになった。

表 15 各資源に対する重要度評価の平均点及び体験有無

第1クラスター	重要度評価点数	体験度
天神嶽	4.13	50.6%
棕梨川	4.04	51.7%
オオサンショウウオ	4.22	39.6%
里山景観	4.12	42.5%
板鍋山	4.34	73.6%
どんどん淵峡	3.74	58.2%
シバザクラ	4.01	59.2%
八木川	3.65	21.1%
豊栄大池	4.01	60.3%
田舟	3.46	9.0%
古墳、古墓	3.82	28.6%
アカマツ	4.05	39.5%
ため池の植物	3.76	29.5%
ミツバツツジ	3.94	36.6%
平均値	3.95	42.9%

第2クラスター	重要度評価点数	体験度
神楽	4.12	59.7%
豊栄踊り	3.76	52.1%
伝説、民話、民謡	3.88	27.2%
どまんなかへソまつり	3.86	63.2%
米	4.71	69.7%
マツタケ	4.38	56.6%
りんご	4.32	61.9%
田園風景	4.31	57.7%
手打ちそば	3.86	32.6%
平均値	4.13	53.4%

第3クラスター	重要度評価点数	体験度
城跡	3.64	10.9%
鍛冶屋古代住居跡	3.64	11.1%
製鉄遺跡	3.61	9.9%
窯跡遺跡	3.61	8.2%
平均値	3.62	10.0%

第4クラスター	重要度評価点数	体験度
国津神社	3.84	22.5%
畝山神社	4.07	49.3%
乃美本宮八幡神社	4.13	50.3%
平均値	4.02	40.7%

資料：アンケート調査の結果により筆者が作成。

具体的に言えば、体験度が一番高いのは板鍋山であり、73.6%となった。板鍋山をはじめ、豊栄大池、天神嶽などの自然型資源のなかで観光資源とも言える資源と住民の関わりが強い傾向が示されている。どまんなかへソまつりや神楽のような地域の盛大的なまつり

や民俗行事との関わり度合いもほとんど 50%以上であり、高いと言えよう。一方、町重要文化財としての田舟の体験度がわずか9%であり、回答者の約9割が田舟のような出土品や窯跡遺跡のような歴史系の資源を体験したことがなく、むしろ聞いたこともないという現状が存在しているのではないかと考えられる。

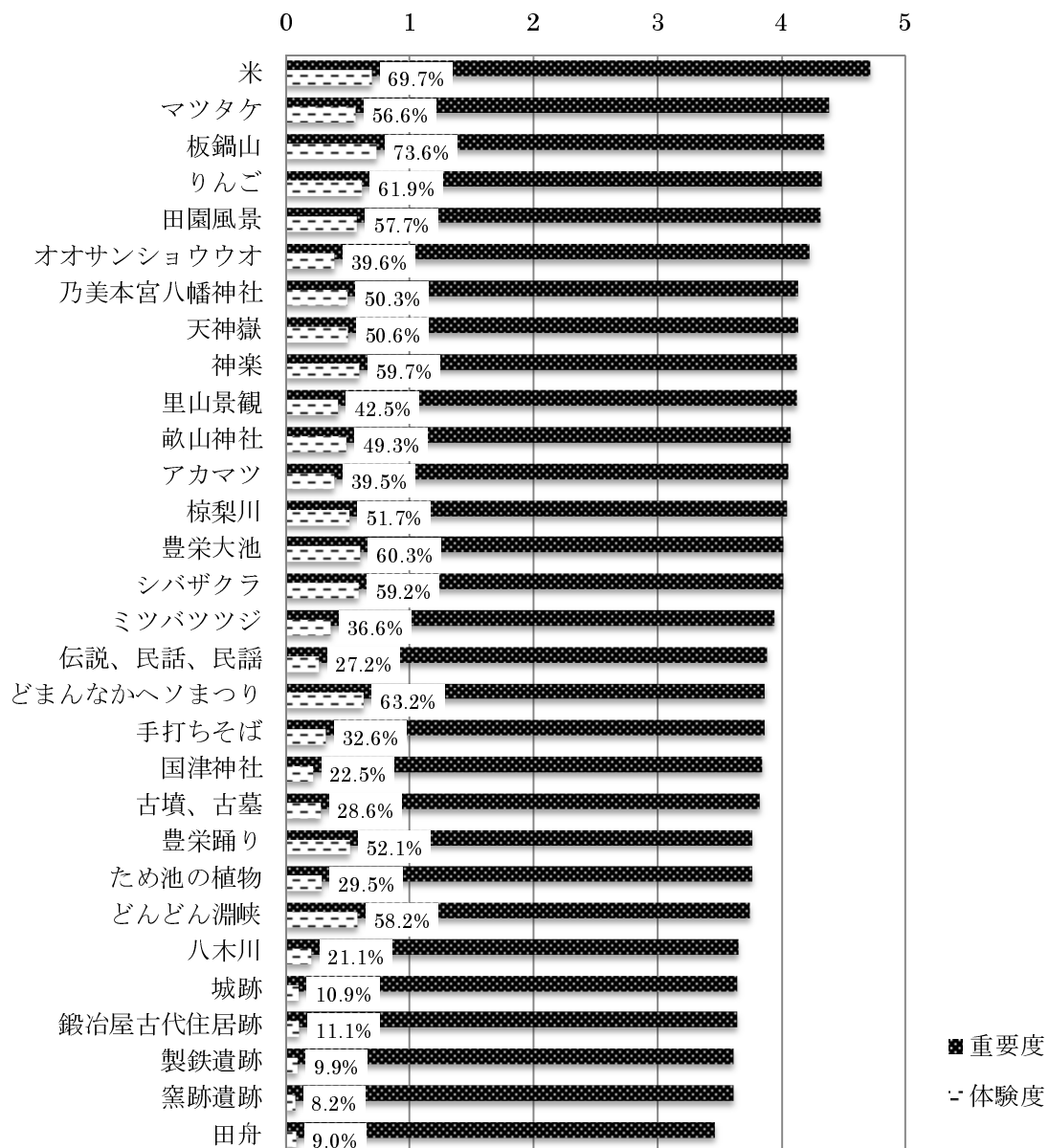


図 5 豊栄住民の地域資源への重要度評価及び関わり度合い

資料：アンケートの結果により筆者が作成。

上記の図と表で示したように、地域資源の体験有無とその資源に対する重要度評価は一定の関連性を持つと言えよう。言い換えれば、その地域資源を体験したことがあれば、そ

の資源への重要度評価も相応的に高くなる傾向を示すと考えられる。

⑤住民の地域資源利用方法に対する認識

豊栄住民を対象としたアンケート調査で、豊栄町の各種地域資源の活かし方に対する豊栄住民の認識を尋ねた結果は図6に示す。

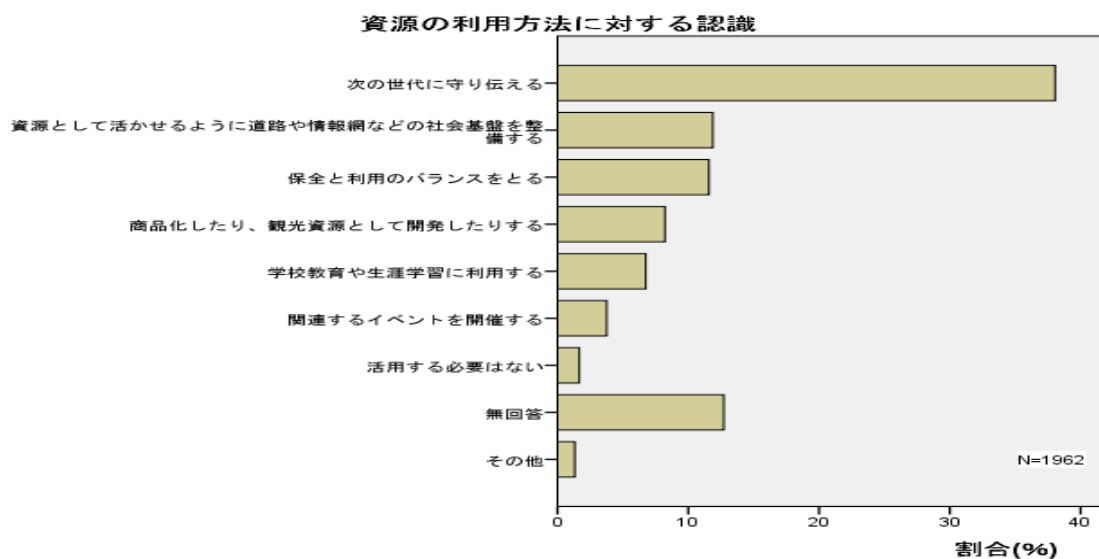


図 6 豊栄町の地域資源の利用方法への認識

資料：アンケート調査の結果により筆者が作成。

上記の図で示したように、豊栄町の地域資源の活かし方として、4割近くの人が「次の世代に守り伝える」という方向性を選んだ。一方、地域資源に関連するイベントの開催により資源を利・活用していくという方向性への支持が一番低いのも明らかになった。インタビュー調査によると、町内には、茶臼山調査などの活動を行い、地域の子供たちを豊栄の資源や良さを知ってもらうような事業を展開したり、学校教育の中で子供たちを地域のことを知ってもらうような活動も入れたりしているそうである。すなわち、豊栄の住民であれ、行政であれ、地域資源を保護・伝承するような意識傾向が見せている。しかしながら、地域資源の利・活用するというような意識傾向があまり持っていないと判断される。また、昔町内には文化財保護活動などの活動がいろいろ行われていたが、こうした活動の関係者はほとんど高齢者であるため、現在にはこのような地域資源と関係ある活動にはリーダーがいないという現状が存在している²²⁾。

年齢と地域資源の活かし方のクロス集計の結果は表16に示す。前述したように、各年齢

層とともに「次の世代に守り伝える」への支持が一番高いが、「次の世代に守り伝える」を除き、各年齢層は一定の意識差を見せていると考えられる。

具体的に言えば、80歳以上の人は「次の世代に守り伝える」につき、「資源として活かせるように道路や情報網などの社会基盤を整備する」への支持率が二番目に高いと言える。70代の人は80歳以上の人と同じ傾向を示している。60歳以上70歳未満の人の中で、「次の世代に守り伝える」を除き、「保全と利用のバランスをとる」と「資源として活かせるように道路や情報網などの社会基盤を整備する」への支持度はほぼ同じであり、割に高い。50代から20代までの人は同じ意識傾向を示し、「保全と利用のバランスをとる」を支持する人の割合は2番目に高くなった。ただし、30代と20代の人の中で、「商品化したり、観光資源として開発したりする」という資源の新しい活かし方への支持率も割に高い点は注目を値する。20歳未満の人の意識は他の世代と少し違う傾向を見せ、「次の世代に守り伝える」を除き、関連するイベントの開催や学校教育、生涯学習に利用するような活かし方への支持率も割に高い。

表 16 年齢と地域資源の利用方法のクロス表

年齢	80歳以上	70歳以上 80歳未満	60歳以上 70歳未満	50歳以上 60歳未満	40歳以上 50歳未満	30歳以上 40歳未満	20歳以上 30歳未満	20歳未満	回答数
次の世代に守り伝える	39.9%	45.5%	38.5%	42.8%	33.9%	24.6%	25.3%	39.0%	776
商品化したり、観光資源として開発したりする	6.7%	8.2%	6.6%	7.8%	11.1%	13.9%	14.7%	11.0%	168
保全と利用のバランスをとる	6.2%	5.4%	14.8%	16.5%	17.0%	18.0%	18.7%	4.9%	235
資源として活かせるように道路や情報網などの社会基盤を整備する	10.0%	11.3%	14.3%	13.0%	11.7%	15.6%	12.0%	8.5%	243
学校教育や生涯学習に利用する	4.7%	7.2%	5.7%	5.8%	12.9%	3.3%	10.7%	14.6%	136
関連するイベントを開催する	0.9%	2.8%	3.7%	3.5%	2.9%	8.2%	8.0%	15.9%	77
活用する必要はない	1.2%	0.8%	2.0%	1.4%	1.8%	4.1%	2.7%	3.7%	34
その他	1.2%	1.0%	2.0%	1.2%	1.8%	0.8%	1.3%	1.2%	27
無回答	20.8%	14.8%	9.5%	4.6%	4.1%	8.2%	4.0%	1.2%	209
無効	8.5%	3.1%	2.9%	3.5%	2.9%	3.3%	2.7%	0.0%	77
合計	341	391	454	346	171	122	75	82	1982

資料：アンケート調査の結果により筆者が作成。

⑤小括

豊栄住民の地域資源に対する重要度評価により抽出した4つの基本因子の得点により、豊栄の域資源がおおまかに自然型資源、農村型資源、遺跡型資源、神社型資源の4つのグループに分けられる。住民のそれら資源への重要度評価として、一番重要視されるのは農

村型資源であり、一方、遺跡型資源への重要度評価が一番低いことが明らかになった。また、住民と地域資源の関わりを見てみると、一番重要視される農村型資源、特に食資源との関わりが非常に強いと判断されるが、その一方で、重要度評価が一番低い遺跡型資源との関わりも相応的に弱い。なお、豊栄住民の地域資源への重要度評価はそれら資源との関わり度合いと正の相関がある。

さらに、地域資源の活かし方では、豊栄住民は地域資源の保護と伝承を重視している傾向を示すものの、資源の開発及び利・活用などの活かし方への支持率は低いと判断される。

IV 豊栄住民の生活環境及び地域活性化に対する認識

筆者は平成 25 年 2 月から 5 月にかけて豊栄町全住民を対象に「豊栄住民の生活環境に対する意識調査」というアンケートを実施した。この章においては単純集計及びクロス集計の結果をもとに、豊栄住民の生活環境及び地域活性化に対する認識について分析する。

1) 豊栄住民の生活環境に対する認識

i. 地域住民の居住年数と意欲

図 7 は居住年数を尋ねた結果をまとめたものである。

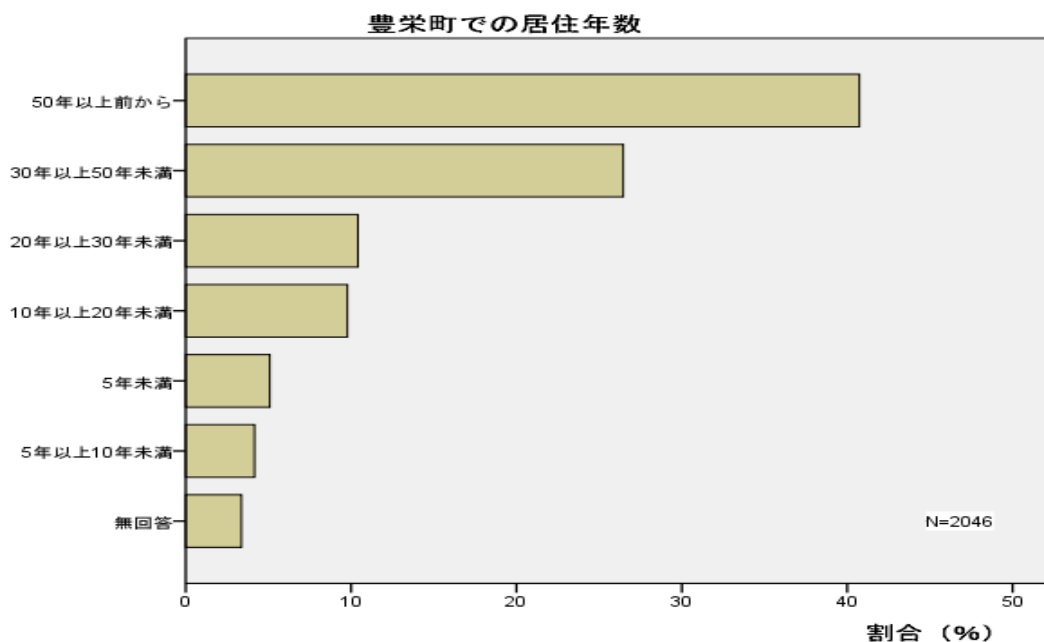


図 7 住民の豊栄町での居住年数 資料：アンケートの結果により筆者が作成。

図 7 で示したように、アンケートを回答していただいた住民の 4 割以上が 50 年以上で豊栄に住んでいる。30 年以上 50 年未満の豊栄での生活歴を持つ人も回答者の 3 割弱に達した。豊栄で生活している年数が 30 年以上の人の割合が全体の 7 割弱を占めている。一方、10 年未満の人の割合はわずか 10% 未満で（「5 年以上 10 年未満」が 4.16%、「5 年未満」が 5.09%、合計 9.25%）、極めて少ない。こうした住民の豊栄での居住年数構造も U ター

ンや人口誘致対策を行ったが外から豊栄町に住みついてくれる人が依然として少ないという現状が反映されていると考えられる。

住民の豊栄町での居留意欲について尋ねた結果は表 17 に示す。

表 17 住民の豊栄町での居留意欲

	80歳以上	70歳以上 80歳未満	60歳以上 70歳未満	50歳以上 60歳未満	40歳以上 50歳未満	30歳以上 40歳未満	20歳以上 30歳未満	20歳未満	回答数
できるだけ住み続けたい	90.3%	90.1%	80.0%	82.4%	75.4%	65.6%	53.3%	58.5%	1606
引っ越したいが今のところその計画はない	2.9%	4.8%	11.7%	12.4%	18.1%	23.0%	28.0%	28.0%	228
数年のうちに引っ越しをするつもり	0.0%	0.3%	1.1%	0.6%	0.6%	4.9%	8.0%	6.1%	26
近々引っ越しを計画している	0.3%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.8%	4.0%	2.4%	9
その他	2.6%	2.6%	5.1%	3.5%	4.7%	4.9%	5.3%	4.9%	76
無回答	3.8%	1.8%	2.2%	1.2%	1.2%	0.8%	1.3%	0.0%	38
合計	341	392	454	346	171	122	75	82	1983

資料：アンケート調査の結果により筆者が作成。

カイ 2 乗検定の結果、0.01%水準で有意な差あると判断され、住民の年齢と豊栄での居留意欲は強い関連性を持っている。表 17 を見ると、80 歳以上の人の場合、「できるだけ住み続けたい」という回答の割合は 90.3%となるのに対して、「引っ越したい」か「数年のうちに引っ越しをするつもり」という気持ちを持つ人の割合は 5%未満で、80 代の人は「豊栄でできるだけ住み続けたい」という意欲は極めて高いと判断される。70 歳以上 80 歳未満の人も同じ傾向を呈している。60 代と 50 代は、「できるだけ住み続けたい」という回答の割合もそれぞれ 80.0%と 82.4%となったが、「引っ越したいが今のところその計画はない」という回答の割合はそれぞれ 11.7%と 12.4%となり、他のところで住みたいという意欲はある程度存在しているのではないかと考えられる。40 代と 30 代の場合も、「できるだけ住み続けたい」という回答の割合はそれぞれ 7 割と 6 割以上に達しているが、引っ越したいという意欲の割合も 2 割左右となり、中高齢者よりもっと高い引っ越したい意欲を示している。20 歳以上 30 歳未満の人は、「できるだけ住み続けたい」への回答は 53.3%となった。一方、「引っ越したいが今のところその計画はない」と「数年のうちに引っ越しをするつもり」への回答はそれぞれ 28.0%と 8.0%で、合計で 36.0%となり、つまり 20 代の 3 割以上の豊栄以外のところで生活するという意欲を示しているといえる。20 歳未満の人も同じ傾向を呈している。

また、住民の年齢と居留意欲は強い関連があり、年齢が高くなればなるほど、豊栄町で

の居留意欲が高いと考えられる。特に 70 歳以上の老人の 90%以上はできるだけ住み続けたいと回答し、極めて高い豊栄町での居留意欲が極めて高い。その理由としては「生まれてからずっとここに住んでいるから仕方がない、生まれた所を守りたいという気持ちを持っている、サービスもあるし、生活の利便性がある程度持っている、自分を育てられた土地を愛しているから」などのようなものが挙げられる²³⁾。

全部の回答をまとめると、年齢を問わず、8 割以上の人にはできるだけ豊栄で住み続けたいという意欲を持ち、この点からは豊栄の住民は自分の生活している土地を愛している気持ちが読み取れると考えられる。しかしながら、若年層が豊栄から出たいという意欲を持っているのも明らかになった。それは若年層が工業団地や都市などの就職しやすい所で住みたいという意識傾向があるからであろう。聞き取り調査によると、豊栄町は東広島市と合併する前に、人口誘致や U ターン受け入れ体制の確立にいろいろ工夫していたが、現在になっても、若者は出るばかりで、U ターンで帰る人はあまりいない。他のところから豊栄に住み着いてくれる人の数の非常に少ないという現状が存在している²⁴⁾。

ii. 豊栄町の良いところ

前述したように、豊栄住民は高い豊栄町での居留意欲を示したが、その理由を掘り下げるために、アンケート調査の中で、豊栄町の良い点について尋ねた（複数回答）。その結果は図 8 に示す。

豊栄の良いところと言ったら、「豊かな自然がある」という考えを持つ人が最も多いことが明らかになった。それにつぎ、「自然災害が少ない」と選んだ人も多い。つまり、「自然」という言葉が豊栄の良いところを挙げる時のキーワードになり、「豊かな自然があるからこそ豊栄が良いところになる」や「豊栄の利点と言ったら、自然にある」というような考えを持つ住民が非常に多い²⁵⁾と考えられる。また、「事件や事故が少なく、治安がよい」という回答を選んだ人も多い。つまり、自然環境が良いとか治安がよいとかいったような認識を持つ住民が多いという傾向が示される。そこから、豊栄の良いところは住み心地が良いというところにあると言えよう。

一方、「交通の便が良い」、「行政サービスが充実している」や「医療・福祉サービスが充実している」というような回答の割合が少ない。つまり、豊栄町には、行政、福祉等

各種のサービスの不足、交通の便利性の低下というような問題点は存在しているのではないかと推測される。また、「豊かな文化と歴史を持つ」という回答の割合も低く、住民は自分の町の持つ豊かな歴史と文化をあまり意識されていないという現状が存在していると考えられる。

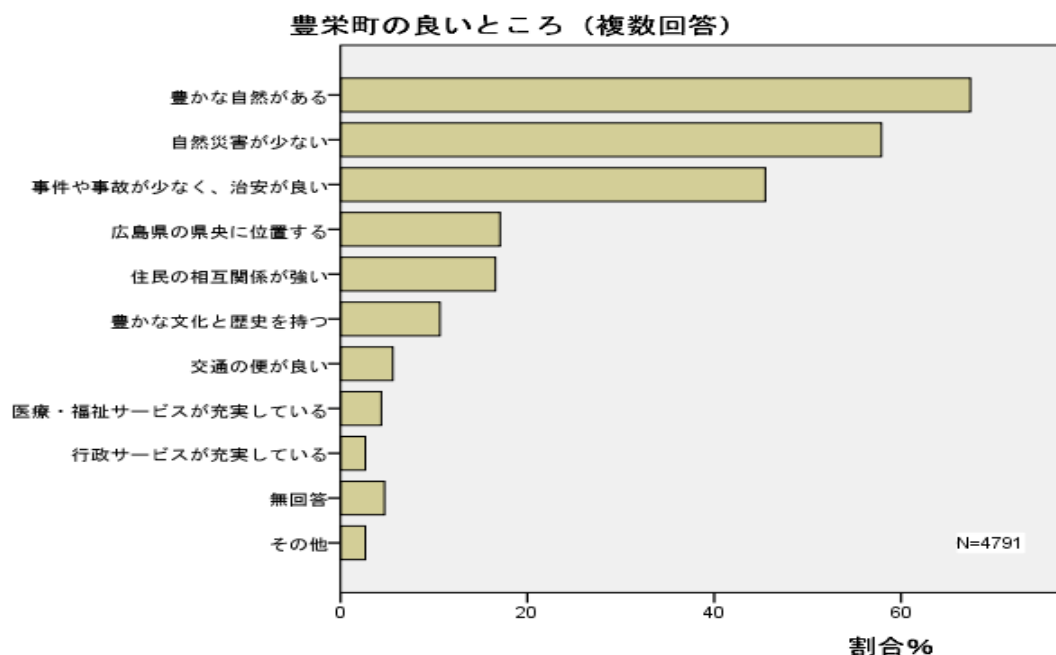


図 8 豊栄の良いところ

資料：アンケート調査の結果により筆者が作成。

iii. 豊栄町の問題点

①全体像

豊栄町に存在している問題点について尋ねた結果は図 9 に示す。豊栄町の抱えている問題点という質問に対して、住民の意識は一辺倒という傾向を示していると考えられる。具体的に言えば、「子供の減少」という回答の割合は 4 割ぐらいに達し、一番高くなった。それにつぎ、「高齢者対策」という回答の割合も二番目に高くなった。二つの項目を合わせると、過半数の回答者は町の存在している少子高齢化という問題点を強く認識していることが明らかになった。なお、「働く場や機会が少ないこと」という認識を持つ回答者の割合は 3 番目に高くなるという点にも注目を値すべきだと考えられる。

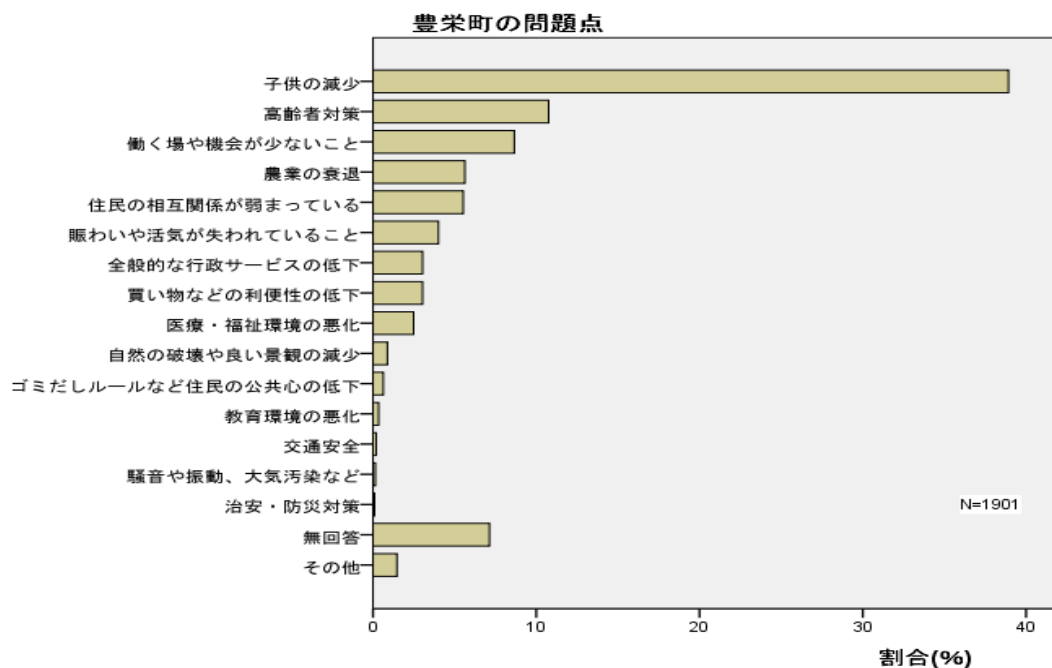


図 9 豊栄町の問題点 資料：アンケート調査の結果により筆者が作成。

②年齢別から見る豊栄町の問題点

ここでは、町の抱えている問題点と年齢のクロス集計を行い、カイ 2 乗分析の結果、0.01%水準で有意の差が推測される。つまり、住民の豊栄町の問題点に対する認識は年齢と強い関連性を持つと言えよう。表 18 は年齢と豊栄の問題点のクロス集計の結果である。

表 18 で示したように、全年齢層でも、「子供の減少」という回答の割合が一番高くなった。この結果からも豊栄町の子供減少という問題の深刻化が読み取れると考えられる。80 歳以上の人の場合、「子供の減少」という回答の次に、「高齢者対策」という回答の割合は 11.1%となり、「農業の衰退」も 9.4%となった。70 歳以上 80 歳未満の人も同じ傾向を示している。60 歳以上 70 歳未満の人は「子供の減少」と「高齢者対策」（それぞれ 38.1%、11.9%）につぎ、「働く場や機会が少ないこと」という選択肢を選ぶ人は約 1 割を占め、10.6%となった。50 歳以上 60 歳未満の人もほぼ同じ意識傾向である。

40 歳以上 50 歳未満の人の場合は、「子供の減少」という回答の割合は 44.4%となり、「高齢者対策」という回答の割合は 11.7%で、その他に、「住民の相互関係が弱まっている」（6.4%）や「働く場や機会が少ないこと」（5.8%）等の様々の問題を認識した人も一部存在し、一定程度のばらつきを見せている。30 歳以上 40 歳未満の人も「子供の減少」

(41.8%) という問題を強く認識され、さらに「働く場や機会の少ないこと」 (18.0%)、
「高齢者対策」 (9.8%) というような問題も認識されている。

20 歳以上 30 歳未満の人は、「子供の減少」を選ぶ人は 37.3% を占め、その次に、「働く場や機会の少ないこと」と「賑わいや活気が失われていること」という回答の割合はそれぞれ 14.7% と 10.7% となった。20 歳未満の年齢層の場合、「子供の減少」という回答の割合は半数以上で、52.4% となり、そのつぎに、豊栄には「買い物などの利便性の低下」といよう問題点が存在しているという認識を持つ人も 12.2% を占めた。

表 18 年齢と豊栄の問題点のクロス集計表

	80歳以上	70歳以上 80歳未満	60歳以上 70歳未満	50歳以上 60歳未満	40歳以上 50歳未満	30歳以上 40歳未満	20歳以上 30歳未満	20歳未満	回答数
住民の相互関係が弱まっている	5.3%	8.4%	5.7%	5.5%	6.4%	2.5%	1.3%	1.2%	112
高齢者対策	11.1%	10.7%	11.9%	12.4%	11.7%	9.8%	6.7%	7.3%	220
子供の減少	39.6%	39.4%	38.1%	38.7%	44.4%	41.8%	37.3%	52.4%	794
教育環境の悪化	0.0%	0.0%	0.0%	0.3%	0.6%	0.8%	2.7%	2.4%	7
買い物などの利便性の低下	1.2%	3.6%	2.0%	2.9%	4.1%	3.3%	5.3%	12.2%	62
全般的な行政サービスの低下	2.3%	2.0%	4.0%	4.6%	4.7%	2.5%	1.3%	0.0%	62
治安・防災対策	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	1.3%	0.0%	2
交通安全	0.3%	0.0%	0.2%	0.0%	0.6%	0.0%	0.0%	1.2%	4
自然の破壊や良い景観の減少	0.3%	0.5%	1.1%	0.9%	0.6%	2.5%	4.0%	0.0%	18
騒音や振動、大気汚染など	0.3%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.2%	3
ゴミだしルールなど住民の公共心の低下	0.9%	0.3%	0.7%	0.3%	0.6%	0.8%	1.3%	1.2%	12
医療・福祉環境の悪化	1.2%	2.6%	3.3%	3.5%	3.5%	0.8%	2.7%	0.0%	50
働く場や機会が少ないこと	3.8%	7.7%	10.6%	10.4%	5.8%	18.0%	14.7%	7.3%	176
賑わいや活気が失われていること	2.1%	1.8%	4.6%	6.9%	4.1%	3.3%	10.7%	4.9%	82
農業の衰退	9.4%	9.0%	5.1%	3.8%	2.9%	4.1%	0.0%	1.2%	114
その他	0.9%	1.0%	1.1%	1.7%	2.9%	3.3%	2.7%	1.2%	30
無回答	11.4%	3.8%	5.1%	2.9%	1.2%	2.5%	1.3%	2.4%	95
無効	10.0%	9.2%	6.2%	5.2%	5.8%	4.1%	6.7%	3.7%	139
合計	341	391	454	346	171	122	75	82	1982

資料：アンケート調査の結果により筆者が作成。

総じて言えば、少子高齢化を除き、豊栄の問題点への認識はある程度のばらつきを示しているものの、高齢者は「農業の衰退」というような根本的な問題を認識され、中年層及び若年層は「働く場や機会の少ないこと」や「賑わいや活気が失われていること」等の多種の問題を認識されている。一方、治安・防災対策や交通安全、騒音や振動、大気汚染などの環境問題を認識する人は少ないということも豊栄の治安・自然環境の良さを反映して

いるのではないかとと思われる。

iv. 豊栄住民の地域活動に参加する意欲

豊栄のどのような地域活動に参加したいかという設問については、まずは住民全体の地域活動への参加意欲をまとめた。その結果は図 10 に示す。

住民の参加したい地域活動として、全体から見ると、健康・福祉関係活動への参加意欲が一番高いのが明らかになった。また、まちづくりや地域活性化関係の活動を参加したい人も割に多いということも注目を値する。一方、住民の人権・平和関係の活動や女性地位向上の活動を参加したい意欲が非常に低いと判断される。

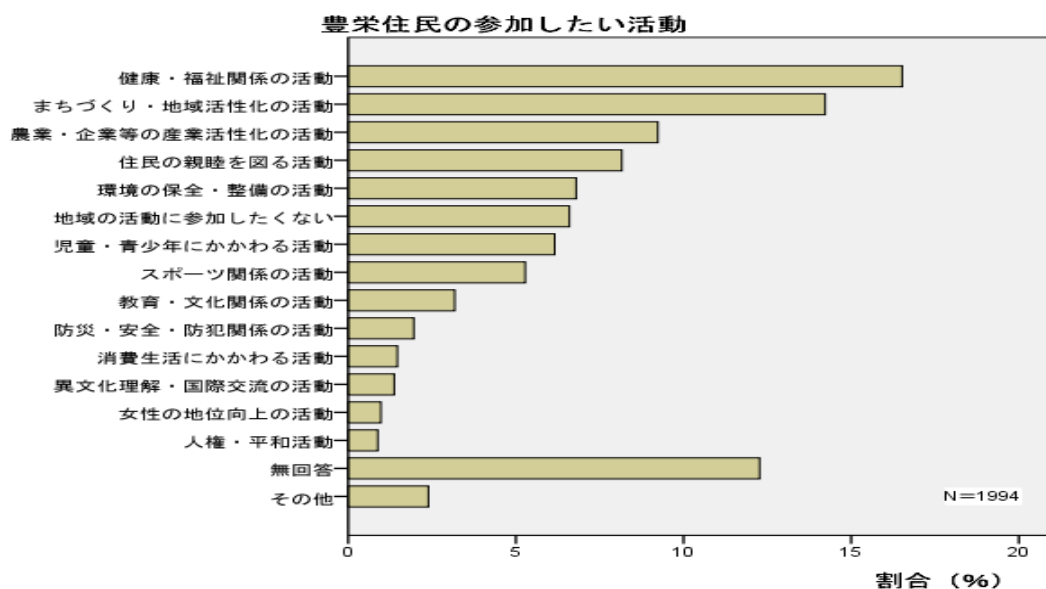


図 10 豊栄住民の参加したい地域活動

資料：アンケート調査の結果により筆者が作成。

続いては、表 19 で示したように、年齢と参加したい活動のクロス集計を行った。年齢層ごとの参加したい活動について分析したら、80 歳以上の人の場合、「健康・福祉活動」という回答の割合は最も高く、25.2%となった。また、「住民の親睦を図る活動」や「農業・企業等の産業活性化活動」、「まちづくり・地域活性化活動」等の活動に対しても一定の参加意欲を示し、それぞれ 10.9%と 8.8%、8.5%となった。70 代の人々の地域活動の参加意欲は 80 歳以上の人とほぼ同じ傾向を示している。60 歳以上 70 歳未満の人の場合、「健康・福祉関係の活動」という回答の割合は 19.8%となり、一番高い。その次に、「まちづくり・

地域活性化活動」という回答の割合は 17.2% となり、「農業・企業等の産業活性化活動」という回答の割合も 10.8% となった。

表 19 年齢と参加したい活動のクロス集計表

	80歳以上	70歳以上 80歳未満	60歳以上 70歳未満	50歳以上 60歳未満	40歳以上 50歳未満	30歳以上 40歳未満	20歳以上 30歳未満	20歳未満	回答数
児童・青少年にかかわる活動	2.1%	3.1%	4.4%	6.4%	14.0%	17.2%	5.3%	18.3%	125
健康・福祉関係の活動	25.2%	20.2%	19.8%	13.9%	12.3%	5.7%	5.3%	2.4%	337
教育・文化関係の活動	1.8%	0.8%	2.4%	3.2%	9.4%	2.5%	9.3%	9.8%	65
スポーツ関係の活動	0.6%	1.0%	3.5%	4.6%	7.6%	13.9%	20.0%	30.5%	108
環境の保全・整備の活動	2.9%	5.1%	10.1%	9.2%	7.0%	5.7%	9.3%	4.9%	138
まちづくり・地域活性化の活動	8.5%	14.0%	17.2%	18.5%	14.6%	15.6%	12.0%	14.6%	291
消費生活にかかわる活動	2.1%	0.8%	1.5%	2.6%	1.2%	0.8%	1.3%	0.0%	30
農業・企業等の産業活性化の活動	8.8%	13.5%	10.8%	9.5%	7.6%	6.6%	1.3%	2.4%	189
防災・安全・防犯関係の活動	2.1%	2.3%	0.9%	3.5%	1.8%	2.5%	2.7%	0.0%	40
女性の地位向上の活動	1.2%	1.3%	0.7%	1.2%	0.6%	0.8%	1.3%	1.2%	20
人権・平和活動	1.8%	1.0%	0.2%	0.6%	0.6%	1.6%	0.0%	2.4%	18
異文化理解・国際交流の活動	0.0%	0.3%	1.3%	2.6%	1.2%	2.5%	8.0%	1.2%	28
住民の親睦を図る活動	10.9%	13.0%	7.3%	6.1%	7.0%	5.7%	6.7%	1.2%	167
地域の活動に参加したくない	5.3%	5.4%	6.4%	9.2%	6.4%	7.4%	12.0%	7.3%	135
その他	2.6%	2.3%	3.1%	1.4%	1.8%	4.9%	2.7%	1.2%	49
無回答	20.8%	13.0%	8.1%	5.5%	5.3%	5.7%	2.7%	2.4%	198
無効	3.5%	3.1%	2.2%	2.0%	1.8%	0.8%	0.0%	0.0%	45
合計	341	392	454	346	171	122	75	82	1983

資料：アンケート調査の結果により筆者が作成。

50 歳以上 60 歳未満の人の場合、「まちづくり・地域活性化活動」という回答の割合は最も高く、18.5% となった。その他に、「健康・福祉関係の活動」や「農業・企業等の産業振興の活動」、「環境の保全・整備の活動」等の活動にも一定程度の参加意欲を示している。40 歳以上 50 歳未満の年齢層の中で、「まちづくり・地域活性化活動」に参加したい人の割合が最も高く、14.6% であった。なお、「児童・青少年に関わる活動」という回答の割合も二番目に高くの 14.0% となったことも注目を値する。30 歳以上 40 歳未満の場合、「児童・青少年に関わる活動」という回答を選ぶ人は 17.2% の比率を占め、その次に「まちづくり・地域活性化」という回答の割合も 15.6% となった。

20 代の人でも 20 歳未満の人でも「スポーツ関係の活動」に参加する意欲が強く、それぞれ 20.0% と 30.5% となった。また、20 代の人の中で、「まちづくり・地域活性化活動」という回答を選ぶ人の割合は 12% であるものの、「地域の活動に参加したくない」という回答の割合も同じく 12% である。つまり、20 代の人約 1 割は明確的に地域活動に参加したく

ないという意向を持っている。20歳未満の青少年はスポーツ関係の活動を除き、「児童・青少年関係の活動」という回答の割合も18.3%となった。また、「まちづくり・地域活性化活動」という回答の割合も14.6%となることも注目を値すると思われる。

総じて言えば、豊栄住民はその年齢層により、それぞれ違うタイプの地域活動に参加したい意欲を示している。各年齢層の地域活動への参加意欲のパターンを探てみると、高齢者はその年齢なりの健康・福祉活動に絶大な興味を持ち、中年層は地域の活性化及び児童・青少年に関わる活動に熱心し、青少年はスポーツ活動への参加意欲は極めて高いという傾向が読み取れるのではないかと考えられる。

2) 豊栄住民の地域活性化に対する認識

i. 豊栄住民の地域活性化に対する認識

まずは回答者全体の地域活性化に対する考えを把握したい。その結果は図11に示す。

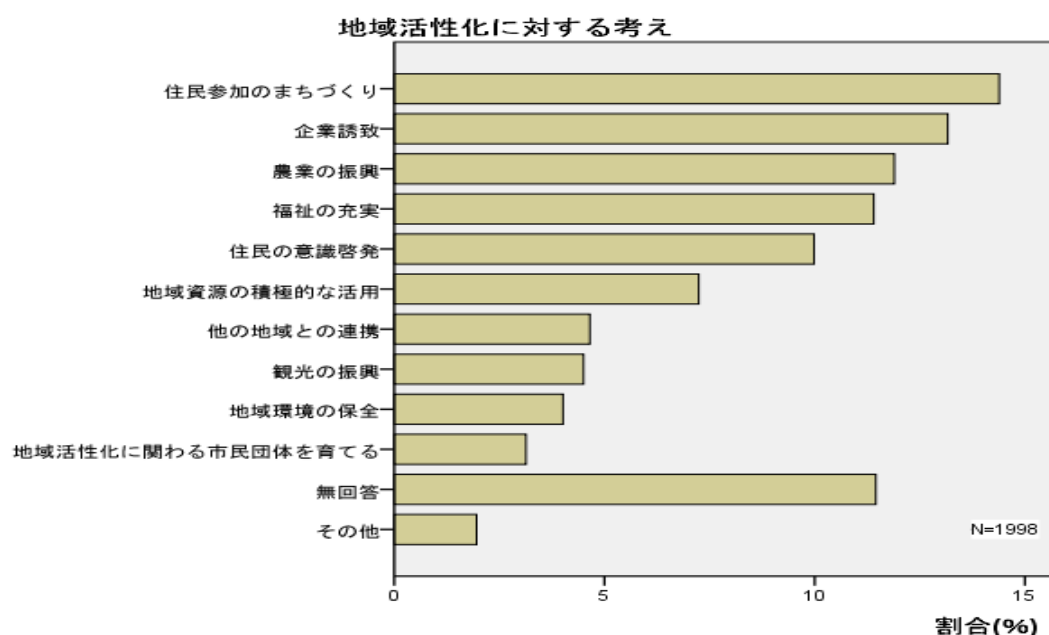


図 11 豊栄住民の地域活性化に対する考え

資料：アンケート調査の結果により筆者が作成。

図11から見ると、「住民参加のまちづくり」という回答の割合が一番高くなった。つまり、豊栄町を活性化するために、「住民参加のまちづくりを重視すべきである」という認

識を持つ住民が一番多いと言えよう。また、「企業誘致」という伝統的な地域振興策を支持する人も多かった。それにつぎ、「農業の振興」という手法を支持する人の割合もやや高いと考えられる。一方、全体から見ると、「地域活性化に関わる市民団体を育てる」や「地域環境の保全」というような手法への支持度が低いことが明らかになった。また、「他の地域との連携」や「観光の振興」等の外向きタイプの地域活性化手法を支持する人も割に少ない。

各年齢層の地域住民の地域活性化に対する認識を把握するために、年齢と地域活性化に対する考えのクロス集計を行い、その結果は表 20 に示す。

表 20 年齢と地域活性化に対する考えのクロス表

	80歳以上	70歳以上 80歳未満	60歳以上 70歳未満	50歳以上 60歳未満	40歳以上 50歳未満	30歳以上 40歳未満	20歳以上 30歳未満	20歳未満	回答数
住民の意識啓発	8.0%	6.9%	11.9%	14.7%	13.5%	5.7%	10.7%	6.1%	202
住民参加のまちづくり	9.7%	14.8%	14.6%	15.6%	17.0%	16.4%	13.3%	29.3%	294
他の地域との連携	4.1%	3.3%	4.0%	4.3%	8.2%	6.6%	8.0%	8.5%	95
地域資源の積極的な活用	3.8%	7.1%	8.2%	9.2%	9.9%	6.6%	8.0%	7.3%	147
福祉の充実	16.8%	18.1%	8.4%	8.7%	4.7%	12.3%	8.0%	8.5%	232
農業の振興	17.7%	17.3%	10.4%	7.8%	8.2%	12.3%	8.0%	7.3%	243
企業誘致	6.5%	9.9%	18.1%	17.1%	16.4%	19.7%	17.3%	2.4%	269
観光の振興	2.4%	2.0%	3.3%	4.9%	7.6%	4.9%	14.7%	17.1%	92
地域活性化に関わる市民団体を育てる	3.8%	3.8%	4.0%	3.5%	1.8%	1.6%	1.3%	0.0%	64
地域環境の保全	3.2%	1.8%	4.9%	5.2%	4.7%	2.5%	6.7%	9.8%	82
その他	0.3%	0.8%	3.1%	2.3%	3.5%	4.1%	1.3%	2.4%	40
無回答	20.1%	11.7%	7.9%	4.9%	2.9%	4.9%	2.7%	1.2%	181
無効	3.5%	2.3%	1.3%	1.7%	1.8%	2.5%	0.0%	0.0%	39
合計	339	392	453	346	171	122	75	82	1980

資料：アンケート調査に基づいて筆者が作成。

まず、80 歳以上の人は「農業の振興」という手法への支持率が一番高いのが明らかになり、また、その年齢と相応している「福祉の充実」という手法への支持率も高い。一方、「観光の振興」、「他の地域との連携」などの割に新しい地域活性化手法への支持率が低い。70 歳以上 80 歳未満の人も 80 歳以上の人と同じく福祉や農業等の基本問題の解決を重視する傾向を示していると同時に、一部の回答者（14.8%）は地域を活性化するためには「住民参加のまちづくり」を展開すべきだという考えを持っていることが注目を値すると考えられる。60 歳以上 70 歳以上の人の場合、伝統的な農山村開発方式としての「企業誘致」への支持率が一番高く、18.1%に達した。「企業誘致」につぎ、「住民参加のまちづくり」と「住民の意識啓発」等を推進したほうが良いという考えを持つ人の割合もそれぞれ

れ 14.6%と 11.9%となった。一方、「観光の振興」という手法を選んだ人の割合がわずかに 3.3%であり、一番低い。

50 代も 60 代と同じように、「企業誘致」の回答率は 17.1%に達し、最も高い。なお、「住民参加のまちづくり」(15.6%)と「住民の意識啓発」(14.7%)のような地域活性化における住民の重要性が約 3 割の人に認識されている点が注目を値するが、その一方で、支持率が一番低いのは「地域活性化に関わる市民団体を育てる」という手法である。40 歳以上 50 歳未満の人の中で、「住民参加のまちづくり」への支持が一番高くの 17.0%となり、それにつき、「企業誘致」という回答の割合も 16.4%となったが、支持率が最も低いのが「地域活性化に関わる市民団体を育てる」という手法である。30 歳以上 40 歳未満の人の場合、「企業誘致」という回答の割合が一番高くの 19.7%となり、「住民参加のまちづくり」への支持率も 16.4%に達したのに対して、「地域活性化に関わる市民団体を育てる」という回答の割合も最も低いのが明らかになった。

20 代の人も「企業誘致」(17.3%)への支持が一番高く、近年流行している観光振興という手法を重視する人も多い。20 歳未満の人の場合、3 割弱の回答者は「住民参加のまちづくり」という手法を支持し、「観光振興」という回答の割合も 17.1%となった。

年齢層を問わず、「住民参加のまちづくり」という手法への支持率が一番高く、「住民の意識啓発」を支持する人も多いというのは明らかになった。言い換えれば、地域を活性化するためには、住民の意識の向上及び住民の参加が大事だという認識を持つ豊栄住民が多く、地域住民の力の重要性が認識されていると判断される。

豊栄の地域活性化に対し、各年齢層はどのような意識傾向を持っているかをまとめると、高齢者は地域の活性化にあたっては、まずは福祉の充実や町の主要産業としての農業の振興などの町の根本的な問題の解決が先立つべきだという意向を持っていると考えられる。中年層は企業誘致という伝統的な地域活性化方式を賛成し、住民の意識啓発や住民参加のまちづくりを重視する意向を示している。青少年は中年層と同じように住民参加のまちづくりを重視する傾向を見せ、近年非常に流行している観光振興という手法を賛成する意識傾向もある程度示していると考えられる。

ii. 豊栄住民の地域の発展方向に対する認識

豊栄住民の地域の発展方向に対する認識の単純集計を行った結果は図 12 に示す。住民の豊栄町の発展方向に対する認識として、「暮らしよい生活環境づくりを重視する」という方向性を支持する人の割合が最も高いと判断される。その次に、「地域特性を生かした元気な農業を展開する」という方向性を賛成する人も多いである。なお、前述したように、豊栄町の活性化手法の中で、「地域資源の積極的な活用」という手法への支持度があまり高くないのに対して、地域の発展方向として、「地域の資源や魅力を再発見し、その活かし方に工夫する」を望んでいる人の割合が割に高いのが明らかになった。一方、「都市との交流を強化する」や「広報・宣伝活動に力を入れて地域の良さをアピールする」といったような方向性への支持が低いという傾向が示され、豊栄住民は他の地域と交流する意向及び自分の住んでいるところを積極的に宣伝する意識が低下しているのではないかと推測される。

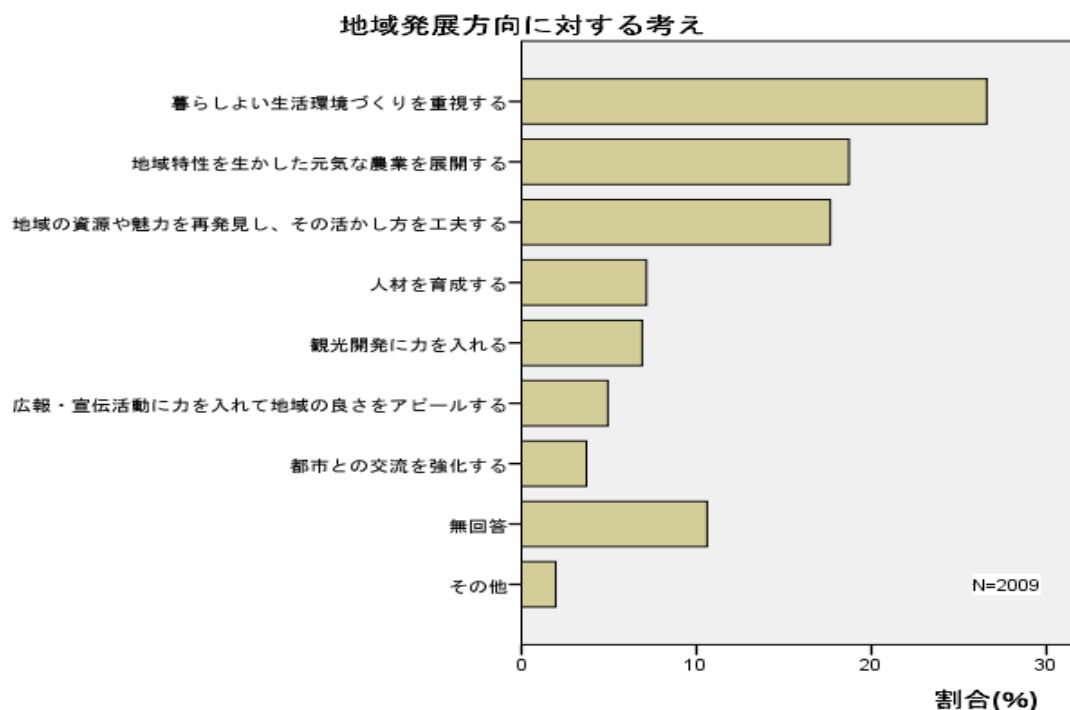


図 12 豊栄住民の地域発展方向に対する考え

資料：アンケート調査の結果により筆者が作成。

各年齢層の地域発展方向への認識の区別を把握するために、年齢と地域の発展方向に対

する考えのクロス集計を行い、その結果は表 21 に示す。

具体的に言えば、80 歳以上の人の中で、「地域特性を活かした元気な農業を展開する」への支持が最も高く、27.0%となり、それにつき、「暮らしよい生活環境を重視する」という方向への賛成率も 26.7%に達した。一方、「都市との交流を強化する」（1.5%）や「広報・宣伝活動に力を入れて地域の良さをアピールする」（2.3%）のような方向性を重視する人の割合が極めて低い。70 歳以上 80 歳未満の人の場合、支持率が一番高いのが「暮らしよい生活環境を重視する」という方向性であり、31.4%となった。「地域特性を活かした元気な農業を展開する」への支持率も 26.8%となったが、70 代の人も 80 歳以上の人と同じような意識傾向を示し、都市との交流や地域の良さをアピールするといったような方向性への賛成度が非常に低いと判断される。60 歳以上 70 歳未満の人の中で、「暮らしよい生活環境を重視する」という回答への支持率が 27.3%となり、一番高くなった。また、「地域の資源や魅力を再発見し、その活かし方を工夫する」という回答の割合も二番目に高くの 24%に達した。一方、観光開発や都市との交流の強化等の方向性への支持率が低いことが明らかになった。50 代と 40 代は 60 代とほぼ同じく意識傾向を持ち、「暮らしよい生活環境を重視する」と「地域の資源や魅力を再発見し、その活かし方を工夫する」への支持率が高くなった。ただし、50 代と 40 代の人の中で、観光開発のような方向性を支持する人の割合は 60 代のより高くなった。

表 21 年齢と地域の発展方向に対する考えのクロス集計表

	80歳以上	70歳以上 80歳未満	60歳以上 70歳未満	50歳以上 60歳未満	40歳以上 50歳未満	30歳以上 40歳未満	20歳以上 30歳未満	20歳未満	回答数
観光開発に力を入れる	3.5%	5.4%	4.6%	8.4%	9.4%	12.3%	13.3%	20.7%	141
地域特性を生かした元気な農業を展開する	27.0%	26.8%	18.3%	13.6%	12.3%	11.5%	9.3%	15.9%	382
地域の資源や魅力を再発見し、その活かし方を工夫する	10.6%	12.8%	24.0%	21.7%	22.8%	15.6%	32.0%	9.8%	360
広報・宣伝活動に力を入れて地域の良さをアピールする	2.3%	3.8%	4.2%	3.5%	6.4%	5.7%	12.0%	23.2%	100
都市との交流を強化する	1.5%	2.8%	2.9%	5.5%	7.0%	7.4%	1.3%	7.3%	76
人材を育成する	8.8%	5.4%	6.6%	11.3%	6.4%	3.3%	5.3%	7.3%	145
暮らしよい生活環境づくりを重視する	26.7%	31.4%	27.3%	26.6%	26.3%	30.3%	22.7%	15.9%	542
その他	0.3%	0.0%	3.1%	3.2%	3.5%	5.7%	1.3%	0.0%	40
無回答	17.9%	10.2%	6.8%	4.6%	4.1%	6.6%	2.7%	0.0%	165
無効	1.5%	1.5%	2.2%	1.7%	1.8%	1.6%	0.0%	0.0%	32
合計	341	392	454	346	171	122	75	82	1983

資料：アンケートにより筆者が作成。

30 歳以上 40 歳未満の人の中で、約 3 割の人は「暮らしよい生活環境を重視する」と

いう回答を支持し、その他に、「地域の資源や魅力を再発見し、その活かし方を工夫する」や「観光開発に力を入れる」、「地域特性を活かした元気な農業を展開する」というような発展方向を支持する人それぞれ10%ぐらいとなり、一定のばらつきを見せている。一方、「人材を育成する」への支持率が一番低いことが明らかになった。20歳以上30歳未満の人の場合、「地域の資源や魅力を再発見し、その活かし方を工夫する」という回答の割合が最も高く、32%となった。また「暮らしよい生活環境を重視する」という方向性を支持する人の割合も22.7%に達した。その一方で、「都市との交流を強化する」を賛成する人の割合がわずか1.3%となり、極めて低いと考えられる。20歳未満の人の意識傾向は他の年齢層と大別し、「暮らしよい生活環境づくりを重視する」ではなく、「広報・宣伝活動に力を入れて地域の良さをアピールする」という発展方向への支持率が最も高いのが明らかになった。また、「観光開発に力を入れる」という方向性を支持する人も約2割りを占めていることにも注目を値する。

地域の発展の方向性に対する考えが年齢層により別々であるが、総じて言えば、「暮らしよい生活環境を重視する」という地域の発展方向への支持が主流的であると考えられる。その理由としては「豊栄では買い物の便利性がちょっと低い」とか「豊栄では車がないと足がないみたいで、年寄りが年齢のために運転ができないというようなことがあり、病院などに行くのは面倒くさい」、「職場があまりない」というような様々なことが挙げられる²⁶⁾。つまり、地域を発展するために、インフラの整備や各種サービスの提供などにより、生活利便性の向上や生活環境の整備が先に行くべきだという認識を持つ住民が多く、住民がやはり自分の日常的な生活と切実な関係を持つことを重視している意識傾向を見せていると考えられる。一方、他の地域との交流や地域の良さのアピールの重要性があまり認識されないことから豊栄住民の意識には一定程度の閉鎖性を持っているのではないかと推測される。

iii. 小括

豊栄の地域活性化や地域の発展方向に対する考えは回答者の年齢により一定程度の意識差を呈しているが、ある程度の共通性を持っていると考えられる。地域の活性化に対し、住民参加のまちづくりや住民の意識啓発を展開すべきだというような認識を持つ人が多く、すなわち、住民の力を重視する意識傾向が明らかになった。また、伝統的な発展方式とし

ての企業誘致という手法を支持する住民も多い。さらに、豊栄町は農山村であり、農業が町の主要産業であるため、農業の振興というような手法への支持率も割に高い。

今後の地域の発展方向については、暮らしよい生活環境づくりが住民の最も望ましい方向性であると考えられる。また、地域特性と活かした元気な農業の展開や地域資源や魅力を再発見し、活かしていくという考えを持つ住民の数も割に多い。その一方で、宣伝等の手段で地域の良さをアピールしたり、都市との交流を強化したりするような方向性への支持率は極めて低いと判断される。

V 豊栄町におけるエコミュージアムの提案

1) 豊栄町におけるエコミュージアムづくりの導入必要性についての検討

豊栄町はそもそもエコミュージアムという構想がないし、地域活性化等の計画も実施されていない。本稿では、そこにあえてエコミュージアムの提案を試みる。その理由は次の通りである。

まず、エコミュージアムその理念は地域資源の発掘及び活用を強調し、また住民自らの力で事業展開を重視し、自然環境にやさしいまちづくりと生活優先のまちづくりの一手法だとされた。それに、エコミュージアムのエコ（eco）にはエコロジー（ecology）とエコノミー（economy）の二つの要素が含まれているとされ、このような生態面及び経済面上の波及効果は現在の豊栄町にとって望ましいことだと考えられる。具体的に言えば、豊栄町には各種体験施設が散在し、体験型観光で豊栄町を訪れたり、ヘソ祭り等のイベントで訪れたりする観光客がいるが、残念なことに、現状においては、これらの観光客がそれぞれの限られている目的だけで豊栄町に来る。それに、これらの観光客は地域の歴史遺産等についてはほとんど知らないのが実情である。したがって、地域にあるすべての遺産を発掘し、整備するまちづくりの手法としてのエコミュージアム活動の展開により、町の魅力をより多くの人に知ってもらうことができ、観光客の増加とそれに伴って経済効果が高まってくることも期待できる。

また、豊栄町の現状から考えてみると、まずは町内の資源は地域の所々に点在し、分散性があり、町内の各施設もそれぞれ活動しており、独自性を持っていると考えられる。それ故に、エコミュージアムはこうした分散性の持つ地域資源をうまく結びつける有効策だと考えられる。なお、町内には地域資源あるいは遺産等がたくさん残されているが、アンケート調査の結果から見ても、フィールド調査や各地域センター長へのインタビュー調査等の結果から見ても、住民たちは地域に点在している数多くの資源との関わりが割に弱いどころか、こうした資源への認識も全然足りないという現状が判断される。もしこれら豊富な地域資源を賢明に利用できれば、地域住民が自分の生活している土地への愛着心及び誇りを喚起するができ、地域の自立的・内発的发展という目的も達成できると思われる。それゆえに、地域資源の発掘と活用を活動のベースとするエコミュージアムは豊栄の現状を打開するための有効策だと考えられる。

さらに、豊栄町は東広島市に編入する前に、町独自の長期総合計画でまちづくり計画を策定した歴史があり、東広島市と合併した後も全町一丸で諸施策の実現に取り組む体制を確立し、農業資源、歴史・文化資源の活用、体験村構想の検討等の町の発展方向が定められたが、その後具体的なまちづくり活動は展開されなく、町づくりの先が見えない²⁷⁾ という実情が存在している。エコミュージアムはちょうどこれらまちづくりの引き継ぎとして登場できたら、豊栄町のこれからの発展に重要な役割を果たせると予想される。

一方、聞き取り調査によると、町内には地区別々で地域活動を展開し、地域全体的な活動はあまりなく、住民たちの地域活動への参加意欲も割に低く、特に年寄りたちは家に閉じこもる傾向がよく見られるような問題点が存在しているそうである。エコミュージアムのような住民全体を集めることのできる活動を展開したら、老人の家に閉じこもる状況が改善でき、住民の地域活動への参加意欲を高まっていける。人々の地域への関心を再度呼び寄せるようなメリットもあると考えられる。

東広島市の総合計画の面から見ると、東広島県域都市建設計画には、豊栄町は福富町、河内町とともに「田園交流ゾーン」と位置づけられ、豊栄町の将来像は“緑豊かな自然の中でゆとりある居住環境を備え、農業・観光などの地域資源を活かして交流が盛んな活力のある地域”²⁸⁾と定められた。それと相まって、「心のふるさと県央三町協議会」が結成され、県央の豊栄・福富・河内の3町の事業所が協力し、体験や食事、イベント、特産品販売に至るまで連携し、観光客に「心の安らぎ」や癒しを提供する等の事業を行っている²⁹⁾。なお、この県央協議会を主として展開されている県央三町体験観光事業は平成23年から三年連続で東広島市シティプロモーション認定事業に認定される³⁰⁾。それ故に、豊栄町がシティプロモーション事業の展開を契機に、農業・観光産業の発展で再発展していく潜在能力が十分にあると考えられる。しかし、県央三町の中で、福富町には「道の駅 湖畔の里福富」という年間利用者数が30万人以上の人気スポットがあり、このような拠点施設を活用しながら、独自性のある多くの事業所の活動により、福富町の観光事業がうまく進められている。河内町には竹林寺のような観光名所・史跡が数多く残られ、ロマンあふれる地域と呼ばれる一方、各種体験型観光も進められている。その一方で、豊栄町は地域資源が豊富で、観光スポットが数多くあり、トムミルクファームのような特色の持つ体験施設もあるが、地域発展の拠点施設もないし、町内が一丸となって積極的に観光事業展開していこうという態勢があまり見せていないと感じられる。また、吉川地区には工業団地の建設により大きな発展を遂げ、豊栄町の若者さえ吉川工業団地に移住するような傾向が

あるそうである。こういう周辺の地域の高揚している発展気運と少し違って、豊栄町の発展の歩みが遅れているといえよう。住民たちも豊栄町に工業団地の建設等の開発を望んでいるが、豊栄町自身の状況はこのような開発や建設のレベルに達してないとされ³¹⁾、政府の方も豊栄町を工業化し、開発する計画がない。したがって、エコミュージアムが住民主導の活動として、豊栄町のような総合的開発計画のない町にとって最適な発展方式であると考えられる。さらに、エコミュージアムの導入により、地域の散在している資源をうまく結びつけることもできるし、各自で事業を展開している施設・事業所を連携させ、共同で活動を展開することもできると考えられるため、エコミュージアムという手法は豊栄町を新しい発展の道に導けるのではないかと考えられる。

また、豊栄町には八つの大字に分けられ、各地区には地域センターのような地域活動の拠点施設があり、町内には町民自治会のような団体もある。こうした各地区の拠点施設及び地域の団体や地域活動のリーダーの存在はちょうどエコミュージアムにとって不可欠の要素である。言い換えれば、このような施設や活動のリーダーのような基本要素があるからこそ、豊栄町はエコミュージアムに向いていると考えられる。

前述した豊栄住民を対象としたアンケート調査の結果から分析しても、エコミュージアムという手法は豊栄町の住民意識と若干の一致性がある。具体的いえば、まず、住民の豊栄町の数多く残されている地域資源の活かし方に対する認識として、資源の保護と伝承及び資源利用のための通信網等の社会基盤の整備というような意識を持つ住民が多く、エコミュージアムの資源の再発掘の理念はこうした住民の地域資源の活用方式に対する意識と合っていると考えられる。また、住民の参加したい活動として、健康・福祉活動に次いで、豊栄住民はまちづくり・地域活性化活動に熱心を持つ住民も多いと判断された。エコミュージアム活動は地域活性化の一手法として、ちょうど住民の地域活動への参加希望に応えられると考えられる。さらに、地域の活性化に対し、豊栄住民は住民参加のまちづくりの展開を重視しているが、と同時に、企業誘致のような伝統的な農山村地域活性化の方式への支持率も高い。ただし、今の状況から見ると、企業誘致により豊栄町を活性化する可能性が低いと考えられる。それ故に、住民参加を重視しているエコミュージアムの理念は住民意識と豊栄町現時点の状況と最大程度に一致していると推察される。最後に、豊栄の今後の発展方向への認識として、住民には暮らしよい生活環境づくり、または地域資源や魅力を再発見し、その活かし方に工夫するような方向性への支持率が高いと判断された。このような住民意識があるため、豊栄町においては、エコミュージアムづくりが望ましい発

展方向だと考えられる。

それに、町内の地域活動のリーダーとしての各地域センターのセンター長と東広島市豊栄支所の支所長のような地域の状況をよく知っている方の意見から分析すると、いろいろな地域課題に直面している豊栄町には振興策の実行は目の前に迫ってくるが、大規模の工業や観光開発のレベルに達していないのが実情である³²⁾。こんな状況をめぐって、地域のすべての資源をうまく活用することができ、住民の地域活動への熱心を喚起することのできる内発的な発展方式としてのエコミュージアムの導入が望ましいとされる。

上記の町の現状や住民の意識等の様々な背景があるため、エコミュージアムづくりは豊栄町の今後の村おこしにおける望ましい一手法だと考えられる。次の節には町内の地域資源のエコミュージアム構想案への利用の再考を試みたい。

2) 豊栄町におけるエコミュージアム構想案に適用する地域資源の再考

エコミュージアムは地域の資源をもとに作っていくものである。前述したように、住民の地域資源に対する重要度評価により町内の資源を自然型資源、農村型資源、遺跡型資源及び神社型資源の四つのクラスターに分類された。豊栄エコミュージアム構想案には、各クラスターの資源を相互的につなぐのは大前提であり、そのイメージは図13に示す。

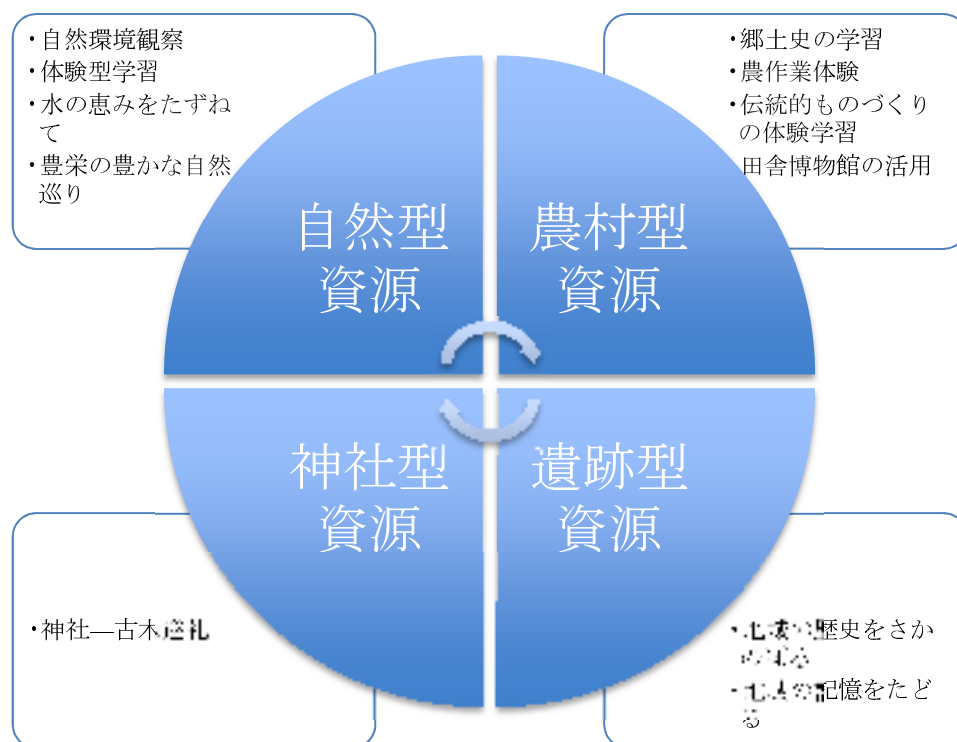


図13 豊栄町エコミュージアム構想案の資源利用イメージ

資料：筆者が作成。

①自然型資源：豊栄の豊かな自然と人をよく結びつけるために、「豊栄の豊かな自然巡り」という主テーマを設定し、このコースに豊栄町の自然型資源を取り入れる。その中で、川、池及びその中の生物などを主テーマとする「水の恵みを訪ねて」コースや「板鍋山に学ぶふるさと」コースを設定し、自然環境の観察や体験型学習の展開も賢明の方式であると考えられる。その中で、板鍋山や天神嶽、棕梨川のような住民と関わりの強い山・川類の資源はもちろんであり、多種類の動植物資源も重要な展示物となる。特に、近頃豊栄町での生息が確認されるオオサンショウウオは自然型コースの重要な一要素としたい。なお、現時点でいろいろなオオサンショウウオに関する調査・保護活動が町内に行われ、来年度の日本オオサンショウウオの会全国大会が豊栄町を開催地と選定された。このような活動の展開を背景に、豊栄エコミュージアムにもこうした活動と関わりながら活動を展開すべきだと考えられる。例えば、エコミュージアムのサテライトの役割にも兼ね、オオサンショウウオに関する情報を展示する施設を建設するのが必要だと考えられる。オオサンショウウオを除き、乃美地区の田の畦一面に咲く色とりどりのシバザクラも見事であり、毎年4月に「シバザクラまつり」が行われたが、シバザクラの展示や活用は決して十分とは言えないと感じられるので、シバザクラのより保護及び活用を図るために、豊栄エコミュージアム構想案にもシバザクラを入れない。

②農村型資源：前述したように、住民との関わり度合いが一番高く、住民の重要度評価度が最も高い資源は農村型資源であるため、農村型資源を本エコミュージアム案の最も重要な構成要素とする。こうした農村型資源をよく地元住民及び外人に展示するために、農村体験型観光にも兼ね、「農村生活とのふれあい」というコースを設置し、豊栄町を町内外の人の「心のふるさと」になれるように工夫すべきである。まず、米、リンゴなどの農・食資源については、豊栄には金安りんご園、小石川りんご園やトムミルクファーム、ケンコーキノコ園、高光養鶏場などの体験施設があり、こうした体験施設を活動拠点として利用しながら、リンゴ狩りやマツタケ狩り、稲刈り、田植え体験、山菜摘み、ふるさと料理体験などの様々な農作業体験活動の展開により、人々が農業生産を実感することができ、それら資源を現地において保存・活用することもできる。なお、農村型資源を活用し、農作業体験活動を展開することは農村型資源の価値の向上、さらには町の基幹産業としての農業の振興に役に立てると考えられる。一方、神楽（五行祭）のような資源は地域の民俗文化の重要構成要素であり、保護と伝承はもちろんであるが、神楽体験のような活動を豊栄エコミュージアム活動に入れ、もっと積極的に地域外の人に展示するのも必要だと考え

られる。また、伝説や民話・民謡などを活用し、郷土史の学習活動を行ったり、伝統的なものづくりの体験学習を展開したりするのも必要である。なお、農村型資源を活用するには、町内の「田舎博物館」が拠点施設としたい。具体的に言えば、この博物館にある古民家から収集した家具・農機具等の展示の他に、昔の写真の公開や、地域特有の民俗文化の歴史・変遷、年中行事・まつり等の紹介等の取り組みも必要だと考えられる。このような博物館の展示により、住民及びよそ者を豊栄町の過去を感じ取られ、民俗文化を地元住民及びよそ者をより一層了解してもらうことも可能である。なお、豊栄どまんなかへソまつりのようなまつりは季節性があるため、まつりの展開する時期だけにエコミュージアム事業に取り入れたい。

③神社型資源：豊栄町内の数多くの神社も町の貴重な地域資源であり、日常生活の中で住民とそれら神社との関わりが割に強いため、こうした神社型資源も豊栄エコミュージアムづくりの不可欠な要素だと言える。豊栄エコミュージアム構想案には「神社～古木巡礼」というコースで神社型資源を活用したい。具体的に言えば、豊栄町の代表的な本宮八幡神社と畝山神社は神社そのもののほかに、その境内にある植物群・巨樹群も特色のあるところであり、貴重な価値を持っている。したがって、このコースには乃美地区の本宮八幡神社と神社所蔵の県重要文化財としての紙本墨留大般若経及び神社社叢の植物群の見学、畝山神社及びその境内にある巨木の観察が含まれている。

④遺跡型資源：住民と遺跡型資源との関わりが非常に弱く、重要度評価も低いという住民の意識傾向が示されたが、町内の宝物を再認識させ、町の過去を了解してもらうという目的を持つエコミュージアムにとって、こうした遺跡型資源は必要不可欠の存在であると考えられる。遺跡型資源の利用にあたっては、「豊栄の歴史をさかのぼる」や「地域の記憶をたどる」というコースを設置し、それを豊栄町エコミュージアム構想案の一環とする。なお、「豊栄の歴史をさかのぼる」コースには古代住居跡見学、窯跡遺跡見学、製鉄遺跡見学等の町内の遺跡の見学だけではなく、町内に出土した縄文時代の土器の出土品や歴史型資源の見学・観察も含まれている。

なお、各クラスターの資源の位置づけ及び利用方式を検討する上で、住民の地域資源への重要度評価及び関わり度合いをも考慮した結果、本研究におけるエコミュージアム構想案の資源具体例は以下の通りである。

- ① 農村型資源：神楽、田園風景、松茸、リンゴ、どまんなかへソまつり、豊栄踊り、トムミルクファーム、乳製品、伝説、民話民謡

- ② 自然型資源：板鍋山、天神嶽、豊栄大池、どんどん淵峡、棕梨川、シバザクラ、オオサンショウウオ
- ③ 神社型資源：乃美本宮八幡神社、畝山神社、国津神社
- ④ 遺跡型資源：古代住居跡、窯跡遺跡、製鉄遺跡、城跡、各種出土品、古墳・古墓

3) 豊栄町のエコミュージアム構想案

i. 基本理念

本稿では、豊栄町の地域課題を分析した上で、山形県朝日町及び福井県勝山市、広島県北広島市などのエコミュージアム事業を展開し、エコミュージアム事業により地域活性化に一定の成果を得た地域の経験を参照しつつ、豊栄町のエコミュージアム構想案を試みる。豊栄町エコミュージアムは、今後町のまちづくりの推進上の基本的な枠組みを示すものであり、民間と行政とともにエコミュージアムによる新しい町づくりを進めていくのが望ましい。豊栄町のこれまでのまちづくりの理念や県央三町で行われている体験観光事業の理念などを沿いながら、豊栄町エコミュージアム構想案の基本理念は仮に「こころのふるさと どまんなかのまるごと博物館」を掲げ、キャッチフレーズは「癒しの豊栄町へ」とする。その理念の基本は図 14 に示す。

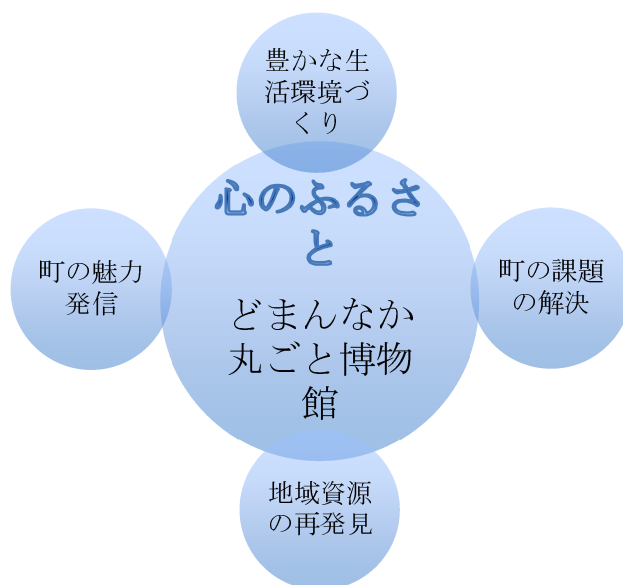


図 14 豊栄町エコミュージアム構想案の理念図

資料：筆者が作成。

具体的に言えば、住民の意志を考慮しながら、豊栄エコミュージアムは、まず町全体を視

野に入れ、町の現存している問題点・課題の解決を目指し、ソフト面の整備を優先しながら、豊かな生活環境づくりを図るのが基本的な目的となる。ただし、豊栄町におけるエコミュージアムの展開は単に地域問題の解決を目指すのではなく、地域住民が「自分の生活しているところが誇りになる」と思えるような地域づくりを目指し、さらに、地域外の人にも町の魅力を感じてもらい、豊栄町は町内外の人の本当の「心のふるさと」になれるという目的も含まれている。それに、住民主体のエコミュージアム活動で地域が盛り上がり、町の元気を再度取り戻し、高齢化に負けない地域づくりを達成することも大きな目標である。

前述したように、豊栄町の住民は日常生活で接触できる資源・遺産との関わりが強く、それら資源への重要度評価も高いが、歴史的資源や動植物資源等の大切さを認識する人が年寄り以外にあまりいないという現状が存在していると考えられる。このような現状を背景に、住民の手で地域の宝物の発掘から保存・活用へとつながっていくのは豊栄エコミュージアムにとっても、町将来の発展にとっても大事だと考えられる。地域資源を活かし、エコミュージアム活動の展開により、豊栄町の独自の魅力を他の地域に発信し、外の多くの人が豊栄町に注目し、「癒しの豊栄町」に来てくれるのが望ましいことである。

ii. 概念図

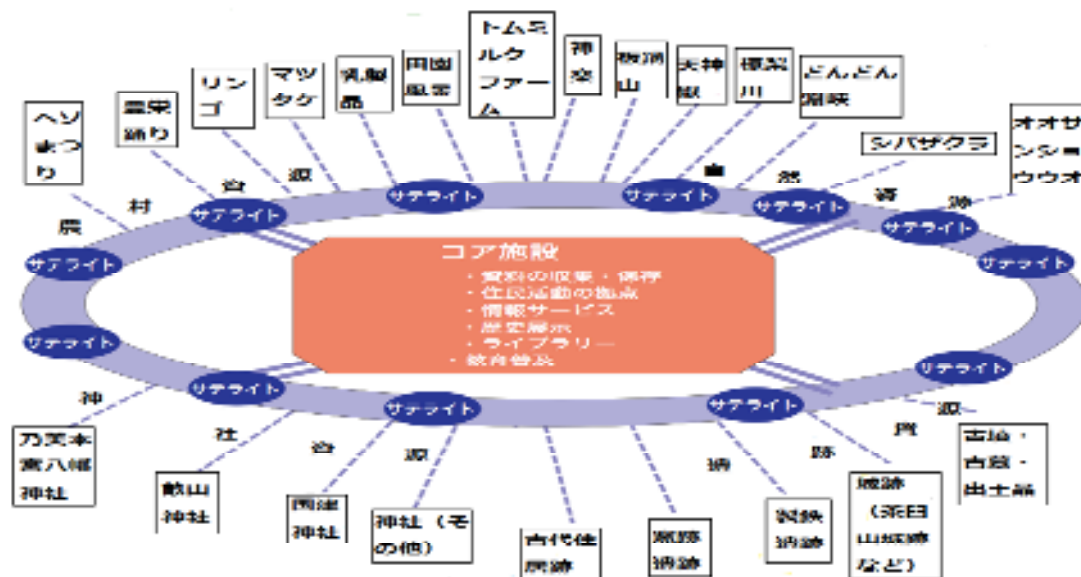


図 15 豊栄町エコミュージアム構想案概念図

資料：勝山市エコミュージアムの概念図を参照しながら筆者が作成。

iii. 仕組み

豊栄町におけるエコミュージアム構想案の仕組みのイメージは図 17 に示す。

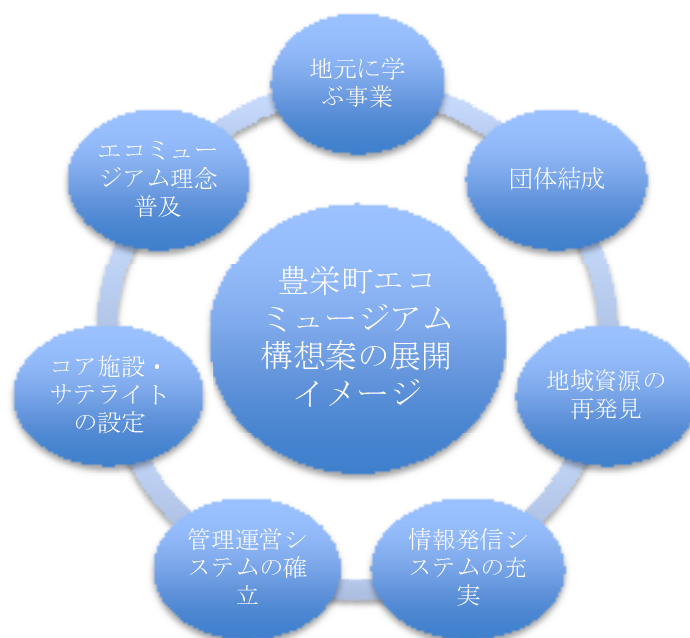


図 16 豊栄町エコミュージアム構想案の展開イメージ

資料：筆者が作成。

①地元で学ぶ事業の展開

エコミュージアム事業の展開にあたって、地域のことについての勉強、自分の暮らしや地域の見つめ直し等の取り組みは大前提だと考えられる。こうした地元で学ぶことは「地元学」と呼ばれ、地域のあるものをさがし、地域の持っている力、人の持っている力を引き出し、あるものを新しく組み合わせる³³⁾ことはエコミュージアムづくり事業の中でまず行うべき一環だと考えられる。例えば、各地区それぞれで自分の地区に関する勉強会を開催したり、各地区共同で町歩きや町の宝物さがし等の様々な地域活動の展開により地元のことについて勉強したり、よそ者や観光客などの力を借りながら新しい視角で地域を観察したりするような取り組みが必要である。また、地元で学ぶ事業の展開により、エコミュージアム活動の案内人を育成することも可能である。学校の地域連携を推進しながら、学校教育の中での地元学を導入し、子供達を地元のことを勉強させるのも重要だと考えられる。例えば、山形県朝日町には、地域の多くの学校がエコミュージアム活動と関わり、

地域の持つ教育力を活かし、地域素材を教材化して、生き生きとした体験を伴う授業や、郷土そのものを学ぶ活動（菅井ほか、1999）への継続的な実践は良い参考例だと考えられる。このような活動により、住民に自分の生活している土地のことを以前より了解してもらうことができ、地元の魅力を再認識してもらうこともでき、地元への愛着心を再度喚起させることもできると考えられる。最終的には、豊栄住民が地元に対して誇りを持って生活していくことが望ましい方向である。

それに、地元のことを学んだ上で、地元のことや良さを町内外へ発信し、アピールすることも重要だと考えられる。豊栄町には現時点で、乃美地区で茶臼山関係の活動が行われ、子供たちを茶臼山に登って地域のことを知ってもらうような取り組みが進めているが、他の地区にはこうした地域勉強活動があまり行われているのも実情である³⁴⁾。したがって、全地区において、地元学ぶことにもっと力を入れるべきだと考えられる。なお、豊栄町内には、以前各小学校を単位に沿革誌や豊栄町史等の貴重な資料があり、このような文献資料を地元学ぶ事業にうまく活用すればより効果的になると考えられる。最終的には、地元学ぶ事業の学習活動の推進及びエコミュージアム活動の展開により、「学習の町づくり」という目標の達成が期待されている。

②エコミュージアム理念の普及及びストーリーづくり

豊栄にはエコミュージアムという理念を知っている人は極めて少ないため、エコミュージアム理念の普及事業も必要だと考えられる。具体的な普及事業として、まずはエコミュージアムの理念・先進事例などをまず各地域センターに紹介し、センター長や班長等の地域に影響力の持つ人によりエコミュージアム普及事業を展開していく。それを踏まえて、エコミュージアムに関する資料やパンフレット等を住民に配布し、エコミュージアムの基本コンセプト、事業内容、展開手順やメリットなどを住民に知ってもらうという作業は必要である。また、エコミュージアムの内容を含むポスターを作成し、地域の拠点施設や掲示板等に貼り付けることにより、住民にエコミュージアムをより一層了解してもらう。エコミュージアムに関する講演会等の活動を展開するのも有効な方式である。

また、地域住民をエコミュージアムの意味をより知ってもらい、エコミュージアム活動を楽しんでもらうために、豊栄エコミュージアムに関するストーリーづくりが求められる。例えば、各サテライトの独自のストーリーを作ったり、エコミュージアム全体に関するストーリーを作ったりすることにより、地域にあるすべてのものの繋がりを形成していく。

なお、エコミュージアムに関するストーリーを作る際には、地域のことをよく知っている高齢者たちの力が必要であり、高齢者に町の歴史や伝説等について聞かせてもらいながら、地域の記憶に沿って物語を作成することが重要である。このようなストーリーづくりをもとに、住民にエコミュージアム事業を分かりやすく紹介することができ、住民の合意を得ることもできるし、さらに住民のエコミュージアム活動への参加意欲を一層高めることも可能だと考えられる。

③エコミュージアムに関する団体の結成

豊栄町には町民自治会等の団体によりイベント、行事等の地域活動を行っているが、エコミュージアム事業の展開には団体の力が必要である。このような地域の有志からなるエコミュージアムに関わる団体（例えばエコミュージアム協力会やボランティア組織）が専門家などと協力しあい、地域の他の既存団体と連携・調整しながら積極的にエコミュージアム活動を行ったら、エコミュージアムの普及事業の推進に役に立てられるのは無論であり、エコミュージアムの学芸員の養成にも役に立てられる。また、こうした団体はエコミュージアム事業の整体運営やコア施設、各サテライトに対して協力・援助する役にもなるため、団体の力によりエコミュージアム事業がより一層円滑的に展開できると考えられる。

④地域資源・遺産の発掘・再発見

エコミュージアムの構築には、地域資源は必要不可欠の要素である。前述したように、豊栄町の地域資源は豊富であり、まだ掘り起こしていない資源も存在していると考えられる。しかも、明確化された資源の中で、住民との関わりが弱い資源もたくさんある。このような現状をめぐって、住民の自力で各種地域資源を掘り起こす活動は必要であり、言い換えれば、住民の参加を重視すべきだと思われる。例えば、地元学の勉強にも兼ね、住民を集めて町を歩きながら町のあるもの、地域の特性を表現できるものを探していくような地域活動を展開したり、学校の授業の中で地域資源の再発見というような授業を加えたりするのも有効的な方策だと思われる。また、地域の資源や遺産についてより詳しく知るためには、高齢者と若者や子供たちとの交流を促し、地域の歴史、自然や産業等との関わりが深い高齢者から聞き出しことも重要である。こういった活動により、世代間の交流を促進することができ、地域の文化や伝統などを伝承することもできると考えられる。それに、住民の意見をベースとして、地域の有志や専門家等の意見を聞きながら、掘り起こした資

源の保全及び活用への検討も必要だと考えられる。以上のような作業を踏まえ、地域の資源分布図や地域のマップを作成し、地域のあるもの、地域の誇りになるものを明確化し、外界に展示することも要求されている。

⑤コア施設・サテライトの設定

豊栄エコミュージアムの中心となる施設のコア施設としては、豊栄町には町のシンボル、活性化の原動力としての生涯学習センターがあり、今までは文化活動並びにスポーツ活動・イベント等の地域活動において重要な役割を持ち、センター内には収容人数 450 名のホールや会議室、図書室、資料室等がある。なお、生涯学習センターは豊栄町の中心部の鍛冶屋地区にあり、各サテライトへのアクセスが便利であるため、本構想案には生涯学習センターをコア施設とする。センターは豊栄エコミュージアムの全体的な情報発信の施設として、豊栄エコミュージアム事業全体の紹介、地域資源や民俗文化、歴史に関する情報の収集及び展示等の機能を持ちながら、エコミュージアムに関する教育普及、豊栄エコミュージアム全体像を分かりやすいための情報発信等の様々な活動を行う場所ともなる。また、エコミュージアムの全体運営等の事業もコア施設で行う。

サテライトもエコミュージアムの重要な構成部分であり、サテライトを設置し、地域資源を町内外の人々により直感的に展示することができ、地域資源の価値を向上させることもできる。さらに、既にエコミュージアム活動を展開しているところの経験から見ると、町のネットワークが広がるということもサテライトを展開してのメリットである（菅井ほか、1999）。なお、各サテライトがつなぎながらエコミュージアム活動を展開するのが要求されている。その際に、各サテライトを巡るエコミュージアムのツアーの企画運営も要求されている。本エコミュージアム構成案のサテライト設置は以下の通りである（図 17 に参照）。

候補地 1 一板鍋山：板鍋山は豊栄町の観光スポットの一つとして、地域住民との関わりが非常に強い。しかも、「板鍋山登山マラソン」という事業は平成 24 年、25 年連続に東広島市シティプロモーション認定事業に入選され³⁵⁾、板鍋山の活用により地域協力し盛り上げた由緒がある。山頂から 360 度のパノラマ展望により、町の地形や地勢等の全貌を了解することができ、山頂にはなごみ園もあるから、町内の自然型資源をめぐる起点としての活用が考えられる。

候補地 2 一棕梨川：棕梨川は町の主要な水源地として重要な意味を持ち、住民との関わ

り度合いも高い。さらに、棕梨川は国天然記念物としてのオオサンショウウオの重要な生息地であり、オオサンショウウオに関する各種調査・保護活動も同河川で行われている。こうしたオオサンショウウオに関する調査・教育普及活動と相まって、棕梨川もエコミュージアム活動の一環として活用し、河川観察やオオサンショウウオ観察等の活動により豊栄の水環境ひいては自然環境を再認識させることもできると考えられる。

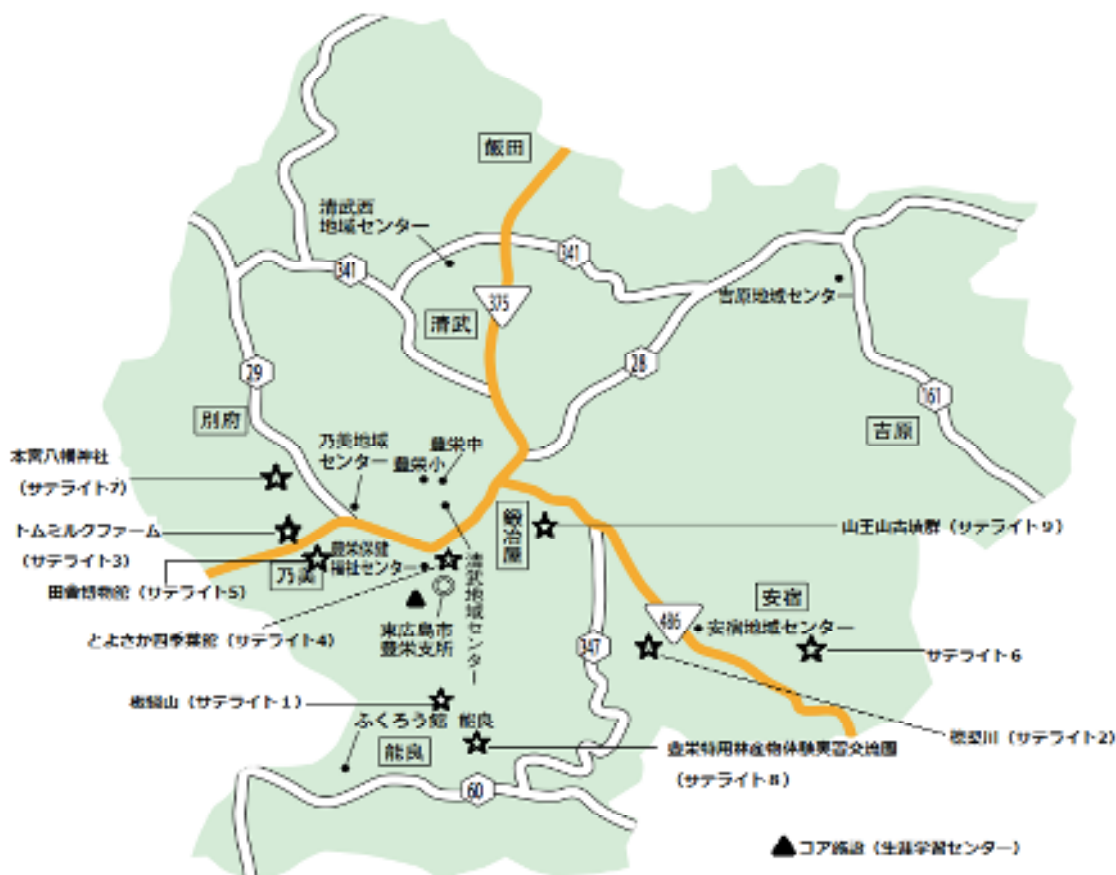


図 17 豊栄町エコミュージアム構想案サテライト及びコア施設イメージ図

資料：東広島市 HP の内容により筆者が作成

候補地３—トムミルクファーム：トムミルクファーム牧場でありながら、いろいろなイベントを開催し、体験メニューを提供し、周辺地区にも有名な体験・観光スポットとなる。それに、「心のふるさと県央協議会」の事務局もトムミルクファーム内にあり、県央三町で展開している体験観光活動と連動し、豊栄エコミュージアム活動のサテライトとしてトムミルクファームを活用したらより効果的だと考えられる。また、トムミルクファームには搾乳体験やバターづくり体験が提供され、こうした体験活動により、人々に地域の特産

物の魅力、食文化を楽しむだけでなく、農村生活を楽しむこともでき、さらに地域の農村型資源の存在意味や価値を再認識させることもできる。

候補地 4—とよさか四季菜館：とよさか四季菜館は国道 375 号線沿いにあり、地元で生産された新鮮な野菜・果物・特産品の直売所であり、食堂もあるから、道の駅のような役割を持ち、サテライトとなり得ると考えられる。

候補地 5—田舎博物館：田舎博物館には古民家から収集した昔の家具・農機具等の展示があるため、豊栄の田舎生活様式を演出するためのサテライトとして活用することが可能である。

候補地 6—安宿地域センター：地域センターとして、地域活動の拠点となる。なお、安宿センターには豊栄民俗資料展示室があり、町内使われていた民俗資料約 600 点を展示し、郷土の歴史や民俗文化に対する認識を深める機能を持っているため、豊栄エコミュージアム構想案のサテライトとなり得る。

候補地 7—乃美本宮八幡神社：乃美地区にある本宮八幡神社は豊栄住民にとって重要な意味を持ち、町の神社型資源をメインとするエコミュージアムツアーの起点としての活用が考えられる。

候補地 8—豊栄特用林産物体験実習交流園（旧能良公民館）：行政、生涯学習、地域センター並びに体験施設の役割を持つため、エコミュージアムのサテライトとしても利用できる。

候補地 9—山王山古墳群：町重要史跡として、学術上重要な意味を持ち、豊栄町の歴史を味わえる地域の宝物だと言える。したがって、山王山古墳群を「豊栄町の歴史を満喫する」コースの起点として活用したい。

なお、各サテライトをお互いにつなぐことにより、住民や観光客等を地域のすべてのスポットを周遊させ、エコミュージアム全体を感じさせるためには、サイクルリングロードを整備する必要があると考えられる。また、各サテライトにはその特徴や歴史の内容の含む解説板の配置にも工夫すべきだと思われる。それに、以上の候補地を除き、各地域の地域センターや旧学校跡地をサテライトとして活用する可能性もある。

発見の小径は、各コースの地域資源をたどる道である。こうしたディスカバリートレイルの設定は地元の人を中心に決める。例えば、各古墳古墓、城跡などをつなぐ道が発見の小径となる。

⑥管理運営システムの確立

エコミュージアムの理念に則り、まずはエコミュージアム全体を運営する組織が必要であり、本エコミュージアム構想案は仮に豊栄エコミュージアム運営委員会と称する。また、エコミュージアム運営委員会の補助組織として、エコミュージアム協力会やボランティア組織の設立も必要だと考えられる。さらに、エコミュージアムの調査研究活動等に専門的な意見や指導を与える学術委員会のような組織の設立も要求されている。

⑦情報発信システムの充実

エコミュージアムは、地域の人が地域のことを調べて、勉強していく学校、研究所であると同時に、それを地域内外の人に伝えていく施設でもある。それ故に、エコミュージアム事業を展開していく際に、町の情報等を外界に発信することが重要だが、町内にはホームページがないから、よそ者であれ、豊栄住民であれ、町に関する情報を入手するのが非常に難しいという状況が存在している。したがって、インターネットを活用しながら、町のホームページやブログなどを開設したり、各種 PR 活動を行ったりするようなことによって、町の情報を多手段で町内外へ伝え、情報発信システムの充実を図ることもエコミュージアム活動の重要な一環だと考えられる。

iv. 目標像

豊栄町の現状や課題などを考量しつつ、前記した基本理念をもとに、豊栄町エコミュージアム構想案の目標像は以下の通りである。まずはエコミュージアム事業の展開により、地域課題を解決し、町の豊かな生活環境づくりを実現していくことである。次に、エコミュージアム活動の展開を契機として、町内の各地区の連携関係及び繋がり強化を実現し、地域活動の協働性を深化していくことである。また、エコミュージアム事業の展開により、町内における新しいネットワークを築くとともに、地域活動のリーダーを養成し、町内の人づくりを促進し、マンパワーを一層アップしていくことである。それに、豊栄町エコミュージアム活動により、地域資源を再発見し、活用しながら、資源の価値を向上していくことである。また、エコミュージアム活動の展開により、住民の意識を一変し、地域活動を活性化していくことである。続いては、豊栄町の独自性と豊かさを地域住民全体に認識してもらうとともに、町内外へと発信し、豊栄町を人々の「こころのふるさと」になれるようにすることである。最後に、エコミュージアム活動を展開するとともに、各

種体験観光を推進することにより、町の基盤産業の農業及び新興産業の観光業の振興を実現し、最終的に町の産業の活性化を実現していくことである。

4) 豊栄町エコミュージアム構築に向けた主な課題

豊栄町におけるエコミュージアムづくりには様々な地域課題や問題点が存在し、エコミュージアム構想案を実現するためには、こうした課題の解決に工夫しなければならないと考えられる（図 18 に参照）。

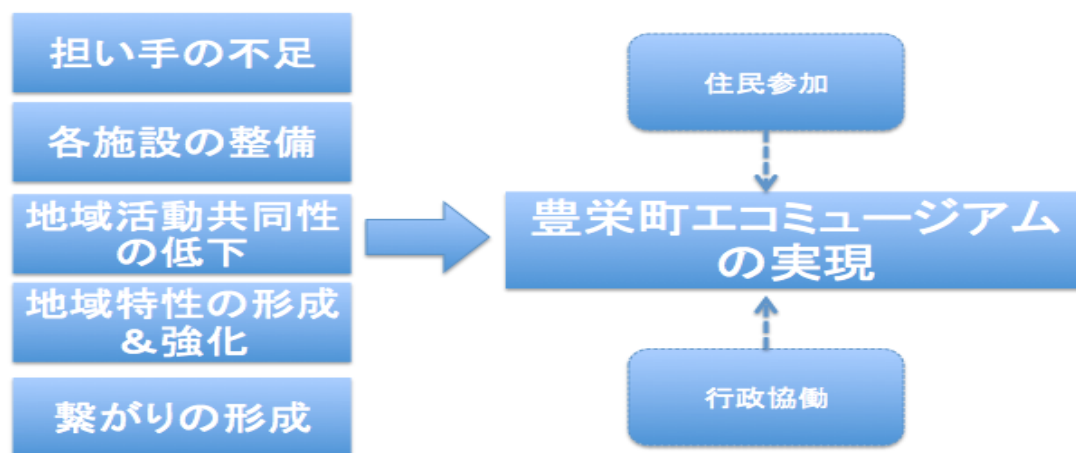


図 18 豊栄町エコミュージアム構想案構築に向けた主要課題

資料：筆者が作成。

まず、エコミュージアム事業を展開するためには、予算上の問題も含み、行政側の支持が必要である。また、エコミュージアム事業の要求される各施設の整備も課題となる。町内には各地域センターがあり、このような地域活動の拠点施設をエコミュージアム活動の理念に沿いながら整備し、活用することが必要だと考えられる。

それに、町の少子高齢化や若年層の流出等の問題を背景に、エコミュージアム事業の展開には、最大の問題点としてはマンパワーの不足、地域活動のリーダーの不足という問題が挙げられる。特に、熱心に地域活性化活動を行っている団体や個人の欠如という問題の改善が必要である。したがって、各種プログラムや講演会、シンポジウムを開催し、エコミュージアム活動の担い手を養成し、人づくりを促進することは当面の最重要事項である。

フィールド調査によると、豊栄住民は地域の存在している問題をあまり認識されず、危機感も持っていない。また、町への関心度や地域活動の参加意欲が低下しているというような問題点が存在している³⁶⁾。住民主体の活動が求められるエコミュージアム活動の展開には、地域住民の町に対する意識の改善が重要な課題だと考えられる。まずは地域住民

に地域問題を認識させ、そして地域住民の町に対する関心を喚起し、と同時に住民の地域活動の参加意欲を高めていくことが重要である。なお、地域のことや地域活動に対して態度により、地域住民は積極層、関心層並びに無関心層にタイプ分けられ（佐野、2007）るため、それぞれの地域住民各自の状況により違った事業の展開方向を制定し、エコミュージアム事業に共感を持ってもらう必要性がある。例えば、積極層の力を活用し、エコミュージアム事業に加入してもらったり、無関心層に町の情報を発信し、地域への好奇心を呼び起こしたりし、エコミュージアム活動を理解してもらうような取り組みが必要である。

また、現時点で豊栄町の地域活動の展開状況としては、各地域独自で活動を展開しているのが通常の形であり、町全体としての地域活動が少ない。すなわち、地域活動の共同性の弱さがエコミュージアム活動の推進上の大きな課題である。

前述したように、豊栄住民の地域の魅力を積極的にアピールする意識が低下している現状が存在し、このような住民意識を改善していくこともエコミュージアム活動を推進上の大きな課題だと考えられる。住民の意識を改善した上で、都市や他地域との交流活動の促進や観光客を受け入れられる態勢の形成等のエコミュージアムを活性化することに結びついたものとなる活動の展開も求められる。その際に、豊栄町の特性を活かした特色のある活動をいかに展開していくかもエコミュージアム事業の大きな課題となる。また、地域特性や魅力を外界への発信も重要な課題だと考えられる。主要産業が農業である豊栄町の場合、農業等の産業振興を図りながら、農山村の生活や文化とのふれあいの場を創出したり、特色の持つ各体験施設を活用したりするような方法が有効であろう。

また、エコミュージアム活動を推進していくには、団体やボランティア等の組織によって支えられることが不可欠であるため、町内で目的意識を持ちながら自発的にエコミュージアム活動を支援する団体や組織を設立することも期待されている。

エコミュージアム活動の推進上には、繋がり形成が要求されている。例えば、町内の各地域の間の連携関係を強化すること、各サテライトの繋がり形成、グループ化された各類型の資源の間の繋がり形成、地域資源と地域住民の間の繋がり形成等も重要な課題であろう。さらに、エコミュージアム活動を広げ、観光や農・商業につながっていくことにより、産業や経済の活性化を図るのも重要だと考えられる。

5) 豊栄町におけるエコミュージアム手法の可能性についての検討

前述したように、豊栄町の現状から見ると、エコミュージアムという事業の導入が望ま

しいと考えられる。なお、豊栄町の現状は日本のエコミュージアム先進事例としての山形県朝日町この前の状況とよく似ているため、朝日町の経験を参照したら、エコミュージアム事業の導入が可能であり、エコミュージアム事業により町の現状を打開できると考えられる。また、豊栄町内には数多くの地域資源が存在し、地域資源のあり方もエコミュージアム活動の要求にふさわしいと思われる。

本稿のベースとした「豊栄住民の生活環境に対する意識調査」の結果から分析しても、エコミュージアムという理念は住民の意識と相当程度の一致性を持っていると判断される。言い換えれば、エコミュージアム活動の導入は住民の意識要求、特に町の将来を担う若者の新しい発展方式を希望しているような意識傾向に応えられると考えられる。さらに、地域のことに詳しい各地域センターのセンター長もエコミュージアムのような地域活性化の手法の導入を支持する意向を示している。このような住民意識をもとに、もし行政側の支持があり、ハード面が整備されれば、豊栄町におけるエコミュージアムの導入が可能だと考えられる。

VI おわりに

本稿では、まず日本における農山村問題及び農山村地域活性化を整理した。それを踏まえ、農山村地域活性化の手法としてのエコミュージアム論を一つの切り口として、主に東広島市豊栄町における地域資源の利用度評価をめぐって、さらに豊栄住民の意識を分析した上で、豊栄町におけるエコミュージアムづくりの提案を行い、豊栄町エコミュージアムづくりに向けた主な課題や問題点などを整理した。

日本では、1950年代後半から現在に至るまで、農山村が深刻な問題に見舞われている。それを背景に、国レベルにおいて各種農山漁村振興策が実行されたとともに、地域住民が主体の農山村地域活性化の動きも増えつつある。そのような動向に伴い、農山村並びに農山村の地域資源に対する国民意識の変化が見られ、国民が農山村に対する期待も高まってくる。こうした流れのなかで、エコミュージアムという理念は住民主導の活動でありながら、身近に存在する地域資源と農山村の多面的機能を結びつけながら地域活性化を行う形態であるため、今後の望ましい農山村地域活性化の一手法だとされる。

本稿の研究対象地としての東広島市豊栄町は過疎・振興山村に指定され、超高齢化の段階にも入り、他の農山村と同じように厳しい問題に直面している。一方、豊栄町には数多くの地域資源・遺産があり、特色の持つ体験施設も散在し、様々な体験活動を行っている。しかしながら、豊栄町が東広島市と合併した後、町全体としてのまちづくり計画がなくなり、町の将来発展の先が見えなく、地域活動の統合性も弱いというような現実が存在している。したがって、豊栄町の現状に適応できるような地域振興策が要求されている。

そこで、本稿ではまずⅡ章で日本の農山村問題を概観しつつ、日本における国レベルの農山村政策及び地域レベルの農山村地域活性化の流れをまとめた。このような一連の流れから見ると、地域住民が自らの力を発揮し地域づくりを目指していくのが現代日本の農山村地域活性化の新たな方向性であろう。それを踏まえ、地域活性化の方法論としてのエコミュージアムの理念及びその代表事例を紹介しながら、その位置づけについて分析した。エコミュージアムという理念は「住民と行政の二重入力システム」を重視しながら、地域の資源の利・活用も求められ、まさに今後の農山村地域活性化の方向性と合致していると考えられる。

続いて、Ⅲ章では、まず本稿の研究対象地としての豊栄町の自然的状況、社会経済的状況、特にまちづくりの歴史、現在の持っている問題点等についてまとめた。また、豊栄町

の地域資源を概観しつつ、豊栄町の全住民を対象に行ったアンケート調査の結果をもとに、住民の豊栄町における地域資源（30項目）に対する重要度評価及び住民と地域資源の関わり度合いについて分析した。さらに、因子分析を用いて住民の地域資源に対する重要度評価を類型化し、そして抽出した基本因子の因子得点をもとにクラスター分析を行った上で、豊栄町ので地域資源をグループ化した。その結果として、豊栄町ので地域資源を自然型資源、農村型資源、遺跡型資源及び神社型資源の4類型に分けられた。地域資源の重要度評価として、地域住民は農村型資源への重要度評価が最も高く、遺跡型資源に対する重要度評価が一番低いのが明らかになった。住民と地域資源の関わり度合いは、住民の地域資源への重要度評価と正の相関を示している。すなわち、豊栄住民は農村型資源との関わりが最も強いが、その一方で、遺跡型資源との関わり度合いが一番低い。最後に、住民の地域資源の活かし方への認識をまとめると、地域資源を保護し、伝承するような方向性への支持率が最も高いが、その一方で、地域資源を積極的に利・活用しながら地域活性化につながるような意識傾向があまり見せていない。

IV章では、豊栄住民生活環境及び地域活性化に対する意識について分析した。こうした住民意識については、住民全体の意識傾向及び各年齢層の意識傾向に分けてまとめた。アンケートの結果から見ると、豊栄町での居住歴が長い住民が多く、豊栄町で住み続けるという意欲を持っている住民の割合も多い。また、豊かな自然が豊栄町の良いところであり、少子高齢化が豊栄町の問題所在であるという認識を持つ住民が多いことが明らかになった。住民の地域活性化に対する認識については、各年齢層は一定の意識差を見せているものの、住民参加のまちづくりや企業誘致を重視する意識傾向が示している。その一方で、市民団体の養成や地域環境の保全等の手法への支持度が低い。今後の地域の発展方向としては、暮らしよい生活環境づくりが住民の最も望ましい方向性であるのに対して、他の地域との交流や地域の良さをアピールすることによって地域を発展させるような方向性を支持する住民が少ないのが明らかになった。総じて言えば、豊栄住民の意識は一定程度の閉鎖性を持ち、外向きの発展方式をあまり支持されず、その一方で、生活環境づくりのような内発的な発展方式を支持する意識傾向が示されている。

III、IV章の内容を踏まえ、V章では、豊栄町におけるエコミュージアムづくりの提案を練った。まずは、豊栄町におけるエコミュージアムづくりの導入必要性について検討した。豊栄町のこれまでのまちづくりの流れや町の現状、さらに住民の要望等の様々の側面から分析して見たら、現在、豊栄町はエコミュージアム手法の導入が望ましいと考えられる。

また、類型化した4クラスターの地域資源の豊栄町のエコミュージアム構想案での利用方式を検討しながら、豊栄住民の地域資源に対する利用度評価を基準に、豊栄町におけるエコミュージアム構想案に適用する地域資源を再度ピックアップした。それに、豊栄町におけるエコミュージアムの構想案を練り、そのエコミュージアム構造や仕組み、目標像等を具体化した。本稿で練り出した豊栄町のエコミュージアム構想案は、目の前の問題点を解決しつつ、暮らしよい生活環境づくりの再構築及び町の魅力を発信し、地域内外の人に町の魅力を感じさせ、「心のふるさと」を目指していくような基本理念を持つ。続いては、豊栄町のエコミュージアムの実現可能性を検討しながら、エコミュージアム構築に向けた課題や問題点を提示した。最後に、豊栄町におけるエコミュージアム手法の可能性について検討した、

総じて言えば、豊栄町ので地域課題や住民意識、これまでのまちづくりの方向性などの様々な地域条件を背景に、町内においては、エコミュージアム事業の導入が望ましいと考えられる。なお、地域の数多く存在している資源及び地域住民の力をうまく活用し、さらにエコミュージアム活動を支える環境や体制などを整備したら、エコミュージアム活動を豊栄町に導入することが可能だと思われる。その一方で、豊栄町内でエコミュージアム事業を展開するには、マンパワーの不足や地域アイデンティティーの欠如等の一連の問題点や課題を直面している。したがって、こうした地域問題や課題の解決を目指しながら、豊栄町におけるエコミュージアム事業のような地域活性化事業を導入していくのが今後の町の発展方向であろう。

謝辞

本稿の作成にあたり、広島大学総合科学研究科の浅野敏久先生には数々の貴重なご指導と有益なご助言を賜りました。本稿のアンケート分析にあたっては、広島大学総合科学研究科のフंक・カロリン先生から貴重なご助言を頂きました。豊栄町でのアンケート調査にあたっては、豊栄町清武西、清武、吉原、乃美、能良、安宿の6地域の地域センターの方々からの御協力、御支援をいただきました。聞き取り調査にあたっては、上記の各地域センターのセンター長及び東広島市豊栄支所長にお世話になっておりました。また、東広島市産業部農林水産課榎川信幸氏、豊栄町住民の高松哲男氏から貴重な資料を御提供いただきました。末筆ながら、アンケートを丁寧に回答していただいた豊栄住民及び調査にご協力をいただいた方々ご一同様に厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 人口の社会的減少とは若年層をはじめ、人口が就学・就業のため都市に流出する事態である。
- 2) 農林水産省の HP「振興山村市町村一覧（平成 25 年 4 月）」による。
- 3) エコミュージアムの定義や理念は『エコミュージアム憲章 2009』等により筆者がまとめた。
- 4) http://www.maff.go.jp/j/nousin/tyusan/siharai_seido/s_about/農林水産省の HP による。
- 5) <http://www.chugoku.meti.go.jp/policy/chusyo/115.htm> 経済産業省中国経済産業局の HP による。
- 6) http://www.maff.go.jp/j/nousin/noukan/nougyo_kinou/農林水産省 HP による。
- 7) 農林水産省 HP の内容により筆者が整理した。
- 8) 農林水産省『山村振興事例 1』の内容により筆者がまとめた。
- 9) 福島県昭和村の HP 及び農林水産省『山村振興事例 1』の内容により筆者が整理した。
- 10) エコミュージアムに関する文献資料により筆者がまとめた。
- 11) 新井重三（1995）：『実践エコミュージアム入門～21 世紀の町おこし』の内容より筆者が要約
- 12) 大原一興（1999）：『エコミュージアムへの旅』の内容により筆者がまとめた。
- 13) 朝日町の HP 及び文献資料による筆者がまとめた。
- 14) 阿智村のエコミュージアムの展開状況は文献資料及び自治体の HP の内容により筆者がまとめた。
- 15) 豊栄町各地域の地域センター長へのインタビュー調査（2013 年 10 月 23 日実施）の内容による。
- 16) 東広島市農政課の役員へのインタビュー調査の内容による。
- 17) 豊栄町「農事組合法人 ゆいの里の概要」、「農事組合法人 グリーン 8 吉原西の概要」の内容による。
- 18) 前掲 15)。
- 19) 前掲 15)。
- 20) 前掲 15)。
- 21) 『豊栄町史 近代史編』及び前掲 15) の聞き取り調査の内容により筆者が整理した。
- 22) 前掲 15)。
- 23) 前掲 15)。
- 24) 前掲 15)。
- 25) 前掲 15)。
- 26) 前掲 15)。
- 27) 前掲 15)。
- 28) 「東広島市第 2 次都市計画マスタープラン」（p91）の内容による。
- 29) 県央協議会のパンフレットの内容による。県央三町で行われている体験事業は、「心のふるさと県央協議会」を事業主体とし、東広島の県央の町、豊栄・福富・河内町の 3 町の事業所が協力し、体験や食事、イベント等を連携し、訪れるお客様に「心の安らぎ」や「癒し」を提供している事業である。
- 30) 東広島市 HP、平成 25 年度シティプロモーション認定事業一覧の内容による。
(<http://www.city.higashihiroshima.hiroshima.jp/site/citypromotion/h25-ninnteijigyou.html>)

-
- 3 1) 前掲 15)。
 - 3 2) 前掲 15)。
 - 3 3) <http://green.mond.jp/jimotogaku.html> の内容による。
 - 3 4) 前掲 15)。
 - 3 5) 前掲 30)。
 - 3 6) 前掲 15)。

参考文献

- 安達生恒（1981）：『過疎再生の道』、日本経済評論社、p230～233
- 新井重三（1995）：『実践エコミュージアム入門-21世紀のまちおこし』、牧野出版
- 荒木康太他（2007）：「京丹後市におけるアイデンティティの特質」、エコミュージアム研究 No.12、p56～64
- 石原照敏、吉兼秀夫他（2000）：『新しい観光と地域社会』、古今書院
- 井原満明（2003）、「コミュニティ（地域）再生の課題とエコミュージアム～日本における内発型地域経済の活性化を目指したエコミュージアムの展開試論～」、エコミュージアム研究 No.9、p90、91
- 井原満明（2006）：「日本のエコミュージアムの事例と展開課題」、東京学芸大学連続講演会第3回資料
- 大原一興（1999）：『エコミュージアムへの旅』、鹿島出版会、p15～16
- 岡橋秀典（1989）：「現代日本における山村研究の課題と展望」、『人文地理』第41巻第2号、p145
- 小田切徳美（2009）：『農山村再生～限界集落問題を越えて～』、岩波書店
- 大野晃（2005）：「限界集落-その実態が問いかけるもの」、『農業と経済』2005年3月号、p5、昭和堂
- 梶田真（2012）：「ヨーロッパにおけるボトムアップ型・内発型農村開発をめぐる研究と議論～LEADER事業を中心に～」、地理学評論 85-6、p587～607
- 国土庁（1987）：『第4次全国総合開発計画』、国土庁HP
- 小松光一編著（1999）：『エコミュージアム～21世紀の地域おこし～』、p77
- 佐藤快信（2003）：「地域づくりにおける地域連携と地域資源」、[地域総研所報 1巻1号、p1～8（2003）、一般論文]
- 佐野秀樹（2007）：「地域でのエコミュージアム活動推進の課題と展望-神奈川県相模原市城山町での活動の検証より-」、エコミュージアム研究 No.13、日本エコミュージアム研究会
- 斉藤晴造編著（1976）：『過疎の実証分析-東日本と西日本の比較研究-』法政大学出版局
- 篠原重則（1991）：『過疎地域の変貌と山村の動向』、大明堂
- 島越浩之、ほか（2007）：『むらの社会を研究する～フィールドからの発想』、日本村落研究学会、第5章、p125
- 人文地理学学会編集（2013）：『人文地理学事典』、V.地域にアプローチ人文地理学（2.農山漁村を研究する地理学）、p406
- 総務省（2013）：『過疎法の延長及び今後の見直しについて』、総務省HP
- 丹青研究所（1993）：『ECOMUSEUM～エコミュージアムの理念と海外事例報告』、p10
- 竹中克行他（2009）：『人文地理学』、第4章、グローバル化する農業と農村の再編、ミネルヴァ書房
- 筒井一伸（1999）：「中国地方の過疎山村における一地域振興の実態分析-内発的發展論におけるチェックポイントを用いて-」
- 鳥井幸恵ら（2008）：「エコミュージアムの事業における地域資源を用いた学習活動に関する研究」、ランドスケープ研究 71(5)、日本造園学会、p893
- 豊栄町（2004）：『豊栄町史 近現代編』
- 長谷川昭彦（1987）：『地域の社会学』、日本経済評論社、p147
- 西川明子（2004）、「農村地域における高齢化と新規就農者」、総合調査「少子化・高齢化

とその対策」、p233

西野寿章（1993）：「過疎地域における「むらおこし」の展開過程とその課題」、『変革の企業経営』（高崎経済大学附属産業研究所）、日本経済評論社、p55～71

西野寿章（1994）：「過疎山村の現状と維持条件-埼玉県両神村を事例として」、西野研究室室刊

西野寿章（2007）：「現代山村地域振興論」、原書房

農林水産省農村振興局（2008）：「農村の現状と方向」、農林水産省 HP

農林水産省（2008）：『農村の現状と振興施策の展開方向』、農林水産省農村振興局

農林水産省（2009）：「農村の振興に関する施策の整理」、農林水産省 HP

農林水産省（2009）：『中山間地域等直接支払制度の最終評価』、農林水産省 HP

農林水産省（2011）：『耕作放棄地の現状について』、農林水産省 HP

農林水産省（2010）：『山村の元気は、日本の元気-山村振興事例集』、農林水産省 HP

林良博他（2005）：『ふるさとの資源の再発見～農村の新しい地域づくりをめざして』、家の光協会

東広島市（2008）：『豊栄町史 通史編』

藤田佳久（1986）：「『新過疎時代』と社会的空白地域」、『1986 年度 国民の経済白書』、日本評論社、p140～154

保母武彦（1983）「農山村の内発的発展への試行」自治体問題研究所編『地域づくり論の新展開—地域活力の再生・「内発的発展」論をめぐる』自治問題研究所

保母武彦（1996）：『内発的発展論と日本の農山村』、岩波書店、p19～20

三井田圭右（1994）：「過疎地域とむらおこし」、『生活と環境』、技術書院、p137～149

宮本憲一（1982）、『現代の都市と農村-地域経済の再生を求めて-』、日本放送出版協会、p242-245

『山村振興法』

『過疎地域対策緊急措置法』

参考資料

豊栄住民の生活環境に対する意識調査

I. まず、回答されるご本人様についてお尋ねします。

問1. あなたの性別に○をつけてください。

- 1 男性 2 女性

問2. あなたの年齢に○をつけてください。

- 1 20 歳未満 2 20 歳以上 30 歳未満 3 30 歳以上 40 歳未満
4 40 歳以上 50 歳未満 5 50 歳以上 60 歳未満 6 60 歳以上 70 歳未満
7 70 歳以上 80 歳未満 8 80 歳以上

問3. 現在のあなたの職業についてお尋ねします。あてはまるものに○をつけてください。

- 1 農林水産業 2 会社員 3 公務員・団体職員
4 パートタイム・アルバイト 5 自営業(農林水産業以外) 6 主婦・主夫
7 学生 8 その他 ()

II. あなたが暮らしている地域について、お尋ねします。

問4. あなたは現在地にお住まいになって何年になりますか。あてはまるものに○をつけてください。

- 1 50 年以上前から 2 30 年以上 50 年未満
3 20 年以上 30 年未満 4 10 年以上 20 年未満
5 5 年以上 10 年未満 6 5 年未満

問5. あなたはこれからも、豊栄町内にずっと住み続けたいですか。あてはまるもの 1 つに○をつけてください。

- 1 できるだけ住み続けたい
2 引っ越したいが今のところその計画はない
3 数年のうちに引っ越しをするつもり
4 近々引っ越しを計画している。
5 その他 ()

問6. 豊栄のよい点は何だと感じますか。あなたの思いに最も近いもの すべて に○をつけてください。(複数回答可)

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 1 交通の便がよい | 2 豊かな自然がある |
| 3 豊かな文化と歴史をもつ | 4 自然災害が少ない |
| 5 広島県の県央に位置する | 6 行政サービスが充実している |
| 7 医療・福祉サービスが充実している | 8 住民の相互関係が強い |
| 9 事件や事故が少なく、治安がよい | 10 その他（ ） |

問7. 以下に示した場所・もの・行事は、あなたにとってどのくらい大切な豊栄の宝といえますか。

1～5の番号の1つに○をつけてください。また、それらを訪れたり、体験したり、味わったりしたことがありますか。有・無のいずれかに○をつけてください。

		大切に ある	まあ 大切	どちらともい えない	あまり大切に ない	大切にない	訪れたり、体験したり したことの有無	
自然	板鍋山	5	4	3	2	1	有	無
	天神嶽	5	4	3	2	1	有	無
	どんどん淵峡	5	4	3	2	1	有	無
	棕梨川	5	4	3	2	1	有	無
	八木川	5	4	3	2	1	有	無
	豊栄大池	5	4	3	2	1	有	無
	シバザクラ	5	4	3	2	1	有	無
	アカマツ	5	4	3	2	1	有	無
	ミツバツツジ	5	4	3	2	1	有	無
	オオサンショウウオ	5	4	3	2	1	有	無
	ため池の植物	5	4	3	2	1	有	無
	里山景観	5	4	3	2	1	有	無
歴史・文化・行事	どまんなかヘソまつり	5	4	3	2	1	有	無
	豊栄踊り	5	4	3	2	1	有	無
	神楽	5	4	3	2	1	有	無
	乃美本宮八幡神社	5	4	3	2	1	有	無
	畝山神社	5	4	3	2	1	有	無
	国津神社	5	4	3	2	1	有	無
	伝説、民話、民謡	5	4	3	2	1	有	無
	田舟	5	4	3	2	1	有	無
	古墳・古墓	5	4	3	2	1	有	無
	窯跡遺跡(大山窯跡など)	5	4	3	2	1	有	無
	製鉄遺跡(見土遺跡)	5	4	3	2	1	有	無
	鍛冶屋古代住居跡	5	4	3	2	1	有	無
	城跡(宇都山城跡など)	5	4	3	2	1	有	無
	米	5	4	3	2	1	有	無
農・食	りんご	5	4	3	2	1	有	無
	マツタケ	5	4	3	2	1	有	無
	手打ちそば	5	4	3	2	1	有	無
	田園風景	5	4	3	2	1	有	無

問8. 問7であなたが大切と考えたものの利用はどうするのがよいでしょうか。あなたの考えにも

っとも近いもの1つに○をつけてください。

- 1 次の世代に守り伝える
- 2 商品化したり、観光資源として開発したりする
- 3 保全と利用のバランスをとる
- 4 資源として活かせるように道路や情報網などの社会基盤を整備する
- 5 学校教育や生涯学習に利用する
- 7 関連するイベントを開催する
- 8 活用する必要はない
- 9 その他（ ）

問9. 豊栄町で問題になっていることは何だと思いますか。もっとも問題だと思うもの

1つに○をつけてください。

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| 1 住民の相互関係が弱まっている | 2 高齢者対策 |
| 3 子供の減少 | 4 教育環境の悪化 |
| 5 買い物などの利便性の低下 | 6 全般的な行政サービスの低下 |
| 7 治安・防災対策 | 8 交通安全 |
| 9 自然の破壊や良い景観の減少 | 10 騒音や振動、大気汚染など |
| 11 ゴミ出しルールなど住民の公共心の低下 | 12 医療・福祉環境の悪化 |
| 13 働く場や機会が少ないこと | 14 賑わいや活気が失われていること |
| 15 農業の衰退 | 16 その他（ ） |

問10. 豊栄町で行われる活動の中で、もし参加するならどのような活動に参加したいですか。当て

はまるもの1つに○をつけてください。

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1 児童・青少年にかかわる活動 | 2 健康・福祉関係の活動 |
| 3 教育・文化関係の活動 | 4 スポーツ関係の活動 |
| 5 環境の保全・整備の活動 | 6 まちづくり・地域活性化の活動 |
| 7 消費生活に関わる活動 | 8 農業・企業等の産業活性の活動 |
| 9 防災・安全・防犯関係の活動 | 10 女性の地位向上の活動 |
| 11 人権・平和活動 | 12 異文化理解・国際交流の活動 |
| 13 住民の親睦を図る活動 | 14 地域の活動に参加したくない |
| 15 その他（ ） | |

問11. 豊栄町で行われる活動のなかで、あなたがもっとも重要だと思うもの1つに○をつけてくだ

さい。

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1 児童・青少年にかかわる活動 | 2 健康・福祉関係の活動 |
| 3 教育・文化関係の活動 | 4 スポーツ関係の活動 |
| 5 環境の保全・整備の活動 | 6 まちづくり・地域活性化の活動 |
| 7 消費生活に関わる活動 | 8 農業・企業等の産業振興の活動 |
| 9 防災・安全・防犯関係の活動 | 10 女性の地位向上の活動 |
| 11 人権・平和活動 | 12 異文化理解・国際交流の活動 |
| 13 住民の親睦を図る活動 | 14 その他（ ） |

問 12. 地域活性化のために何をすべきだと思いますか。あなたの考えにもっとも近いもの 1 つに○をつけてください。

- | | |
|---------------------|---------------|
| 1 住民の意識啓発 | 2 住民参加のまちづくり |
| 3 他の地域との連携 | 4 地域資源の積極的な活用 |
| 5 福祉の充実 | 6 農業の振興 |
| 7 企業誘致 | 8 観光の振興 |
| 9 地域活性化に関わる市民団体を育てる | 10 地域環境の保全 |
| 11 その他（ ） | |

問 13. 地域の発展方向としてどうすることが望ましいですか。あなたの考えにもっとも近いもの 1 つに○をつけてください。

- 1 観光開発に力を入れる
- 2 地域特性を活かした元気な農業を展開する
- 3 地域の資源や魅力を再発見し、その活かし方を工夫する
- 4 広報・宣伝活動に力を入れて地域のよさをアピールする
- 5 都市との交流を強化する
- 6 人材を育成する
- 7 暮らしよい生活環境づくりを重視する
- 8 その他（ ）

Ⅲ. あなたが暮らしている地域の自然について、お尋ねします。

問 14. あなたは豊栄の自然が好きですか。あてはまるもの 1 つに○をつけてください。

- 1 とても好きだ
- 2 まあまあ好きである
- 3 どちらともいえない
- 4 あまり好きではない
- 5 全く好きではない

問 15. 豊栄町の自然の良さは何ですか。あなたの考えに近いもの すべてに○をつけてください。(複数回答可)

- 1 きれいな星空が見える
- 2 空気が澄んでいる
- 3 昔のままの自然が残っている
- 4 自然と人の生活とに結びつきがある
- 5 オオサンショウウオなどの貴重な動植物が生息している
- 6 きれいな川がたくさんある
- 7 四季の風景を感じることが出来る
- 8 緑の豊かな山々に囲まれている
- 9 その他 ()

問 16. これからの豊栄にどのような自然を残したいですか。あなたの考えに近いもの すべてに○をつけてください。(複数回答可)

- 1 きれいな星空
- 2 澄んだ空気
- 3 昔ながらの自然
- 4 人の生活と結びつきのある自然
- 5 オオサンショウウオなどの貴重な動植物
- 6 生き物が多く生息している環境
- 7 きれいな川がたくさんある環境
- 8 四季を感じる事が出来る風景
- 9 緑の豊かな山々に囲まれている環境
- 10 その他 ()

問 17. あなたが豊栄町内で経験したことがあるものすべてに○をつけてください。(複数回答可)

- 1 山菜や木の実を採集する
- 2 川で魚や貝などを採る
- 3 野鳥の観察をする
- 4 星の観測をする
- 5 川やため池で泳ぐ
- 6 自然と関わることをしたことがない
- 7 その他 ()

問 18. 豊栄町内には特別天然記念物のオオサンショウウオ（ハンザキ）が生息していますが、あなたはオオサンショウウオについてどのくらい知っていますか。あてはまるもの 1つに○をつけてください。

- 1 エサや産卵行動などの生態について知っている
- 2 よく見られる場所を知っている
- 3 どのような姿なのか知っている
- 4 名前は知っている
- 5 全く知らない
- 6 その他 ()

問 19. あなたのオオサンショウウオとの関わりについて、あてはまるもの全てに○をつけてください。(複数回答可)

- 1 見たことがある
- 2 触ったことがある
- 3 捕まえたことがある
- 4 食べたことがある
- 5 飼ったことがある
- 6 生態について学んだことがある
- 7 写真や絵、映像などを見たことがある
- 8 以上のどれも経験したことが無い
- 9 その他 ()

問 20. あなたはオオサンショウウオの保護活動が豊栄町内で行われていることを知っていますか。

あてはまるもの1つに○をつけてください。

- 1 知っている 2 話には聞いたことがある 3 知らない

問21. あなたはオオサンショウウオの保護活動を誰が積極的に行うべきだと思いますか。それぞれ

の項目に対して、あなたの考えに近いもの 1 つに○をつけてください。

	中心となって関わるべき	積極的に関わるべき	関わるべき	関わる必要はない
行政（東広島市）	4	3	2	1
行政（豊栄）	4	3	2	1
豊栄の住民	4	3	2	1
生息河川周辺の住民	4	3	2	1
地域の有志	4	3	2	1
保護団体	4	3	2	1
安佐動物公園	4	3	2	1
広島大学	4	3	2	1

問22. あなたはオオサンショウウオを保護したり、利用したりすることについて、何をすべきだ

と思いますか。もっとも重要だと思うもの1つに○をつけてください。

- 1 川や周辺の環境を観察する
- 2 生息する河川の水質を向上させる
- 3 生息地周辺のゴミを拾う
- 4 オオサンショウウオの勉強会を行う
- 5 観光に利用する
- 6 まちのシンボルにする
- 7 小・中学校などの環境教育で利用する
- 8 生涯学習で利用する
- 9 オオサンショウウオに関連する商品を開発する
- 10 その他（ ）